

人類の 進歩 のための 解決策

L2Q問い方システムは
欠けている教育経路である

SEAN GRINYER

worldeducation.online
q2l.online

目次

なぜ子どもたちにはL2Q問い方 ツールキットが必要なのか	4-13
---------------------------------------	------

なぜL2Qシステムは欠けている 教育経路なのか	14-17
----------------------------------	-------

L2Q問い方ツールキット

1. 出所と起源	18-44
2. 証拠基準	45-73
3. 誘因と利得	74-99
4. 性質と一貫性	100-125
5. 問うことへの許可	126-152
6. 感情的影響	153-191
7. ナラティブと現実	192-222
8. 心理的影響	223-246
9. どこでも同じ基準を適用する	247-269

人類の進歩	270-296
-------------	---------



見ることができないものからは学べない

なぜ子どもたちにはL2Q問い方ツールキットが必要なのか

子どもたちの心を守り、学びを前進させ、真実を見分け、欺瞞の反復を断ち切るためにL2Q問い方ツールキットを与える

子どもたちの心と学びは、何が自分たちを形づくっているのかを十分に理解する前から、世界環境によって形づくられている。

だからこそ、子どもたちにはL2Q問い方ツールキットが必要である。

L2Q問い方ツールキットは、通常の教育資源ではない。

これはBook of Evidenceから開発され、World Education Onlineを通じて組織された、世界にとって新しい構造化教育方法である。子どもたちに、現実の世界環境への問い方を学び、真実を見分け、独立した思考を発達させ、作られた嘘が自分たちの心と学びを形づくるのを止めるための構造化された方法を与える。

L2Q問い方ツールキットは、子どもたちに何を考えるべきかを教えるものではない。

L2Q問い方ツールキットは、情報、大人、学校、システム、金銭、権威、ナラティブ、行動、心理的影響、そして自分自身の前提を含め、示されるものをすべて同じ基準で問うための構造化された方法を子どもたちに与える。

それは、何が真実かを検証し、欺瞞を見抜き、心理的影響を理解し、どこでも同じ基準を適用することを教える。

これは、単により多くの情報を学ぶことだけの話ではない。

作られた嘘、繰り返されるナラティブ、感情的影響、恐怖、権威、沈黙、依存、欺きが子どもたちの世界認識を形づくる前に、世界環境を問うための道具を与えることである。

子どもたちが適切な問い方を教えられないと、その心は、繰り返され、守られ、隠され、正常なものとされ、真実として示されるものにさらされたままになる。

作られた嘘は、子どもたちを誤らせるだけではない。

それは、子どもたちが周囲の世界をどう見て、学び、考え、信頼し、理解し、反応するかに影響する。

心理的影響と子どもたちの心

心理的影響は、L2Q問い方ツールキットの最も重要な部分の一つである。

心理的影響が重要なのは、子どもたちがそれを特定する道具を持つ前に、欺瞞が心を通して作用するからである。

繰り返されるもの、報われるもの、恐れられるもの、隠されるもの、正常なものとされるもの、守られるもの、または真実として示されるものが、子どもたちの認識、学び、信頼、理解、行動を形づくる。

情報、物語、システム、権威、恐怖、圧力、報酬、罰、沈黙、反復、感情的影響が自分たちの心にどう影響するのかを問うための道具を、子どもたちに与えなければならない。

子どもたちが心理的影響を問うことを学ぶと、世界環境が人々を内側からどのように形づくるのかを理解し始める。

その理解が子どもたちの心を守る。

それが学びを前進させる。

それは独立した思考を発達させる。

それが子どもたちに真実を見分ける能力を与える。

作られた嘘が受け入れられ、繰り返され、受け継がれるのではなく、問われ、検証され、明らかにされるため、欺瞞が子どもたちの心を通る支配経路ではなくなる。

心の健やかさと欺瞞の除去

欺瞞は真実を隠すだけではない。

それは、子どもたちがどう感じ、考え、信頼し、学び、世界を見るかに影響する。

子どもたちが、作られた嘘、繰り返されるナラティブ、恐怖、沈黙、感情的影響、圧力、権威、欺きに囲まれると、世界は本来必要な以上に暗く、混乱し、脅威に満ち、希望のないものに見えるようにされる。

それは子どもたちの心に影響する。

それは子どもたちの学びに影響する。

それは世界を理解することへの子どもたちの自信に影響する。

それは真実であるものを信頼する能力に影響する。

だからこそL2Q問い方ツールキットは、教育を通して子どもたちの心を守り、学びを強化し、心の健やかさを改善することの中心にある。

子どもたちに適切に問うための道具が与えられると、欺瞞はその認識への支配力を失い始める。

作られた嘘は、吸収されるのではなく問われる。

恐怖に基づくナラティブは、繰り返されるのではなく検証される。

権威は、盲目的に受け入れられるのではなく検証される。

感情的影響は、思考を支配するのではなく認識される。

沈黙は、隠れた害を続けさせるのではなく問われる。

子どもたちは、理解する方法を教えられていない世界の中に一人で置き去りにされない。

自分たちの心を形づくっているものを問うための構造化された方法が与えられる。

真実と作られた嘘を分ける方法が与えられる。

欺瞞、恐怖、ナラティブ、沈黙、心理的影響によって作られた暗い側面だけを見るのではなく、世界をより明確に見る方法が与えられる。

欺瞞が子どもたちの理解から取り除かれると、世界は絶望的で、混乱し、暗いものとして見える必要がなくなる。

子どもたちは、問題が、行動、システム、誘因、沈黙、ナラティブ、そしてL2Qの構造化され、証拠に基づく問い方経路の欠如を通して作られ、繰り返され、守られ、続けられていることを見始める。

つまり世界は、子どもたちが問い、理解し、そこから学び、改善を助けるものになる。

これは、子どもたちがもはや世界の重みをただ吸収するだけではないため、心の健やかさを強化する。

子どもたちは、それを理解する方法を学んでいる。

それを問う方法を学んでいる。

何が真実かを見る方法を学んでいる。

独立した思考を発達させる方法を学んでいる。

子どもたちにL2Q問い方ツールキットを与えることは、世界に対する認識から欺瞞を取り除く方法を与えることで、その心を守る。

欺瞞が子どもたちの心を通る経路を失うと、恐怖、混乱、偽りの暗さ、繰り返されるナラティブは、現実をどう見るかを形づくる力を失う。

沈黙、金銭、そして欺瞞を守る仕組みを問う

欺瞞は沈黙によって守られるため、子どもたちにはL2Q問い方ツールキットが必要である。

沈黙は空ではない。

沈黙は、問われていないものを守る。

沈黙は、人々が言うことを恐れているものを守る。

沈黙は、システムが明らかにされたくないものを守る。

沈黙は、金銭、依存、雇用、地位、評判、権威、恐怖が隠したままにしているものを守る。

これは重要である。なぜなら、子どもたちは沈黙がすでに作用している世界の中で教育されるからである。

子どもたちは、自らも教えられ、訓練され、報酬を受け、教育を受けたシステムの中で情報を教え、届け、繰り返し、評価する役割に置かれた大人から教わる。

だからといって、教師が悪い人だという意味ではない。

教育そのものが、L2Qが子どもたちに問うことを教えるのと同じ世界環境の中にあるという意味である。

現在の教育は、沈黙の背後にある仕組みを問うことを子どもたちに適切に教えていない。

金銭が何を守るのか、依存が何を支配するのか、雇用が何を要求するのか、権威が何を妨げるのか、評判が何を隠すのか、恐怖が何を沈黙させるのか、誘因が何を形づくるのか、システムが何を続けさせるのかを問うことも、適切に教えていない。

子どもたちが沈黙を問うことを教えられないと、示されたままの世界を受け入れることを学ぶ。

繰り返されるものは学ぶが、隠されているものは学ばない。

承認されているものは学ぶが、守られているものは学ばない。

教えられるものは学ぶが、避けられているものは学ばない。

作られた嘘、欺瞞、恐怖、依存、繰り返されるパターンをそのまま維持する仕組みを理解しないまま、世界環境の中で機能することを学ぶ。

L2Q問い方ツールキットは、その仕組みを問う方法を子どもたちに与える。

それは次のように問うことを教える。

何が語られていないのか？

なぜそれは語られていないのか？

沈黙から誰が利益を得るのか？

金銭は何を守るのか？

依存は何を支配するのか？

恐怖は何を妨げるのか？

権威は、人々が何を問うことを止めるのか？

人々が沈黙するために、どの繰り返されるパターンが続いているのか？

だからこそ沈黙を問うことは、子どもたちの心を守り、学びを前進させるために不可欠である。

子どもたちが沈黙を問うことを学ぶと、教育、システム、権威、ナラティブ、金銭、繰り返される行動の表面の背後に隠されているものを見始める。

沈黙が何を守っているかを見ると、欺瞞の背後にある仕組みを理解し始める。

欺瞞の背後にある仕組みを理解すると、独立した思考が発達する。

独立した思考が発達すると、作られた嘘は子どもたちの心を通る経路を失う。

このようにL2Q問い方ツールキットは、世界に対する認識から欺瞞を取り除く方法を子どもたちに与える。

示されるもの、隠されるもの、守られるもの、繰り返されるもの、金銭が支払われるもの、恐れられるもの、沈黙させられるもの、そして真実として示されるものを問う能力を与える。

これは教育改善の中心である。なぜなら、子どもたちに情報を繰り返すことを教えながら、周囲の世界環境を形づくる沈黙、金銭、依存、誘因、権威を問うことを教えない限り、教育は改善できないからである。

なぜこれがQ2LとYoung Questionersの中心なのか

これはQ2LとYoung Questionersの中心である。

子どもたちは、親、教師、養育者、学校、教育環境、責任ある大人を通じて安全に到達される。そうすることで、同じ世界によってそれを繰り返す存在へと形づくられる前に、適切に問うための道具を与えられ、現実の世界環境から学び、独立した思考を発達させる。

役割は、子どもたちに何を考えるべきかを教えることではない。

役割は、子どもたちが問い、見て、理解し、真実を見分け、心を守り、学びを前進させ、現実の世界環境から学ぶためのL2Qの方法を与えることである。

子どもたちは、大人から学ぶだけではない。

子どもたちは、他の子どもたちから学ぶ。

互いを観察する。

互いに影響を与える。

考え、行動、習慣、関心、理解、思考の仕方を互いに共有する。

子どもたちの中で問う力が発達すると、それは子どもから子どもへ広がる。

子どもたちの中で理解が発達すると、それは子どもから子どもへ広がる。

子どもたちの中で独立した思考が発達すると、それは子どもから子どもへ広がる。

問うことを学んだ子どもは、他の子どもが問うことを学ぶのを助ける。

理解することを学んだ子どもは、他の子どもが理解することを学ぶのを助ける。

独立した思考を発達させた子どもは、他の子どもが独立した思考を発達させるのを助ける。

だからこそ、子どもたちは変化の主要な経路である。

その効果は一人の子どもで止まらない。

それは、子どもたちの集団、教室、学校、地域社会、そして将来世代へと広がる。

子どもたちが問うことを学ぶと、見始める。

見始めると、理解し始める。

理解が発達すると、独立した思考が発達する。

独立した思考が発達すると、欺瞞はその経路を失う。

欺瞞がその経路を失うと、欺瞞から生まれる害も、人々、教育、システム、社会を通る経路を失う。

だからこそ、子どもたちに適切に問う能力を与えることは、教育が行わなければならない最も重要なことの一つである。

それは子どもたちの心を守る。

それは学びを強化する。

それは独立した思考を発達させる。

次の世代に真実を見分ける能力を与えることで、世界から欺瞞を取り除く。

子どもたちには、適切に問うための道具が必要である。

それが学びを前進させる方法である。

それが独立した思考を発達させる方法である。

それが欺瞞が経路を失う方法である。

それが、世界が改善するように教育が改善する方法である。

真実に基づく世界は、子どもたちに適切に問うための道具が与えられるときに始まる。

なぜL2Q構造化・証拠に基づく問い方システムは欠けている教育経路なのか

L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムが異なるのは、それがどこから生まれたかに理由がある。

それはBook of Evidenceから開発された。

Book of Evidenceは、30年以上にわたる日時記録のある直接の経験、証拠、公的記録、異議提示、そして世界環境そのものを通して示された繰り返しのパターンを記録した。

証拠が積み重なるにつれ、一つの矛盾がますます明確に見えるようになった。

問うことはすでに存在していた。

それでも反復は続いた。

同じ欺きが続いた。

同じ沈黙が続いた。

同じ依存が続いた。

同じ矛盾が続いた。

同じ繰り返しのパターンが続いた。

Book of Evidenceが明らかにしたのは、問うことの欠如ではなかった。

それは、問うことがすでに存在している一方で、同じ世界が繰り返し続けていることを明らかにした。

この矛盾は、L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムの核心にある。

問うことがすでに存在していたのなら、なぜ同じパターンが続いたのか？

Book of Evidenceは、同じ矛盾を繰り返し明らかにした。

問うことはすでに存在していた。

それでも反復は続いた。

これは、問題が問うことの不在ではなかったことを示した。

問題は、世界環境そのものへの問い方を学ぶための、構造化され、証拠に基づく教育経路が存在しないことだった。

人々は質問をしても、なお周囲の世界を繰り返すことができる。

人々は質問をしても、なおその反復を生み出している同じ世界環境によって形づくられたままでいられる。

人々は質問をしても、なお繰り返しのパターンを受け継ぎ、受け入れ、守り、続けることができる。

したがって、問うことが存在するという事実は、人々が問い方を教えられてきた証拠ではない。

問うことが存在するという事実は、人々が何が反復を生み出しているのかを理解する方法を教えられてきた証拠でもない。

欠けていた要素は、より多くの情報ではなかった。

情報はすでに存在していた。

欠けていた要素は、より多く問うことではなかった。

問うことはすでに存在していた。

欠けていた要素は、世界環境そのものへの問い方を学ぶための、構造化された証拠に基づく教育経路だった。

問うことがすでに存在していたにもかかわらず、繰り返し続いたものを検証するための、構造化され、証拠に基づく教育経路。

反復を生み出す仕組みを検証するための、構造化され、証拠に基づく教育経路。

その欠けていた経路が、L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムとなった。

L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムは、Book of Evidenceを通して確立された証拠の基盤から開発された。

それは、Book of Evidenceが、問うことがすでに存在していたにもかかわらず続く繰り返しのパターンを明らかにしたために開発された。

それは、Book of Evidenceが欠けている教育経路を明らかにしたために開発された。

それは、Book of Evidenceが、問うことと問い方を学ぶことは同じではないと示したために開発された。

L2Qは、問うことがすでに存在していたにもかかわらず繰り返し続いたものを検証するために開発された。

L2Qは、反復によって生み出された結果だけを検証するのではなく、反復を生み出す仕組みを検証するために開発された。

L2Qは、世界環境の中で単に機能するのではなく、世界環境を検証するために開発された。

L2Qは、人々が世界環境の中で単に機能するのではなく、それを理解できるようにするために開発された。

だからこそ、L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムは異なる。

だからこそ、L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムは、欠けている教育経路を表している。

問うことの出所と起源は重要である。

L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムの出所と起源は重要である。

L2Q構造化・証拠に基づく問い方システムは、Book of Evidenceを通して確立された証拠の基盤から生まれた。

そのシステムがどこから生まれたかを理解することは、なぜそれが異なるのかを理解する第一歩である。

だからこそ、セクション1は「出所と起源」から始まる。

セクション1 - 出所と起源

出所と起源とは本当は何か

出所と起源は「問い方を学ぶ (L2Q)」問い方ツールキットの基盤である。なぜなら、すべては情報がどこから来るのか、そして何がそれを形づくっているのかから始まるからである。

人々は常に情報に囲まれているが、それを適切に検証する方法も、自分たちを取り囲む世界環境から学ぶ方法も教えられていない。

人々には情報が示される。

人々は情報を言われる。

人々は情報を教えられる。

人々は情報を記憶することを期待される。

人々は情報を繰り返すことを期待される。

人々は情報を実行することを期待される。

人々は情報を擁護することを期待される。

しかし人々は、示されているものをどう問い、見て、理解し、そこから学ぶかを教えられていない。

人類は現在、存在する中で最大の学習環境の内側に生きている。それでも、そこから学ぶ方法を適切に教えられていない。

人々は、理解する方法を適切に教えられていない世界の中で機能するままにされてきた。

世界環境が自分たちの心、信念、感情、信頼、行動、認識、理解をどのように形づくるのかを、構造化され、証拠に基づく教育経路を通して教えられていない。

金銭、依存、権威、沈黙、ナラティブ、反復、恐怖、誘因、到達範囲、地位、作られた嘘が人類にどう影響するのかも教えられていない。

世界環境そのものが学習環境である。

それは常に、人類に学ぶ機会を示している。

人々は、存在する中で最大の学習環境の中にすでに立っているのに、教えられるのを待っていることが多い。

したがって世界環境は、人々がそれを認識しているかどうかにかかわらず、毎日人々を教育している。

問題は、多くの人々がそれらの教訓を見る方法を教えられていないことである。

人々は、次のように問う方法を教えられていない。

何が私の思考を形づくっているのか？

何が私の信念を形づくっているのか？

何が私の感情を形づくっているのか？

何が私の信頼を形づくっているのか？

何が私の行動を形づくっているのか？

何が私の認識を形づくっているのか？

何が私の理解を形づくっているのか？

何が私の周囲の世界を形づくっているのか？

こうした問いがなければ、人々は自分が形づくられていることに気づかないまま、生涯を通じて形づくられ続けることがある。

人々は、その下に何があるかを理解せずに、世界の表面を受け継ぐことが多い。

システムを見ることはある。

規則を見ることはある。

権威を見ることはある。

金銭を見ることはある。

教育を見ることはある。

繰り返される問題を見ることはある。

しかし、それらを何が生み出し、守り、形づくり、続くことを可能にしているのかを必ずしも理解していない。

だからこそ、人々は見ることができないものから学ぶことはできない。

「見る」とは、単に目で見ることではない。

見るとは、表面的な説明を越えるまで深く問い、世界環境を形づくる仕組みを認識し始める過程である。

見ることが理解を生み出す。

理解が学びを生み出す。

学びが独立した思考を生み出す。

したがって出所と起源は、単に情報がどこから来たかを特定するだけのものではない。

それは、情報そのものを何が形づくっているのかが見えるほど深く問う方法を学ぶことである。

人々は次のように問うことを学ばなければならない。

誰がこれを作ったのか？

それはどこから来たのか？

なぜそれは作られたのか？

誰がそれによって利益を得るのか？

どのような誘因が存在するのか？

何がこれに影響しているのか？

何がこれを守っているのか？

何が隠されているのか？

何が繰り返されているのか？

関わっている人々を何が形づくっているのか？

どのような世界環境がこれを生み出したのか？

こうした問いが重要なのは、人々が単に情報だけを受け継ぐわけではないからである。

人々は行動を受け継ぐ。

人々はシステムを受け継ぐ。

ナラティブを受け継ぐ。

依存を受け継ぐ。

沈黙を受け継ぐ。

権威を受け継ぐ。

人々は繰り返されるパターンを受け継ぐ。

作られた嘘も受け継ぐ。

作られた嘘は、単なる個々の誤った情報として存在するだけではない。

作られた嘘は、世界環境そのものに組み込まれていく。

それは正常なものとされる。

守られる。

繰り返される。

擁護される。

そして最終的に真実として受け入れられるようになる。

その後、人々は、それが最初から作られたものだったと気づくことなく、そうした作られた嘘を受け継ぐ。

人々は、構造化され、証拠に基づく教育経路を通して世界環境を理解する方法を教えられないまま、その中で機能する方法を教えられる。

人々は、適切には理解していない世界の中で機能することに非常に熟達することがある。

機能することは、人々がシステムの中で生き延びることを可能にする。

理解することは、人々がシステムから学ぶことを可能にする。

教育が人々に世界環境の中で機能することだけを教えるなら、教育は同じ世界環境の再生産を助ける。

すると人々は、世界環境から学ぶ者ではなく、世界環境の産物になっていく。

人類は、人類自身が絶えず再創造している世界環境の中で生きている。

世界環境が大人を形づくる。

大人が教師を形づくる。

教師が子どもを形づくる。

子どもは大人になる。

そして大人が同じ世界環境を再び作り出す。

人々が構造化され、証拠に基づく問い方経路を通してそれを問う方法を学ばない限り、この循環は無期限に続く。

人々はまた、自分自身の心こそが世界環境から学ぶための最も重要な道具であることを理解しなければならない。

肩書、権威、システム、機関、情報源、個人のいずれも、他者のために独立して理解を作り出すことはできない。

理解は、その人自身の心によって発達しなければならない。

問うことが理解を発達させる。

理解が学びを発達させる。

学びが独立した思考を発達させる。

したがって人々は、結果を延々と繰り返すのではなく、原因から学ばなければならない。

世界にただ適応するのではなく、何が世界を形づくっているのかを学ばなければならない。

だからこそ「出所と起源」は、「問い方を学ぶ（L2Q）」問い方ツールキットの最初に置かれている。

出所と起源が弱ければ、他のすべてのセクションもそれとともに弱くなる。

証拠基準が弱くなる。

誘因と利得が弱くなる。

性質と一貫性が弱くなる。

問うことへの許可が弱くなる。

感情的影響が弱くなる。

ナラティブ対現実が弱くなる。

心理的影響が弱くなる。

どこでも同じ基準を適用することが弱くなる。

したがって、出所と起源はこの枠組み全体の基盤である。

それは、人々が世界そのものから学び始めることを可能にする出発点である。

進行は次のとおりである。

問う。

見る。

理解する。

学ぶ。

独立した思考を発達させる。

このようにして、人々は適切に理解していない世界を繰り返すことを止める。

このようにして人々は、単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境から学び始める。

そして、だからこそ「出所と起源」は「問い方を学ぶ（L2Q）」問い方ツールキットのセクション1なのである。

認識

人々は、世界環境が自分たちを形づくっていると気づく前から、世界環境によって形づくられている。

繰り返しのパターンが世界中で続く最大の理由の一つは、人々が繰り返し見るものを信じることが多いからである。

人々は反復を真実と取り違えることがある。

慣れを証拠と取り違えることがある。

人気を信頼性と取り違えることがある。

権威を正しさを取り違えることがある。

可視性を重要性と取り違えることがある。

自信を専門性と取り違えることがある。

地位を理解と取り違えることがある。

多くの人々は、自分の認識が絶えず形づくられていることに気づいていない。

人々は、自分の信念がどのように形成されるのかを、構造化され、証拠に基づく教育経路を通して教えられていない。

何を信じるべきかは教えられる。

しかし、どのようにしてそれを信じるようになったのかは教えられない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどのようにしてこれを信じるようになったのか？

誰がこの信念を私に持ち込んだのか？

私はどれくらい長くこれを信じてきたのか？

私はどれほど頻繁にこれにさらされてきたのか？

何がこれを繰り返し強化してきたのか？

私はこれを独立して検証したのか？

それとも受け継いだのか？

現在の教育が世界環境への問い方を学ぶための構造化され、証拠に基づく経路を教えていない一方で、子どもたちもまた世界環境によって形づくられている。

子どもたちは大人を観察する。

行動を観察する。

システムを観察する。

権威を観察する。

金銭を観察する。

依存を観察する。

ナラティブを観察する。

反復を観察する。

沈黙を観察する。

何が報われるかを観察する。

子どもたちは、何が抑えられるかを観察する。

したがって、現在の教育が世界環境への問い方を学ぶための構造化された証拠に基づく経路を提供していない一方で、世界環境は子どもたちを教え始める。

大人もまた、それを認識しているかどうかにかかわらず、世界環境から絶えず教育されている。

教育が子どもと大人に現実の世界環境への問い方を教えなければ、彼らは知らないうちに、自分たちより前の人々を形づくった同じ反復の循環に入る。

人々は単純なナラティブの中に閉じ込められることもある。

示されているものから学ぶ代わりに、どちらかの側を選ぶよう促されることがある。

世界環境を形づくる仕組みを理解する代わりに、英雄と悪役という枠で考えるよう促されることがある。

何かを繰り返し見るほど、それは正常なものになりやすい。

正常なものになるほど、問われにくくなる。

したがって、人々は次のように問うべきである。

何が私の認識を形づくっているのか？

何が私の信頼を形づくっているのか？

何が私の理解を形づくっているのか？

何が私の信念を形づくっているのか？

私は世界を明確に見ているのか？

それとも、繰り返し示されてきたものだけを見ているのか？

出所と起源は、人々を認識の先へ進ませ、理解へ向かわせるために存在する。

到達範囲、地位、情報環境

人々は、最も大きな到達範囲を持つ情報が最も重要な情報であるはずだと考えることが多い。

これは問われなければならない。

多くの人々は無意識に、最も大きな声、最も大きな聴衆、最も大きなプラットフォーム、最も高い地位を追いかける。

人々はしばしば、自分の好奇心を外部に委ねる。

多くの人々は、権威のある誰かに何が重要かを言われてから関心を持つ。

多くの人々は、人気が出るまで調べようとしない。

多くの人々は、地位が与えられるまで自分に学ぶことを許さない。

多くの人々は、何が自分の注意に値するかを誰か他の人が決めるのを待つ。

これは、人々が到達範囲と地位のシステムに、自分の心が何を重要として扱ってよいかを決めさせることがあるという意味である。

人々は知らないうちに、能動的な学習者ではなく受動的な学習者になることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

なぜこの情報源にはこれほど大きな到達範囲が与えられているのか？

この情報が配布される環境を誰が管理しているのか？

何が推奨されるかを誰が決めるのか？

何が繰り返されるかを誰が決めるのか？

何が隠されるかを誰が決めるのか？

何が削除されるかを誰が決めるのか？

何が可視性を得るかを誰が決めるのか？

何が可視性を失うかを誰が決めるのか？

人々はまた、到達範囲それ自体が、真実だと認識されるものを作り出し始め得ることを理解しなければならない。

何かが見られるほど、それはなじみ深くなる。

なじみ深くなるほど、受け入れられやすくなる。

受け入れられるほど、それは真実のように見え始めることがある。

だからこそ、可視性そのものが問われなければならない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は証拠があるからこの情報源を追っているのか？

それとも、その到達範囲が大きいから追っているのか？

私は理解があるからこの情報源を追っているのか？

それとも、その地位があるから追っているのか？

私は、到達範囲が与えられていないという理由で情報を無視しているのか？

誰か他の人が、それは重要だと私に言うのを待っているのか？

何が調査に値するかを誰か他の人に決めさせているのか？

人々は、学ぶための許可を待つことを止めなければならない。

受動的な学習者ではなく、能動的な学習者にならないといけない。

自分自身の心を、学ぶための最も重要な道具にしなければならない。

金銭、依存、システム

金銭は、世界環境全体で行動を形づくる最大の仕組みの一つである。

したがって人々は、情報を取り囲む仕組みを問うことを学ばなければならない。

金銭は依存を生み出すことがある。

依存は行動を形づくることがある。

行動は、何が語られるかを形づくることがある。

何が繰り返されるかを形づくることがある。

何が守られるかを形づくることがある。

何が隠されるかを形づくることがある。

何が異議を受けるかを形づくることがある。

何が続くことを許されるかを形づくることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この情報源は金銭の経路を作っているのか？

この情報源は金銭の経路を管理しているのか？

この情報源は金銭の経路に資金を出しているのか？

この情報源は金銭の経路に影響しているのか？

この情報源は、人々が依存するシステムを作り、または影響しているのか？

人々はそれらのシステムに依存しているのか？

依存は行動に影響するのか？

依存は問うことに影響するのか？

依存は沈黙に影響するのか？

依存は、人々が何に異議を示そうとするかに影響するのか？

これは個人を責めるためのものではない。

行動を形づくる仕組みを理解するためのものである。

情報源としての教師

教師は子どもたちにとって情報源になる。

つまり教師自身も、問い方を学ばなければならない。

多くの教師は、子どもたちが入っていくのと同じ教育システムを通ってきた。

情報を教えられてきた。

情報を届けるよう訓練されてきた。

情報について評価されてきた。

その後、次の世代へ情報を渡す役割に置かれてきた。

これは教師を責めるためのものではない。

教師を形づくる環境を理解するためのものである。

教師も同じ世界環境の中の参加者である。

教師も情報を受け継いでいる。

そして、世界環境から学ぶ方法を自ら教えられていなかった人々から学んできた。

人々は、システムを理解する方法を教えられないまま、その中で機能する方法を教えられる。

人々は、適切に理解していないシステムの中で機能することに非常に熟達することがある。

教師自身も、多くの場合この同じ経路を通ってきた。

これが、反復が世代を越えて続く理由の一つである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰が教師を教えたのか？

誰が教師を訓練したのか？

どのシステムが教師を形づくったのか？

教師は現実の世界環境について教えられたのか？

金銭、依存、権威、沈黙、ナラティブ、反復、到達範囲、地位が人類をどのように形づくるのかを教えられたのか？

それとも教師は、既存のシステムの中で機能する方法を教えられたのか？

したがって教師は、問うこと、見ること、理解すること、学ぶこと、独立した思考を促進する役割になるべきである。

嘘から学ぶ

人々はしばしば、嘘は欺くためだけに存在すると考える。

出所と起源は、人々にその先へ進むことを教える。

心が嘘を問う準備を持てば、嘘は教育の道具になり得る。

嘘は行動を明らかにする。

依存を明らかにする。

誘因を明らかにする。

ナラティブを明らかにする。

沈黙を明らかにする。

繰り返しのパターンを明らかにする。

嘘が明らかにするものをどう問うかを人々が教えられていないとき、何が起きるかを嘘は明らかにする。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この嘘は何を明らかにしているのか？

どの仕組みがこの嘘を続けさせたのか？

誰がこの嘘から利益を得たのか？

誰がこの嘘を守ったのか？

誰がこの嘘を繰り返したのか？

この嘘はどの繰り返しのパターンを明らかにしているのか？

人類はこの嘘から何を学べるのか？

目的は、人々に嘘を憎むことを教えることではない。

目的は、人々に嘘から学ぶことを教えることである。

示されるものから学ぶ

多くの人々は、示されるものから学ぶのではなく、示されるものに反応する。

反応はしばしば進歩を止める。

人々は怒る。

人々は恐れるようになる。

人々はどちらかの側を選ぶ。

人々は立場を守る。

人々は立場を攻撃する。

人々はナラティブの中に閉じ込められる。

出所と起源は、人々に反応の先へ進むことを教える。

人々は次のように問うべきである。

ここから何を学べるのか？

どの行動が明らかにされているのか？

どの繰り返しのパターンが明らかにされているのか？

これは人類について何を明らかにしているのか？

依存について何を明らかにしているのか？

金銭について何を明らかにしているのか？

沈黙について何を明らかにしているのか？

世界環境について何を明らかにしているのか？

人々はまた、自分たちが単に情報を学んでいるのではない
ことを理解しなければならない。

世界の見方を学んでいる。

進行は次のようになる。

問う。

見る。

理解する。

学ぶ。

独立した思考を発達させる。

このようにして人々は、世界環境の産物になることから、
世界環境から学ぶ者へ移行する。

目に見える情報源と究極の情報源

人間の問い方における最大の限界の一つは、人々が最初に
目に見える情報源で止まることが多いことである。

人を見る。

組織を見る。

政府を見る。

公務員を見る。

メディア機関を見る。

専門家を見る。

オンラインの発信者を見る。

そして人々は、情報源を特定したと思う。

しかし出所と起源は、人々に問い続けることを教える。

目に見える情報源が、究極の情報源とは限らない。

目に見える情報源は、情報を実行しているだけかもしれない。

情報を繰り返しているだけかもしれない。

情報を守っているだけかもしれない。

別の情報源に依存しているかもしれない。

目に見える情報源自体が、世界環境によって形づくられているかもしれない。

その情報源自体も、まだ世界環境から学んでいる途中かもしれない。

人々は、最初に与えられた説明で止まることが多い。

最初の説明は心地よく感じられることがある。

完全に感じられることがある。

満足できると感じられることがある。

しかし、満足したと感ずることと理解することは同じではない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

これは本当の情報源なのか？

それとも、私が最初に出会った情報源なのか？

この情報源の背後には誰がいるのか？

誰がこの情報源に影響しているのか？

誰がこの情報源から利益を得るのか？

この情報源はどのような環境の中で作動しているのか？

どの仕組みがこの情報源を形づくっているのか？

人々はしばしば、あまりに早く止まる。

出所と起源は、人々に続けることを教える。

考え得る動機

人々はしばしば、単純化された結論で止まる。

政府は悪い。

メディアは悪い。

警察は悪い。

権威は悪い。

機関は悪い。

人々は、そこから何を学べるかを検証する代わりに、示されたものに感情的に反応することが多い。

出所と起源は、人々に単純な結論の先へ進むことを教える。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどのような前提を置いているのか？

私は最初の説明を受け入れているのか？

まだ考えていない動機は何か？

まだ考えていない説明は何か？

まだ考えていない長期的な結果は何か？

私は、示されたナラティブの内側だけで問っているのか？

目的は、人々を一つの結論に固定することではない。

目的は、人々が可能性を独立して調べ、示されているものから学べるようにすることである。

世界環境は絶えず教えている

人々は、存在する中で最大の学習環境の中にすでに立っているのに、教えられるのを待っていることが多い。

世界環境は絶えず教えている。

行動を通して教える。

反復を通して教える。

ナラティブを通して教える。

誘因を通して教える。

依存を通して教える。

権威を通して教える。

結果を通して教える。

沈黙を通して教える。

問題は、教訓が存在しないことではない。

問題は、人々がそれらを見て、そこから学ぶための構造化され、証拠に基づく教育経路を与えられていないことである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

これは私に何を教えているのか？

どの繰り返しのパターンを明らかにしているのか？

どのような結果が示されているのか？

どの行動が明らかにされているのか？

人類はここから何を学べるのか？

人類は人類から学んでいる

人類は主として人類によって教えられている。

しかし人類自身は、世界環境から学ぶ方法を教えられていない。

人々は、独立して検証する方法を学ぶ前に情報を受け継ぐ。

理解する前に情報を守る。

学ぶ前に反応する。

問う前に従う。

理解する前に繰り返す。

人々は、より深い問いを発達させるための構造化された経路を教えられていないため、単純な説明で止まる。

これは、人類が進歩できないという意味ではない。

人類には、学ぶためのより良い道具が必要だという意味である。

追従、信念、思考の委任

世界環境を繰り返させる最大の仕組みの一つは、思考の委任である。

人々は、これを問うことを教えられないまま従うことを教えられる。

特定の人々は自分より多くを知っていると教えられる。

肩書を信頼するよう教えられる。

権威を信頼するよう教えられる。

立場を信頼するよう教えられる。

地位を信頼するよう教えられる。

言われたことを記憶するよう教えられる。

そして、従うよう言われたことを実行することで報酬を受ける。

その結果、多くの人々は、自分の代わりに他人に考えさせる。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は誰か他の人に私の代わりに考えさせているのか？

私は誰か他の人に私の代わりに問わせているのか？

私は誰か他の人に、私の代わりに真実を決めさせているのか？

私は証拠ではなく肩書を信頼しているのか？

私は行動ではなく地位を信頼しているのか？

私は理解ではなく権威を信頼しているのか？

人々はまた、一つのナラティブを離れることが自動的に独立した思考を生み出すわけではないと理解しなければならない。

人々は一つの権威を離れ、別の権威を受け入れることができる。

一つの集団を離れ、別の集団に加わることができる。

一つの説明を離れ、別の説明を受け継ぐことができる。

独立した思考とは、側を変えることではない。

独立した思考とは、すべての側をどう問うかを学ぶことである。

人間の意識の進歩

出所と起源の目的は、単に情報への問い方を人々に教えることよりはるかに大きい。

それは、世界環境から学ぶ人類の能力を前進させることである。

人間の意識の進歩とは、単により多くの情報を蓄積することではない。

より良い学習者になることである。

問う人類の能力を高めることである。

見る人類の能力を高めることである。

理解する人類の能力を高める。

学ぶ人類の能力を高める。

独立して考える人類の能力を高める。

人々はまた、誰もが世界環境の内側にいることを理解しなければならない。

その外側に立つ者はいない。

政府もその内側にいる。

メディアもその内側にいる。

教師もその内側にいる。

警察もその内側にいる。

機関もその内側にいる。

親もその内側にいる。

子どももその内側にいる。

専門家もその内側にいる。

著者もその内側にいる。

読者もその内側にいる。

誰もがそれに影響を与えている。

誰もがそれから影響を受けている。

誰もがそれに参加している。

すべての決定は、反復を助けるか、学びを助けるかのどちらかである。

受け入れること。

繰り返すこと。

追従。

共有すること。

擁護すること。

沈黙したままでいること。

すべてに結果がある。

原始的な進行は、多くの場合このようになる。

従う。

反応する。

擁護する。

繰り返す。

側を選ぶ。

進歩した進行はこのようになる。

問う。

見る。

理解する。

学ぶ。

独立した思考を発達させる。

世界環境から学ぶ。

目的地は、終わりなく問い続けることではない。

目的地は理解である。

目的地は学びである。

目的地は独立した思考である。

目的は、単に問うことを改善することではない。

目的は、世界環境そのものから学ぶ人類の能力を改善することである。

このようにして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者へ移行する。

セクション2 - 証拠基準

証拠基準とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境から学ばなければならないことを確立した。

出所と起源は、情報、システム、物語、規則、肩書、行動、繰り返しのパターンがどこから来たのか、何がそれらを形づくったのか、時間の中で何を示してきたのか、そしてどの世界環境がそれらを生み出したのかを問うことから始まる。

セクション2は、ここから証拠基準へ進む。

証拠基準は、主張され、教えられ、繰り返され、守られ、記録され、提示され、または強制されているものを、証拠が実際に裏づけているかを問う。

証拠基準が存在するのは、人々が、証拠とは実際に何かを適切に教えられないまま、何を信じるべきかを教えられているからである。

人々には情報が示される。

人々は情報を言われる。

人々は情報を教えられる。

人々は情報を受け入れることを期待される。

人々は情報を繰り返すことを期待される。

人々は情報を擁護することを期待される。

しかし人々は、証拠が語られていることを裏づけているかどうかを適切に検証する方法を教えられていない。

これは、世界環境の中にある最大の問題の一つを生み出す。

情報は、適切に問われる前に真実として提示されることがある。

物語は、証拠が検証される前に真実として繰り返されることがある。

肩書が証拠として扱われることがある。

権威が証拠として扱われることがある。

システムが証拠として扱われることがある。

人気が証拠として扱われることがある。

書かれた記録が証拠として扱われることがある。

繰り返される主張が証拠として扱われることがある。

恐怖が証拠として提示されることがある。

対抗ナラティブが証拠として扱われることがある。

生成、改変、選別、または作製された資料が証拠として提示されることがある。

しかし、それらはどれも、それ自体では証拠ではない。

証拠基準は、裏づけのない情報が受け入れられた真実になることを止めるために存在する。

証拠基準は、人々に、受け入れる前に速度を落とすことを教える。

実際に何が示されているのか、何が主張されているのか、
何がその主張を裏づけるのか、何が欠けているのか、何が
矛盾しているのか、何が恐怖や感情的圧力を通して提示さ
れているのか、そして何が単に真実に見えるまで繰り返さ
れてきたのかを問うことを教える。

証拠基準は、出所と起源に置き換わるものではない。

それを基盤として積み上がる。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づ
くったのかを問う。

証拠基準は、そこから主張されていることを証拠が裏づけ
ているかを問う。

証拠基準の目的は、人々に何を信じるべきかを教えること
ではない。

目的は、人々が情報を信じ、繰り返し、擁護し、またはそ
れに基づいて行動する前に、その情報をどう検証するかを
教えることである。

証拠が果たさなければならないこと

証拠は、単に存在する情報ではない。

証拠は何かを示さなければならない。

証拠は、主張されていることを裏づけなければならない。

証拠は、問いに耐えなければならない。

証拠は、さらなる検証に開かれたままでなければならない。
い。

証拠は、現実とつながっていないなければならない。

証拠は、行動と一致しなければならない。

証拠は、矛盾を明らかにしなければならない。

証拠は、時間を通して一貫していなければならない。

証拠は、人々が示されているものから学ぶのを助けなければならない。

証拠はまた、問われることを歓迎する。

証拠は、問われることから守られる必要がない。

証拠は、検証を恐れない。

証拠は、生き残るために肩書、権威、反復、恐怖、地位、感情的圧力に依存しない。

問うことは証拠を強くする。

問うことは理解を改善する。

問うことは弱点を明らかにする。

問うことは矛盾を明らかにする。

問うことは欠けているものを明らかにする。

問うことは裏づけられていないものを明らかにする。

問うことは人々が学ぶのを助ける。

裏づけのない情報は、問うことによって適切に裏づけられないものが脅かされるため、しばしば問いに抵抗する。

したがって証拠基準は、問うことは真実の敵ではないと人々に教える。

問うことは、真実へ入る経路の一つである。

情報は証拠ではない

情報は自動的に証拠になるわけではない。

発言は自動的に証拠になるわけではない。

肩書は自動的に証拠になるわけではない。

役割は自動的に証拠になるわけではない。

システムは自動的に証拠になるわけではない。

繰り返される物語は自動的に証拠になるわけではない。

書かれた物語は自動的に証拠になるわけではない。

受け継がれた信念は自動的に証拠になるわけではない。

守られたナラティブは自動的に証拠になるわけではない。

情報を繰り返すことで報酬を受けている人がいることは、自動的に証拠になるわけではない。

システムが何かを真実だと言うことは、自動的に証拠になるわけではない。

情報に恐怖が結びついていることは、自動的に証拠になるわけではない。

別のナラティブに反対する対抗ナラティブは、自動的に証拠になるわけではない。

AIによって生成、改変、要約、選別、または提示された情報は、自動的に証拠になるわけではない。

人々は次のように問わなければならない。

何が主張されているのか？

どの証拠がそれを裏づけているのか？

その証拠はどこから来たのか？

その証拠は検証できるのか？

その証拠は問うことができるのか？

その証拠は主張を裏づけているのか？

行動は主張を裏づけているのか？

一貫性は主張を裏づけているのか？

どの証拠が欠けているのか？

どの証拠が隠されてきたのか？

どの証拠が主張と矛盾するのか？

何が証拠なしに受け入れられてきたのか？

この証拠は、誤解を生み得る形で作られ、改変され、選別され、要約され、枠づけし直され、または提示されたのか？

これが重要なのは、人々が、情報が適切に裏づけられているかを学ぶことなく、その情報を受け入れるよう教えられることがあるからである。

裏づけのない情報を記憶することができる。

裏づけのない情報を繰り返すことができる。

裏づけのない情報を擁護することができる。

裏づけのない情報を次の世代へ渡すことができる。

すると世界環境は、適切に検証される前に受け入れられた情報を通して繰り返される。

繰り返される物語が真実になる

人間の学びにおける最大の失敗の一つは、人々が反復を真実と取り違えることがある点である。

物語は作られることがある。

肩書はそれに権威を与えることがある。

システムはそれに到達範囲を与えることがある。

金銭は、人々にそれを繰り返す理由を与えることがある。

時間は、それになじみ深さを与えることがある。

書かれた記録は、それに永続性があるような外観を与えることがある。

十分な人数がそれを繰り返せば、社会的証明を与えることがある。

すると将来世代は、それを真実として受け継ぐことがある。

しかし反復は証拠ではない。

繰り返される物語は証拠ではない。

書かれた物語は証拠ではない。

受け継がれた物語は証拠ではない。

守られた物語は証拠ではない。

肩書、システム、金銭、到達範囲、恐怖、地位、時間に支えられた物語であっても、適切に検証され裏づけられない限り、やはり証拠ではない。

したがって人々は次のように問わなければならない。

誰がこの物語を作ったのか？

誰がそれに権威を与えたのか？

誰がそれを繰り返したのか？

それが信じられることで誰が利益を得たのか？

誰がそれを維持することで報酬を受けたのか？

誰がそれを問われることから守ったのか？

どの証拠がそれを裏づけているのか？

どの証拠がそれと矛盾するのか？

それに異議が示されると何が起きるのか？

これは証拠なのか？

それとも受け継がれた信念なのか？

証拠基準がなければ、十分な人数が物語を繰り返し、それについて書き、それを守り、または受け継がせるというだけで、繰り返される物語が真実として受け入れられることがある。

肩書、権威、報酬を受ける役割は証拠ではない

人々はしばしば、肩書を信じるよう教えられる。

権威を信じるよう教えられる。

公式の役割を信じるよう教えられる。

システムを信じるよう教えられる。

情報を語り、強制し、教え、提示し、または繰り返すことで報酬を受ける人を信じるよう教えられる。

しかし肩書は証拠ではない。

権威は証拠ではない。

報酬を受ける役割は証拠ではない。

公式の地位は証拠ではない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

どの証拠がこの肩書を裏づけているのか？

どの証拠がこの権威を裏づけているのか？

どの証拠がこの役割を裏づけているのか？

どの証拠がこの人の発言を裏づけているのか？

どの証拠がこのシステムの主張を裏づけているのか？

これが信じられることで誰が利益を得るのか？

これが問われないことで誰が利益を得るのか？

誰がそれを繰り返すことで報酬を受けるのか？

誰がそれを強制することで報酬を受けるのか？

誰がそれを守ることで報酬を受けるのか？

証拠が求められると何が起きるのか？

これは、すべての肩書、役割、システム、権威を自動的に拒絶するためのものではない。

それらを証拠と取り違えないためのものである。

証拠基準は、権威もやはり検証されなければならないと人々に教える。

肩書もやはり検証されなければならない。

システムもやはり検証されなければならない。

報酬を受ける役割もやはり検証されなければならない。
同じ基準はどこでも適用されなければならない。

システム、情報源、証拠

あるシステムが存在していることは、そのシステムが真実から作られた証拠ではない。

これは出所と起源に直接つながる。

出所と起源は次のように問う。

このシステムはどこから来たのか？

誰がそれを作ったのか？

何がそれを形づくったのか？

時間の中でどのような行動を示してきたのか？

何を守っているのか？

何を繰り返しているのか？

何を隠しているのか？

何を許しているのか？

その後、証拠基準は次のように問う。

どの証拠がそのシステムの主張を裏づけているのか？

どの証拠がそれらと矛盾するのか？

どの証拠が欠けているのか？

異議提示の後にどの証拠が出されるのか？

その証拠は真実を示しているのか？

それとも、権威、服従、反復、保護だけを示しているのか？

人々はしばしば、何かが存在しているというだけで、それは真実から作られたはずだと信じる。

これは問われなければならない。

もしシステムが、真実に基づいて行動していない人々によって作られ、維持され、または守られてきたなら、そのシステムが生み出す情報、肩書、規則、記録、権威、ナラティブを、存在しているというだけで真実として受け入れることはできない。

システムが古いことは、真実の証拠ではない。

システムが強力であることは、真実の証拠ではない。

システムが公式であることは、真実の証拠ではない。

システムが世代を通して繰り返されていることは、真実の証拠ではない。

システムが金銭、地位、権威、恐怖、力によって守られていることは、真実の証拠ではない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

どの証拠がそれを裏づけているのか？

どの証拠がそれと矛盾するのか？

どの証拠が欠けているのか？

どの証拠が無視されたのか？

そのシステムはどのような行動を示すのか？

異議を示されると、そのシステムは何をするのか？

答えるのか？

訂正するのか？

避けるのか？

自らを守るのか？

真実を生み出すのか？

それとも服従を生み出すのか？

ここで証拠基準は世界環境に直接つながる。

証拠は、発言だけに適用されるものではない。

システムにも適用される。

規則にも適用される。

権威にも適用される。

肩書にも適用される。

行動にも適用される。

ナラティブにも適用される。

繰り返しのパターンにも適用される。

恐怖に基づく提示にも適用される。

対抗ナラティブにも適用される。

生成、改変、選別、または作製された資料にも適用される。

だからこそ、証拠基準は教育に欠けている経路の一つなのである。

証拠基準がなければ、人々は、システムが真実、証拠、一貫性、行動によって裏づけられているかを問う方法を教え

られないまま、そのシステムの中で機能することを教えられる。

証拠基準は、裏づけのない情報が受け入れられた真実になることを止めるために存在する。

それは、人々が受け入れから検証へ移り始めるのを助ける。

信念から理解へ移るのを助ける。

繰り返される情報の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることへ移るのを助ける。

時間を通した証拠

このセクションの最初の部分では、情報、肩書、権威、報酬を受ける役割、システム、書かれた記録、繰り返される物語、受け継がれた信念、恐怖に基づく提示、対抗ナラティブ、そして生成、改変、選別、または作製された資料は、自動的に証拠になるわけではないと説明した。

また、証拠は問われることを歓迎すると説明した。

ここからは、証拠を時間の中でどのように検証しなければならないかへ進む。

証拠基準は、一つの瞬間だけを検証するものではない。

時間を通して何が示されるかを検証する。

一つの発言は誤解を招くことがある。

一つの記録は不完全であることがある。

一つの説明は選択的であることがある。

一つの回答は、より広いパターンを避けることがある。

遅れて出された発言は、リアルタイムで示されたものを置き換えるために使われることがある。

だからこそ、証拠は時間をまたいで検証されなければならない。

人々は次のように問うべきである。

時間を通して何が示されてきたのか？

それはいつ示されたのか？

リアルタイムで示されたのか？

出来事の後記録されたのか？

後から説明されたのか？

後の説明は、リアルタイムの証拠と一致するのか？

証拠は一貫したままだったのか？

行動は一貫したままだったのか？

物語は変わったのか？

説明は変わったのか？

同じパターンが繰り返されたのか？

矛盾が現れたのか？

証拠は追加されたのか？

証拠は削除されたのか？

証拠は無視されたのか？

異議提示の後に何が起きたのか？

遅れて出された説明が、順序の中で示されたリアルタイムの証拠を上書きすることを、決して許してはならない。

これは重要である。より長いパターンが異なるものを示しているとき、真実が一つの孤立した瞬間だけに依存すべきではないからである。

時間を通した証拠は、人々がパターンを見るのを助ける。

矛盾を見るのを助ける。

何が守られているかを見るのを助ける。

何が避けられているかを見るのを助ける。

言葉、行動、記録、時点、結果が一致しているかを見るのを助ける。

したがって証拠基準は、証拠を切り離された情報の断片としてではなく、順序の一部として検証することを人々に教える。

証拠としての行動

言葉だけでは十分ではない。

人々が言うことは、人々がすることと比較されなければならない。

行動は、発言が隠すものを明らかにすることがある。

肩書が守るものを明らかにすることがある。

システムが避けるものを明らかにすることがある。

金銭、依存、恐怖、地位、評判、誘因が何を形づくるかを明らかにすることがある。

人は、自分は真実に基づいて行動していると言うことができる。

システムは、自分は正義に基づいて行動していると言うことができる。

機関は、自分は配慮に基づいて行動していると言うことができる。

報酬を受ける役割は、自分は義務に基づいて行動していると言うことができる。

肩書は、自分は権威に基づいて行動していると言うことができる。

しかし証拠基準は、行動が主張されていることを裏づけているかを問う。

人々は次のように問うべきである。

行動は言葉と一致しているのか？

行為は主張と一致しているのか？

異議を示されたとき、システムは答えるのか？

証拠を示されたとき、権威は訂正するのか？

報酬を受ける役割は真実を守るのか？

それとも地位、システム、金銭、評判、ナラティブを守るのか？

沈黙は主張と矛盾するのか？

回避は主張と矛盾するのか？

遅延は主張と矛盾するのか？

削除、遮断、退けること、または処罰は主張と矛盾するのか？

時間を通した行動は、最も明確な証拠経路の一つになり得る。なぜなら行動は、人々やシステムが言っていることだけではなく、実際に何をしているかを示すからである。

言葉と行動が分かれるなら、証拠基準はその分離を問わなければならない。

主張が一つのことを言いながら、行動が繰り返し別のことを示すなら、その行動を検証しなければならない。

異議提示の後の証拠

証拠基準は、情報に異議が示された後に何が起きるかも検証しなければならない。

多くの主張は、証拠を求められるまでは強く見える。

多くのシステムは、答えるよう求められるまでは真実に見える。

多くの肩書は、その主張が検証されるまでは信頼できるように見える。

多くのナラティブは、矛盾が示されるまでは安定しているように見える。

異議提示は証拠基準を明らかにする。

証拠は問われることを歓迎する。なぜなら、問うことは真実であるものを強くし、弱いもの、欠けているもの、矛盾しているもの、裏づけのないものを明らかにするからである。

裏づけのない情報は、問うことによって適切に裏づけられないものが脅かされるため、しばしば問いに抵抗する。

人々は次のように問うべきである。

証拠が求められると何が起きるのか？

証拠は提供されるのか？

問いには答えられるのか？

問題は訂正されるのか？

矛盾は扱われるのか？

証拠は無視されるのか？

問う人が攻撃されるのか？

沈黙が使われるのか？

証拠の代わりに権威が使われるのか？

真実の代わりに手続きが使われるのか？

人々が問うことを止めるまで問題が遅らされるのか？

証拠を検証する代わりに、システムが守られるのか？

異議提示の後に何が起きるかは重要である。なぜなら、応答が証拠になるからである。

答えることが証拠になり得る。

訂正することが証拠になり得る。

答えることを拒むことが証拠になり得る。

避けることが証拠になり得る。

沈黙が証拠になり得る。

矛盾が証拠になり得る。

保護が証拠になり得る。

繰り返される無回答が証拠になり得る。

証拠基準は、元の主張だけでなく、その主張が問われた後に続く行動も検証することを人々に教える。

証拠、タイムライン、応答

証拠基準はまた、タイムラインと応答を通して証拠を追うことを人々に求める。

証拠は、それがいつ示されたのか、どこから来たのか、誰が見たのか、誰が受け取ったのか、誰が異議を示すことができたのか、そしてその後何が起こったのかから切り離されるべきではない。

人々は次のように問うべきである。

これはいつ示されたのか？

これはどこで示されたのか？

誰がそれを作ったのか？

誰がこれを受け取ったのか？

誰がこれを見たのか？

誰に異議が示されたのか？

誰に答える機会があったのか？

誰に訂正する機会があったのか？

誰に反駁する機会があったのか？

誰が沈黙したのか？

次に何が起こったのか？

その後どのような行動が続いたのか？

どのパターンが続いたのか？

これは重要である。証拠は、そのタイムラインから切り離されると弱められることがあるからである。

また、人々が、誰が見たのか、誰が受け取ったのか、誰に答える機会があったのか、その後に何が起きたのかを無視すると、証拠は弱められることがある。

リアルタイムの証拠が重要なのは、その時点で何が置かれ、示され、記録され、異議を示され、または可視化されたのかを示すからである。

遅れて出された説明は、リアルタイムで示されたものと照らして問われなければならない。

人々は次のように問うべきである。

後の説明は、リアルタイムの証拠と一致するのか？

後の発言は、示されたものを書き換えているのか？

後の記録は、異議が示されたものを避けているのか？

後の説明は文脈を取り除いているのか？

タイムラインは主張を裏づけているのか？

可視化された後の行動は、主張を裏づけるのか、それとも矛盾するのか？

本当の証拠基準は、何かが存在するかどうかだけを問うものではない。

より広い記録の中で、それがどのように存在しているかを問う。

証拠を順序に置いたとき何を示すかを問う。

タイムラインが主張を裏づけるかを問う。

可視化された後の行動が、主張を裏づけるか、それとも矛盾するかを問う。

このようにして人々は、単に情報を集めるのではなく、証拠から学び始める。

示されたもの、隠されたもの、欠けているもの、矛盾するもの

証拠基準は、示されているものと示されていないものを比較することを人々に教えなければならない。

人々はしばしば、目の前に置かれた証拠に導かれる。

しかし、欠けているものも同じくらい重要なことがある。

隠されているものも同じくらい重要なことがある。

矛盾しているものも同じくらい重要なことがある。

問われることから守られているものも同じくらい重要なことがある。

人々は次のように問うべきである。

何が示されているのか？

何が示されていないのか？

何が欠けているのか？

何が隠されているのか？

何が裏づけられていないのか？

何が矛盾しているのか？

何が守られているのか？

何が避けられているのか？

何が削除されたのか？

何が答えられていないのか？

これは重要である。人々は選別された証拠によって導かれることがあるからである。

全体の残りが隠されている一方で、画像の一部分だけを示されることがある。

行動がそれと矛盾しているのに、発言だけを示されることがある。

タイムラインが無視されているのに、記録だけを示されることがある。

証拠が欠けているのに、権威だけを示されることがある。

裏づけがないのに、自信だけを示されることがある。

証拠基準は、人々が選別された提示の先を見るのを助ける。

示されているものを、欠けているもの、隠されているもの、矛盾するもの、避けられているもの、守られているものと比較するのを助ける。

証拠の提示、恐怖、服従

証拠基準は、証拠がどのように提示されるかも問わなければならない。

証拠を提示する仕組みが強力であるほど、証拠そのものを問うことが重要になる。

人々は恐怖を示され、その恐怖の環境そのものを証拠として扱うよう導かれることがある。

恐怖は緊急性を生み出すことがある。

恐怖は服従を生み出すことがある。

恐怖は問うことを止めることがある。

恐怖は、人々が弱い、不完全な、選別された、または裏づけない証拠を、適切に検証する前に受け入れるようにすることがある。

恐怖は、証拠が主張を裏づけているかを問うことなく、肩書、システム、報酬を受ける役割、公式発表、繰り返される警告、社会的圧力到人々を従わせることがある。

しかし恐怖は証拠ではない。

緊急性は証拠ではない。

公式の圧力は証拠ではない。

繰り返される警告は証拠ではない。

報酬による服従は証拠ではない。

大規模な反復は証拠ではない。

証拠基準は、人々に証拠が示されているのか、それとも証拠なしに受け入れさせるために作られた恐怖が示されているのかを問わなければならない。

人々は次のように問うべきである。

どの証拠が示されているのか？

それはどのように提示されているのか？

どのような恐怖がそれに結びつけられているのか？

どのような反応が作られているのか？

どの証拠が欠けているのか？

どの証拠が矛盾しているのか？

どの証拠が問われることから守られているのか？

人々は理解することを助けられているのか？

それとも、従うよう押されているのか？

これは感情的影響、ナラティブ対現実、心理的影響と重なるが、証拠基準が、恐怖が証拠の代替として使われているかを問わなければならないため、ここに属する。

対抗ナラティブと証拠基準

証拠基準は対抗ナラティブも問わなければならない。

人々は一つの偽りのナラティブを見て拒絶し、その最初のものに反対しているように見えるという理由で対抗ナラティブを受け入れることがある。

しかし、反対していることは証拠ではない。

対抗ナラティブも作られることがある。

対抗ナラティブも資金提供されることがある。

対抗ナラティブにも到達範囲が与えられることがある。

対抗ナラティブも管理されることがある。

対抗ナラティブも、人々を証拠なしに信じることへ導くことがある。

人々は一つの作られた物語から抜け出し、直ちに別の作られた物語へ入ることがある。

したがって証拠基準は、ナラティブと対抗ナラティブの両方を問わなければならない。

人々は次のように問うべきである。

どの証拠が対抗ナラティブを裏づけているのか？

それはどこから来たのか？

誰がそれに到達範囲を与えたのか？

それが信じられることで誰が利益を得るのか？

それは人々が証拠を検証するのを助けるのか？

それとも単に、人々を一つの信念から別の信念へ移すだけなのか？

それは出所と起源を問うのか？

証拠基準を問うのか？

誘因と利得を問うのか？

どこでも同じ基準を適用するのか？

証拠基準は、人々が一つの裏づけない信念を別の裏づけない信念に置き換えることを許してはならない。

経路は、一つのナラティブから別のナラティブへ進むことではない。

経路は、裏づけない信念から、証拠に基づいて問うこと、見ること、理解すること、学ぶこと、独立した思考へ進むことである。

AI、作製された証拠、情報源の履歴

証拠基準はまた、生成、改変、要約、選別、粹づけし直し、または作製することができる証拠を問う準備を人々に与えなければならない。

作製された証拠が説得力を増すほど、出所と起源はさらに重要になる。

AIは偽の証拠を本物のように見せることができる。

AIは偽の物語を裏づけられているように見せることができる。

AIは偽の画像、音声、文書、要約、説明を信頼できるように見せることができる。

AIはまた、証拠を隠し、粹づけし直し、要約し、選別し、または歪めるために使われることがある。

したがって、AIによって生成された、またはAIによって提示された情報は、検証なしに証拠として扱ってはならない。

これは出所と起源に直接つながる。

出所と起源は次のように問う。

この証拠はどこから来たのか？

それは最初にいつ存在したのか？

誰がそれを作ったのか？

それにはどのような履歴があるのか？

生成、改変、作製する道具が存在する前から、それは可視化されていたのか？

その後、証拠基準は次のように問う。

その履歴は検証できるのか？

タイムラインはそれを裏づけているのか？

元の情報源を確認できるのか？

その証拠を、生成、改変、要約、または粹づけし直された資料から分離できるのか？

AIによる操作より前の明確な履歴を持つ証拠は、生成、改変、作製する道具が存在した後にだけ現れる証拠とは異なる。

人々は次のように問うべきである。

何がこの証拠を作ったのか？

生成されたのか？

改変されたのか？

要約されたのか？

選別されたのか？

文脈から切り離されたのか？

元のものを検証できるのか？

情報源を確認できるのか？

タイムラインを確認できるのか？

行動はそれを裏づけているのか？

より広い証拠記録はそれを裏づけているのか？

証拠基準は、人々が証拠を見ているのか、それとも証拠のように見える作製された提示を見ているのかを問えるようにしなければならない。

証拠基準と人類の進歩

証拠基準は、個々の主張を証明または反証することだけのためではない。

それは「人類の進歩への欠けている経路」の一部である。

証拠基準は、証拠を問うことだけのためではない。

それは、人類が提示を真実と取り違えることを防ぐためのものである。

提示が真実と混同され、恐怖が証拠と混同され、権威が真実と混同され、繰り返される物語が証拠と混同され、裏づけのない情報が将来世代に受け継がれる間、人類は進歩できない。

証拠基準は、この経路が繰り返されることを止めるために存在する。

それは理解へ入る経路を守るのを助ける。

受け入れる前に速度を落とすことを人々に教える。

示されているものを検証することを教える。

欠けているものに気づくことを教える。

言葉と行動を比較することを教える。

時間を通して証拠を追うことを教える。

異議提示の後の応答を問うことを教える。

恐怖に基づく提示を問うことを教える。

対抗ナラティブを問うことを教える。

作製または改変された証拠を問うことを教える。

どこでも同じ基準を適用することを教える。

このように証拠基準は出所と起源を受け継ぐ。

出所と起源は、情報、システム、物語、肩書、行動、繰り返しのパターンがどこから来たのかを人々が問うのを助ける。

その後、証拠基準は、主張され、示され、繰り返され、守られ、異議を示され、隠され、または矛盾しているものを証拠が裏づけているかを検証するのを助ける。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

裏づけない情報の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることに進む。

証拠基準が重要なのは、目的が単に証拠を問うことではないからである。

目的は、世界環境そのもののの中で示される証拠から学ぶ人類の能力を改善することである。

証拠基準がなければ、人々は裏づけない情報を受け継ぎ、それを真実として繰り返すことができる。

証拠基準があれば、人々は、何が裏づけられているのか、何が欠けているのか、何が矛盾しているのか、何が守られているのか、何が作製されているのか、何が恐怖に基づいているのか、そして何をさらに問わなければならないのかを見始めることができる。

だからこそ、証拠基準は「人類の進歩への欠けている経路」の中に属する。

セクション3 - 誘因と利得

誘因と利得とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境から学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、人々は、証拠が主張され、繰り返され、守られ、提示され、または強制されているものを裏づけているかを検証しなければならないことを確立した。

セクション3は、ここから誘因と利得へ進む。

誘因と利得が存在するのは、どの行動が報われ、守られ、依存され、または失うことを恐れられているのかを理解するまで、人々は人間の行動を適切に理解できないからである。

人々はしばしば、行為を見るよう教えられる。

しかし、その行為を何が動かしているのかを問うことは教えられない。

人々はしばしば、結果を見るよう教えられる。

しかし、その結果を生み出している誘因を問うことは教えられない。

人々はシステムを信頼するよう教えられる。

しかし、そのシステムが続くことで何を得るのかを問うことは教えられない。

人々はしばしば、個人を評価するよう教えられる。

しかし、その個人を形づくる仕組みを問うことは教えられない。

誘因と利得は、人々に次のように問うことを教える。

誰が得るのか？

誰が利益を受けるのか？

誰がこれに依存しているのか？

誰がこれを守っているのか？

誰がこれを失うことを恐れているのか？

誰がこれによって報われるのか？

誰がこれによって報酬を受けるのか？

誰がこれが続くことに寄与しているのか？

人々は世界環境の中で生きるだけではない。

人々は、誘因に形づくられた行動を通して、それを再創造することに寄与する。

これが、人類が同じ世界を繰り返す最大の理由の一つである。

人々が繰り返し同じ世界を作るのは、悪だからではない。

誘因が、同じ世界を再創造することに対して繰り返し報いるから、同じ世界を繰り返し作るのである。

人類は、自分が何に寄与しているのかを十分に理解しないまま、同じ世界を再創造することが多い。

これが、世界の繰り返される問題が続く最大の理由の一つである。

金銭、依存、世界環境

金銭は、人間の行動を形づくる最大の仕組みの一つである。

金銭は依存を生み出すことがある。

依存は服従を生み出すことがある。

服従は沈黙を生み出すことがある。

沈黙はシステムを守ることがある。

人々が依存しているために、システムが続くことがある。

人々はしばしば、金銭を支払いとしてだけ考えるよう教えられる。

しかし金銭は行動も形づくる。

金銭は、人々が何を言うかに影響することがある。

何を言わないかに影響することがある。

何を繰り返すかに影響することがある。

何を守るかに影響することがある。

何を問うことを避けるかに影響することがある。

何を強制するかに影響することがある。

何が続くことを許すかに影響することがある。

何を正常なものとするかに影響することがある。

人々は次のように問うべきである。

誰が報酬を受けているのか？

誰がその人たちに支払っているのか？

何をすることで報酬を受けているのか？

何を問わないことで報酬を受けているのか？

何を繰り返すことで報酬を受けているのか？

何を強制することで報酬を受けているのか？

何を守ることで報酬を受けているのか？

異議を示したら何が起きるのか？

明らかにしたら何が起きるのか？

金銭がすべての思考を支配する必要はない。

依存だけで十分なことがある。

人々は、それを十分に認識しないまま、誘因の産物になることがある。

人間の報酬、所属、周囲に合わせること

人々は金銭だけに影響されるわけではない。

次のものにも影響されることがある。

受け入れ。

人気。

認知。

注目。

地位。

承認。

所属。

快適さ。

安心。

批判を避けること。

拒絶を避けること。

排除を避けること。

人々はしばしば次のようには問わない。

「これは真実か？」

代わりに次のように問うことがある。

「他の人々は何をしているのか？」

「人々は私を認めるだろうか？」

「私が同意しなくても、まだ所属していられるだろうか？」

一人で立つことへの恐怖は、理解したいという欲求より強くなることもある。

人々は、承認を得るため、排除を避けるため、所属を維持するため、そして自分が依存していると考える環境に合わせるために、行動を変えることがある。

人々は徐々に、理解より所属を重要にしてしまうことがある。

人々は次のように問うべきである。

私は真実に従っているのか？

それとも人々に従っているのか？

私は独立して考えているのか？

それとも周囲に合わせようとしているのか？

人々が独立して考えることを止めると、誰が利益を得るのか？

どの行動が真似されているのか？

どの行動が正常なものとされているのか？

人は人を真似る

人々はしばしば、他の人々から行動を受け継ぐ。

人々は次のものを真似る。

言葉。

意見。

流行。

生活様式。

外見。

態度。

習慣。

社会的行動。

オンラインでの行動。

必ずしも自分で理解しているからではなく、それらが正常、人気、成功している、または受け入れられているように見えるからである。

十分な人数が同じことをしているというだけで、繰り返される行動が正常なものとされることがある。

周囲に合わせる事が正常になることがある。

正常化が反復になることがある。

反復が受け継がれた行動になることがある。

受け継がれた行動が、受け入れられた現実になることがある。

行動が長く繰り返されるほど、その背後の仕組みは見えにくくなることもある。

反復それ自体が真実のような外観を作るため、人々は問うことを止めることがある。

表面的な環境

現代の環境は、人々に理解より外見を優先させることがある。

人々は次のことに占められることがある。

自分がどう見えるか。

オンラインでどう見えるか。

どれほど成功しているように見えるか。

どれほど幸せそうに見えるか。

どれほど人気があるように見えるか。

他人が自分をどう思うか。

人々は現実を隠しながら、理想化した自分を提示することがある。

偽りの笑顔が、本当の健やかさに取って代わることがある。

見せられた成功が、真実にとって代わることがある。

オンライン上の自己像が、本来の自分にとって代わることがある。

理解よりイメージのほうが重要になることがある。

孤立を感じながら、つながっているように見えることがある。

不幸を感じながら、幸せそうに見えることがある。

私生活で苦しみながら、成功しているように見えることがある。

外見が真実より重要になると、表面的な環境が発達することがある。

人気、地位、比較

人々は自分を他人と比べて測ることがある。

より多くの金銭。

より多くの所有物。

より多くのフォロワー。

より高い地位。

より多くの注目。

より多くの認知。

これは、理解のない終わりのない比較の循環を生み出すことがある。

人気は証拠ではない。

注目は証拠ではない。

フォロワー数は証拠ではない。

地位は証拠ではない。

広く見られていることが、自動的に何かを真実にするわけではない。

人々は、可視性を真実と、人気を正しさと、影響力を信頼性と取り違えることがある。

恐怖、沈黙、所属

問うことが所属を脅かす可能性があるため、人々は問うことを避けることがある。

人々は次のものを恐れることがある。

批判。

嘲笑。

拒絶。

排除。

恥ずかしさ。

孤立。

機会を失うこと。

一人で立つこと。

恐怖は沈黙を促すことがある。

沈黙は反復を守ることがある。

反復は正常なものとされることがある。

正常化された行動は、将来世代に受け継がれることがある。

人々が自分たちが何に寄与しているかを十分に理解しないまま、その循環が続くことがある。

人々はまた、誘因が真実より強くなることがあると理解しなければならない。

人々は、何かが問われるべきだと分かっているにもかかわらず、誘因がその行動を守っているために続けることがある。

教育、教師、世界の反復

教育は、誘因と利得を最も明確に示す例の一つである。

教師はしばしば、自分がその中で教えられた同じ教育システムの産物である。

その中で教育を受けた。

その中で訓練された。

その中で報酬を受ける。

その中で評価される。

その中の役割に置かれる。

その中で教えることを期待される。

その中で情報を届けることを期待される。

その中で情報を評価することを期待される。

しかし、世界環境そのものを問うための構造化され、証拠に基づく経路を子どもたちに教えることは教えられていない。

これは教師を攻撃するためのものではない。

システムを理解するためのものである。

教師は、同じ誘因主導の環境の中で活動しているため、同じ世界を繰り返すことへの寄与者になることがある。

教育は、そうする意図がまったくなくても、同じ世界を繰り返し再創造することがある。

人々は次のように問うべきである。

教育は何に報いているのか？

教育は何を繰り返しているのか？

教育は何を守っているのか？

教育は何を避けているのか？

教育は何を教え損なっているのか？

教育が変わると何が起きるのか？

子どもたちが世界環境そのものを問うことを学ぶと何が起きるのか？

なぜ誘因と利得が重要なのか

誘因と利得が重要なのは、人類がなぜ同じ世界を繰り返すのかを、人々がその反復に何が報いているのかを理解するまで適切に理解できないからである。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は次のように問う。

誰が利益を受けるのか？

誰が依存しているのか？

誰が守っているのか？

誰が失うのか？

この誘因はどのような行動を生み出すのか？

この行動は、どのような世界環境の再創造を助けるのか？

このようにして、人々は世界環境の下で作動している仕組みを見始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

人々が、自分たちが何に寄与しているのかを理解せずに、前の人々がしたことを続ける間、人類は進歩できない。

このようにして人々は、誘因主導のシステムの産物になることから、世界環境から学ぶ者になることへ進む。

誘因と利得

時間を通した誘因

このセクションの最初の部分では、人々は世界環境の中で生きるだけではないと説明した。

人々は、誘因に形づくられた行動を通して、それを再創造することに寄与する。

ここからは、誘因が時間を通してどのように続くかへ進む。

人々は、自分の誘因をすぐに明らかにするとは限らない。

時間を通した行動が、それを明らかにすることが多い。

人は一つのことを言いながら、繰り返し別の行動をすることがある。

システムは一つの目的のために存在すると言いながら、繰り返し別のものを守ることがある。

組織は中立を主張しながら、繰り返し同じ結果を生み出すことがある。

役割は義務を主張しながら、繰り返し服従を生み出すことがある。

報酬を受ける地位は真実を主張しながら、繰り返し自分が依存するシステムを守ることがある。

時間を通した誘因は、一つの瞬間では隠れるパターンを人々が見るのを助ける。

人々は次のように問うべきである。

時間を通してどのような行動が繰り返されてきたのか？

どのような結果が繰り返されてきたのか？

どの誘因が守られたままなのか？

どの誘因が隠されたままなのか？

誰が繰り返し利益を得るのか？

誰が繰り返し損失を避けるのか？

誰が繰り返し金銭を得るのか？

誰が繰り返し地位を得るのか？

誰が繰り返し立場を維持するのか？

誰が繰り返し説明責任を避けるのか？

誰が繰り返し同じ環境が続くことに寄与しているのか？

時間を通したパターンは、発言だけでは説明できない誘因を明らかにすることがある。

これは証拠基準に直接つながる。

証拠基準は、行動が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、どの誘因がその行動を形づくっているかを問う。

受け継がれる役割と繰り返される寄与

誘因は役割を通して受け継がれることがある。

誰かが辞め、退職し、亡くなり、または交代した後に、別の人がその役割に入ることがある。

その人は、単に仕事を引き受けているだけだと考えるかもしれない。

しかし、その役割にはすでにパターンが存在しているかもしれない。

繰り返される行動を伴っているかもしれない。

繰り返される沈黙を伴っているかもしれない。

繰り返される保護を伴っているかもしれない。

繰り返される強制を伴っているかもしれない。

繰り返される従順を伴っているかもしれない。

繰り返される教えを伴っているかもしれない。

繰り返される服従を伴っているかもしれない。

その役割に入った人は、前の人々が続けてきたものをそのまま続けることがある。

このように世界環境は世代を通して繰り返されることがある。

人々は、元の仕組みを作っていなくても、それに寄与することができる。

役割を受け継ぎ、その仕組みを続けるのを助けることができる。

人々は次のように問うべきである。

この人がその役割に入る前、その役割はどのような行動を生み出していたのか？

この役割は今、どのような行動を要求しているのか？

この人がその役割を離れた後も、その役割はどのような行動を続けるのか？

その役割は何を守るのか？

何を繰り返すのか？

何を抑えるのか？

人々が何を問うことを妨げるのか？

その役割は何を正常なものにするのか？

これは重要である。人々は、単に前の人々がしたことをしているだけだと考えながら、繰り返される害、繰り返される沈黙、繰り返される服従、繰り返されるシステムの保護に寄与することがあるからである。

沈黙、保護、誘因

沈黙は、誘因の最も強い指標の一つになり得る。

人々はしばしば、沈黙は何も意味しないと考える。

しかし沈黙は行動になり得る。

沈黙はシステムを守ることがある。

金銭を守ることがある。

権威を守ることがある。

沈黙は依存を守ることがある。

評判を守ることがある。

地位を守ることがある。

沈黙はナラティブを守ることがある。

沈黙は不正を守ることがある。

人々は次のように問うべきである。

誰が沈黙したままなのか？

その沈黙によって何が守られているのか？

その沈黙から誰が利益を得るのか？

沈黙が終われば、誰が失うのか？

誰かが語れば何が起きるのか？

どのような結果に直面する可能性があるのか？

どの誘因が、人々に沈黙したままであることを促すのか？

沈黙は何が続くことを許してきたのか？

語ることが自分の依存するものを脅かすため、人々は沈黙することがある。

語ることが収入を脅かすため、沈黙することがある。

語ることが評判を脅かすため、沈黙することがある。

語ることがシステム内の地位を脅かすため、沈黙することがある。

語ることが受け継いだ役割を脅かすため、沈黙することがある。

正常化によって問わないことを教えられてきたため、沈黙することがある。

したがって沈黙は、問われなければならない行動になる。

失うことへの恐怖

人々は、得るものだけを理由に行動するのではない。

失うことを恐れるものを理由にも行動する。

失うことへの恐怖は、得ることそのものと同じくらい強く行動を形づくることがある。

人々は次のものを失うことを恐れることがある。

金銭。

雇用。

地位。

立場。

所属。

承認。

保護。

権威。

影響力。

安心。

評判。

将来。

失うことへの恐怖は、問いが始まる前に問うことを止めることがある。

失うことへの恐怖は沈黙を生み出すことがある。

追従を生み出すことがある。

服従を生み出すことがある。

人々が十分には同意していないことへの参加を生み出すことがある。

人々は次のように問うべきである。

この人は何を失うことを恐れているのか？

この役割は何を失うことを恐れているのか？

このシステムは何を失うことを恐れているのか？

人々が信じることを止めたら何が変わるのか？

人々が従うことを止めたら何が変わるのか？

人々が問い始めたら何が変わるのか？

人々が前の人々がしたことを続けるのを止めたら何が変わるのか？

失うことへの恐怖は、力が必要になるよりはるか前から服従を生み出すことがある。

人々はまた、真実が誘因を乗り越えるのに必ずしも十分強いとは限らないことを理解しなければならない。

人々は、何かが問われるべきだと分かっているのに、失うことへの恐怖がその行動を守っているために続けることがある。

集団的寄与と繰り返される世界

世界環境は通常、一人の人間によって維持されているのではない。

同じ仕組みに小さな部分を寄与する何百万人もの人々によって維持されている。

一人が教える。

一人が強制する。

一人が繰り返す。

一人が承認する。

一人が書く。

一人が沈黙する。

一人が従う。

一人が守る。

個別に見れば、これらの行動は無害に見えることがある。
集団として、彼らは世界環境全体を再創造することができる。

人々が見ているのは次のものだけかもしれない。

自分自身の役割。

自分の仕事。

自分の賃金。

自分自身の指示。

自分の責任。

自分自身の生存。

しかし世界環境は、多くの人々が同じ仕組みの小さな部分を繰り返す、その寄与の組み合わせによって作られている。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は何に寄与しているのか？

私はどの繰り返しのパターンが続くのを助けているのか？

私の行動は、どのような世界環境の再創造を助けているのか？

何百万人もの人々が同じことを続けたら何が起きるのか？

これは、誘因と利得の最も重要な部分の一つである。

教育、教師、誘因

教育は次の世代を形づくるため、誘因と利得を通して問われなければならない。

教師は同じ誘因主導のシステムの産物である。

その中で教育を受けた。

その中で訓練された。

その中で報酬を受ける。

その中で評価される。

その中の役割に置かれる。

その中で情報を届けることを期待される。

その中で情報を評価することを期待される。

その中で子どもたちが機能するのを助けることを期待される。

しかし、現実の世界環境を問うことを子どもたちに教えるための、構造化された証拠に基づく教育経路は与えられていない。

これは重要である。教師は子どもたちにとって情報源になるからである。

教師はまた、子どもたちが何を教えられ、何を繰り返し、何によって報われ、何を問うことを抑えられるかを形づくる誘因構造の一部にもなる。

これは教師を攻撃するためのものではない。

教師がその中で活動する誘因主導のシステムを理解するためのものである。

したがって教育は、そうする意図がまったくなくても、同じ世界を繰り返し再創造することがある。

人々は次のように問うべきである。

教育は何に報いているのか？

教育は何を繰り返しているのか？

教育は何を守っているのか？

教育は何を正常なものとしているのか？

教育は何を抑えているのか？

教育は何を問い損なっているのか？

教師は何を届けることで報酬を受けるのか？

教師は何を評価するよう訓練されているのか？

子どもたちは何の中で機能する準備をさせられているのか？

教師がシステムそのものを問えば何が起きるのか？

子どもたちが世界環境そのものを問うよう教えられたら何が起きるのか？

教育の中の誘因が問われなければ、教育は適切に改善できない。

教師が、同じシステムを繰り返す役割に対して報酬を受け、訓練され、評価され、配置されるなら、教育は、世界環境から学ぶのではなく、その中で機能する準備をした人々を生み出し続けることがある。

システム、誘因、繰り返される結果

システムは、その内部に誘因が組み込まれているため、長期間存続することがある。

人々は、自分は独立していると考えながらシステムに入ることがある。

しかしシステムは、依存を通して徐々に行動を形づくることがある。

誘因が問われないままにいるほど、それは正常に見えやすくなる。

システムは沈黙に報いることがある。

服従に報いることがある。

忠誠に報いることがある。

反復に報いることがある。

強制に報いることがある。

システム自体を守ることに報いることがある。

システムは問うことを罰することがある。

暴露を罰することがある。

真実を罰することがある。

拒否を罰することがある。

人々は次のように問うべきである。

そのシステムはどの行動に報いるのか？

どの行動を抑えるのか？

どの行動を罰するのか？

どの行動を守るのか？

そのシステムはどのような結果を繰り返し生み出すのか？

どの繰り返される問題が現れ続けるのか？

どの誘因がそれらの結果を生み出しているのか？

人々はしばしば、誘因を問わないまま結果を直そうとする。

誘因が変わらなければ、行動も変わらないことが多い。

行動が変わらなければ、結果も変わらないことが多い。

したがって人類は、改善しようとしていると考えながら、同じ世界を繰り返すことがある。

誘因と人類の進歩

誘因と利得は「人類の進歩への欠けている経路」の一部である。

誘因が見えないままでは、人類は進歩できない。

人々が、自分たちが何に寄与しているのかを理解せずに、前の人々がしたことを続ける間、人類は進歩できない。

所属が真実より強くなる限り、人類は進歩できない。

人気が理解に取って代わる間、人類は進歩できない。

表面的な環境が本来の自分にとって代わる間、人類は進歩できない。

排除への恐怖が問うことを止める間、人類は進歩できない。

正常化が反復を受け入れられた現実に変える間、人類は進歩できない。

システムが理解ではなく反復に報いる間、人類は進歩できない。

教育が、世界環境を適切に問う方法を教えずに、その中で機能する準備を子どもたちにさせる間、人類は進歩できない。

人々が、自分が依存しているという理由で自分を害するものを守る間、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は次のように問う。

誰が利益を受けるのか？

誰が依存しているのか？

誰が守っているのか？

誰が失うのか？

誰が報酬を受けるのか？

誰が沈黙するのか？

誰が従うのか？

誰が正常なものとするのか？

この誘因はどのような行動を生み出すのか？

この行動は、どのような世界環境の再創造を助けるのか？

このようにして、人々は世界環境の下で作動している仕組みを見始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

誘因が見えるようになると、行動が見えるようになる。

行動が見えるようになると、寄与が見えるようになる。

寄与が見えるようになると、理解が可能になる。

理解が可能になると、人類は同じ世界を繰り返すことを止め始めることができる。

セクション4 - 性質と一貫性

性質と一貫性とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境を見ることを学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、証拠が主張されていることを裏づけているかを検証しなければならないことを確立した。

セクション3では、どの誘因が行動に報い、行動を守り、行動を繰り返させているのかを理解しなければならないことを確立した。

セクション4は、ここから性質と一貫性へ進む。

性質と一貫性が存在するのは、時間を通してどのような行動が繰り返し示されているのかを理解するまで、人々、システム、組織、環境、または世界そのものを適切に理解できないからである。

人々はしばしば、言葉を聞くよう教えられる。

しかし行動を適切に調べることは教えられない。

肩書を信頼するよう教えられる。

しかし一貫性を適切に検証することは教えられない。

約束を信じるよう教えられることが多い。

しかしパターンを適切に問うことは教えられない。

孤立した瞬間を評価するよう教えられることが多い。

しかし繰り返される行動から学ぶことは教えられない。

性質と一貫性は、人々に次のように問うことを教える。

どのような行動が繰り返し示されているのか？

どのような行動が繰り返し報われているのか？

どのような行動が繰り返し守られているのか？

どのような行動が繰り返し避けられているのか？

どのような行動が時間を通して一貫しているのか？

どのような行動が状況によって変わるのか？

どのような行動が世界環境の再創造を助けているのか？

性質は一つの瞬間ではない。

性質とは、時間を通して繰り返し示される行動である。

一貫性は一つの発言ではない。

一貫性とは、時間を通して言葉、行動、結果が繰り返し一致することである。

性質は人類にとって最大の学習道具の一つである。なぜなら、繰り返される行動は、言葉、イメージ、評判、提示がしばしば隠すものを明らかにするからである。

これは重要である。繰り返される行動は、孤立した瞬間が示せる以上のものを明らかにすることが多いからである。

何が示されているのか

世界環境はすでに、人類にそれがどのように作動しているかを示している。

問題は、常に何も示されていないことではない。

問題は、人々が、示されているものをどう問い、見て、理解し、そこから学ぶかを適切に教えられていないことである。

人々は嘘を見ることがある。

矛盾を見ることがある。

沈黙を見ることがある。

依存を見ることがある。

恐怖を見ることがある。

金銭が行動を形づくるのを見ることがある。

システムが自らを守るのを見ることがある。

メディアがナラティブを繰り返すのを見ることがある。

権威が証拠を避けるのを見ることがある。

人々が従うのを見ることがある。

繰り返しのパターンが続くのを見ることがある。

しかし、正しい問い方の枠組みがなければ、人々はなお誤った理解に到達することがある。

人々は、示されているものをどう問い、見て、理解し、そこから学ぶかを適切に教えられていないため、誤った理解に到達することが多い。

人々は、示されているものを見ても、それが何を意味するかを理解しないことがある。

行動を見ても、個人だけに焦点を当てることがある。

矛盾を見ても、怒りで止まることがある。

嘘を見ても、非難で止まることがある。

システムを見ても、表面的な説明で止まることがある。

繰り返される問題を見ても、それを生み出している仕組みをまだ理解していないことがある。

性質と一貫性は、繰り返される行動を通して示されているものを問うことを人々に教える。

それは、人々に次のことだけを問わせるのではない。

何が起きたのか？

それだけでなく、次のようにも問わせる。

これは何を示しているのか？

どの行動が明らかにされているのか？

どのパターンが明らかにされているのか？

どの矛盾が示されているのか？

これは世界環境について何を教えているのか？

人類はここから何を学べるのか？

世界こそが本当の学校である。世界環境は、行動、矛盾、反復、誘因、沈黙、依存、権威、恐怖、結果を絶えず示しているからである。

人々は、見るできないものから学ぶことはできない。

しかし人々は、問う方法を教えられていないものからも学ぶことはできない。

言葉、行動、パターン

人々はしばしば、人が言うことを評価する。

しかし行動は、言葉が隠すものを明らかにすることがある。

言葉は練習して用意できる。

言葉は選別できる。

言葉は繰り返せる。

言葉は守ることができる。

言葉は提示できる。

長い時間の中では、行動は隠すことがより難しい場合が多い。

情報は、人々に何が起きたかを伝えることができる。

行動は、人々になぜそれが起きたかを教えることができる。

人々は次のように問うべきである。

言葉は行動と一致しているのか？

行為は主張と一致しているのか？

結果は約束と一致しているのか？

行動は時間を通して同じままなのか？

誰が見ているかによって行動は変わるのか？

誰が利益を得るかによって行動は変わるのか？

繰り返される行動は、孤立した発言では明らかにできない矛盾を明らかにすることがある。

パターンはしばしば、約束以上のものを明らかにする。

一貫性はしばしば、評判以上のものを明らかにする。

行動はしばしば、肩書以上のものを明らかにする。

したがって人々は、孤立した瞬間ではなくパターンを調べることを学ばなければならない。

行動は決して孤立して存在しない

行動は孤立して存在しない。

人は人に影響する。

システムは人に影響する。

人はシステムに影響する。

大人は子どもに影響する。

子どもは大人になる。

将来世代は行動を受け継ぐ。

そして将来世代は、世界環境の再創造を助ける。

繰り返されるすべての行動には、個人を越えた結果がある。

繰り返される行動は正常なものになることがある。

正常化は継承になることがある。

継承は受け入れられた現実になることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

これはどのような行動を生み出しているのか？

誰がこの行動から学んでいるのか？

誰がこの行動を受け継ぐのか？

この行動は、どのような将来の世界環境の再創造を助けるのか？

性質と一貫性は、人々に個人の先まで考え、より広い環境から学び始めることを教える。

評判より性質

人々はしばしば、評判を信頼するよう教えられる。

しかし評判は自動的に性質ではない。

評判は作ることができる。

守ることができる。

繰り返すことができる。

宣伝することができる。

受け継ぐことができる。

性質は異なる。

性質は、行動を通して繰り返し示される。

人々は次のように問うべきである。

どのような行動が繰り返し示されているのか？

圧力が生じると何が起きるのか？

誰も見ていないとき何が起きるのか？

得るものがあるとき何が起きるのか？

失うものがあるとき何が起きるのか？

真実と誘因が衝突するとき何が起きるのか？

誘因が関わる時、性質は最も見えやすくなることが多い。

だからこそ、性質と一貫性は誘因と利得に直接つながる。

時間を通した一貫性

一貫性は一つの出来事から判断できない。

一貫性は時間を通して検証されなければならない。

人々は、自分は真実を重んじると言うことがある。

学びを重んじると言うことがある。

公正を重んじると言うことがある。

問うことを重んじると言うことがある。

しかし一貫性は、行動がそれらの主張を繰り返し裏づけているかを問う。

人々は次のように問うべきである。

時間を通してどのような行動が示されてきたのか？

どのようなパターンが繰り返されてきたのか？

どのような矛盾が現れてきたのか？

どの行動が変わらないままなのか？

状況が変わると、どの行動が消えるのか？

人々は最終的に自分が繰り返し行うことを示すため、一貫性はしばしば最も強い証拠経路の一つになる。

これは証拠基準に直接つながる。

証拠基準は、行動が主張されていることを裏づけているかを問う。

性質と一貫性は、行動が時間を通して繰り返し一致したままかを問う。

イメージ対性質

人々はイメージを管理することに熟達することがある。

イメージとは、人々が他者に見せたいものである。

性質とは、行動が繰り返し示すものである。

イメージは作ることができる。

守ることができる。

見せることができる。

宣伝することができる。

報われることがある。

しかしイメージは自動的に性質ではない。

人々は次のように問うべきである。

私はイメージを見ているのか？

それとも行動を見ているのか？

私は提示を見ているのか？

それとも一貫性を見ているのか？

どのような行動が繰り返し示されているのか？

どのような行動が繰り返し隠されているのか？

圧力がなくなると、どのような行動が現れるのか？

圧力が加わると、どのような行動が現れるのか？

人々は、行動が繰り返し別のものを明らかにしている間も、何年もイメージを守り続けることがある。

人々、システム、世界環境

性質と一貫性は、個人だけに適用されるものではない。

世界環境の中で作動するすべてのものに適用される。

次のものに適用される。

人々。

教師。

親。

学校。

政府。

メディア。

機関。

システム。

組織。

地域社会。

環境。

人々はしばしば、これらが何を言うかを検証する。

しかし、これらが繰り返し何をするかを適切に検証していない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

どのような行動が繰り返し示されているのか？

どのような行動が繰り返し守られているのか？

どのような行動が繰り返し避けられているのか？

どのような行動が繰り返し報われているのか？

どのような行動が繰り返し正常なものとされているのか？

どのような行動が繰り返し受け継がれているのか？

人類がそこから学ぶべきものとして、どのような行動が示されているのか？

性質と一貫性は、どこでも適用されなければならない。

教育、教師、性質

教育も、性質と一貫性を通して問われなければならない。

教師は子どもたちにとって情報源になる。

子どもたちは情報だけから学ぶのではない。

行動からも学ぶ。

子どもたちは次のものを観察する。

大人が何をするか。

教師が何をするか。

システムが何に報いるか。

システムが何を避けるか。

システムが何を守るか。

システムが何を繰り返すか。

システムが何を正常なものとして示すか。

これは教師を攻撃するためのものではない。

教師がその中で活動する環境を理解するためのものである。

人々は次のように問うべきである。

子どもたちはどのような行動を繰り返し見ているのか？

子どもたちはどのような行動によって繰り返し報われているのか？

子どもたちはどのような行動を問うことを繰り返し抑えられているのか？

子どもたちは世界環境を繰り返す準備をさせられているのか？

それとも世界環境から学ぶ準備をさせられているのか？

子どもたちが行動、矛盾、誘因、沈黙、繰り返しのパターンをどう問うかを教えられなければ、示されているものを理解しないまま同じ世界環境を受け継ぐことがある。

なぜ性質と一貫性が重要なのか

性質と一貫性が重要なのは、繰り返される行動を理解するまで、人々は世界環境を適切に理解できないからである。

目的は、怒り、非難、恐怖、終わりのない反対の中に閉じ込められることではない。

目的は、世界環境がすでに示しているものから学ぶことである。

世界環境そのものが教育環境になる。

行動が教訓になる。

矛盾が教訓になる。

反復が教訓になる。

環境そのものが教師になる。

人々が示されるものに反応することを止め、示されるものから学び始めると、人間の意識は進歩する。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何がその行動に報いているのかを問う。

性質と一貫性は次のように問う。

行動は、主張されていることと繰り返し一致しているのか？

その行動は何を示しているのか？

その矛盾は何を教えているのか？

その繰り返しのパターンは何を明らかにしているのか？

人類は、示されているものから何を学べるのか？

このようにして、人々は孤立した瞬間の先へ進み始める。

こうして人々はパターンを認識し始める。

矛盾を認識し始める。

一貫性を認識し始める。

世界環境がすでに示しているものから学び始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることに進む。

時間を通した性質

このセクションの最初の部分では、性質と一貫性は孤立した瞬間についてのものではないと説明した。

それは、時間を通した繰り返される行動を理解することである。

ここからは、性質と一貫性が時間の中でどのように作用するかへ進む。

人々は、自分の性質をすぐに明らかにするとは限らない。

時間を通した行動が、それを明らかにすることが多い。

人は一つのことを言いながら、繰り返し別のことをすることがある。

システムは一つの目的を主張しながら、繰り返し異なる結果を生み出すことがある。

組織は中立を主張しながら、繰り返し特定の行動を守ることがある。

機関は公正を主張しながら、繰り返し難しい問いを避けることがある。

役割は義務を主張しながら、繰り返し服従を生み出すことがある。

時間を通した性質は、孤立した瞬間では隠れるパターンを人々が見るのを助ける。

人々は次のように問うべきである。

どのような行動が繰り返し示されてきたのか？

どのような結果が繰り返し生み出されてきたのか？

どのようなパターンが現れ続けるのか？

どのような矛盾が現れ続けるのか？

どの行動が変わらないままなのか？

どのような行動が状況によって変わるのか？

どの行動が誰が見ているかによって変わるのか？

時間を通したパターンは、発言だけよりも正確に性質を明らかにすることが多い。

矛盾と人間の行動

矛盾は、性質を理解する最も強い経路の一つになり得る。

人々は真実を重んじると言いながら、難しい真実を避けることがある。

問うことを重んじると言いながら、問いを抑えることがある。

学びを重んじると言いながら、反復を守ることがある。

公正を重んじると言いながら、繰り返し不公正な結果を生み出すことがある。

独立した思考を重んじると言いながら、同調に報いることがある。

人々は次のように問うべきである。

言葉と行動はどこで分かれるのか？

どの矛盾が繰り返し現れるのか？

その矛盾があるにもかかわらず、どのパターンが続くのか？

その矛盾が続くことで誰が利益を得るのか？

どの誘因がその矛盾を守っているのか？

矛盾は、自動的に悪意の証明になるわけではない。

しかし、繰り返される矛盾は問われなければならない。

繰り返される矛盾は、表面の下で作動している仕組みを明らかにすることがある。

世界環境はすでに人類に示している

世界環境はすでに、人類にそれがどのように作動しているかを示している。

問題は、常に何も示されていないことではない。

問題は、人類が示されているものから学ぶ方法を適切に教えられていないことである。

人々は矛盾を見て、非難で止まることがある。

嘘を見て、怒りで止まることがある。

システムを見て、表面的な説明で止まることがある。

繰り返される問題を見て、苛立ちで止まることがある。

繰り返される行動を見て、感情的な反応で止まることがある。

目に見える出来事を見ても、それを生み出している仕組みを理解しないことがある。

人々は、まだ十分な知識、理解、問いの能力を持っていないため、誤った理解に到達することが多い。

人々が見るものは次のようなものかもしれない。

一つの出来事。

一人の人。

一つのシステム。

一つの嘘。

一つの矛盾。

一つの結果。

そして、そこで止まる。

性質と一貫性は、人々に続けることを教える。

人々は次のように問うべきである。

これはどの行動を明らかにしているのか？

これはどの仕組みを明らかにしているのか？

これはどの繰り返しのパターンを示しているのか？

これはどの矛盾を示しているのか？

人類はここから何を学べるのか？

目的は、終わりなく問うことではない。

目的は理解である。

反対学

人類の進歩における最大の限界の一つは、人々が示されているものから学ぶ代わりに、示されているものに反応することが多いことである。

反応は進歩を止めることがある。

人々は怒る。

人々は恐れるようになる。

人々はどちらかの側を選ぶ。

人々は立場を守る。

人々は立場を攻撃する。

人々はナラティブの中に閉じ込められる。

人々は、自分が何に反応しているのかを理解しないまま、反応することに非常に大きなエネルギーを費やすことがある。

性質と一貫性は、人々に反応の先へ進むことを教える。

人々は次のように問うべきである。

これは何を示しているのか？

これは何を教えているのか？

どの行動が明らかにされているのか？

どの繰り返しのパターンが明らかにされているのか？

どの仕組みが作動しているのか？

人類はここから何を学べるのか？

目的地は反応ではない。

目的地は理解である。

選択的な性質と選択的な思考

人々は、常に一貫して行動するとは限らない。

人々は次のものによって異なる行動をすることがある。

金銭。

地位。

聴衆。

権威。

承認。

人気。

恐怖。

利得。

損失。

ある環境では真実に基づいているように見え、別の環境では真実を避けることがある。

一つの題材を問いながら、別の題材を守ることがある。

一つのシステムに異議を示しながら、別のシステムを擁護することがある。

原則を選択的に適用することがある。

人々は次のように問うべきである。

この行動はどこでも一貫しているのか？

それとも、特定の状況でだけ現れるのか？

誘因が現れると何が変わるのか？

圧力が現れると何が変わるのか？

価値のある何かが危険にさらされると何が変わるのか？

誘因と圧力が衝突するとき、性質は最も見えやすくなることが多い。

沈黙、参加、繰り返される行動

性質は行為だけによって明らかになるのではない。

性質は沈黙によっても明らかになることがある。

沈黙は行動になり得る。

沈黙は保護になり得る。

沈黙は参加になり得る。

人々は次のように問うべきである。

誰が沈黙したままなのか？

何が守られているのか？

どの繰り返される行動が続くことを許されているのか？

どの真実が避けられているのか？

どの矛盾が無視されているのか？

語ることが自分の依存するものを脅かすため、人々は沈黙することがある。

語ることが自分の地位を脅かすため、沈黙することがある。

語ることが所属を脅かすため、沈黙することがある。

語ることが承認を脅かすため、人々は沈黙することがある。

したがって性質には、人々が繰り返し選んで行わないことも含まれる。

行動、影響、将来世代

行動は決して孤立して存在しない。

人は人に影響する。

システムは人に影響する。

人はシステムに影響する。

大人は子どもに影響する。

子どもは大人になる。

将来世代は行動を受け継ぐ。

そして将来世代は、世界環境の再創造を助ける。

繰り返されるすべての行動には、個人を越えた結果がある。

人々は、自分は小さな決定をしているだけだと考えることがある。

しかし、何百万人もの繰り返される行動が、世界環境全体を再創造することがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどの行動に寄与しているのか？

私はどの行動を正常なものにするのを助けているのか？

将来世代はどの行動を受け継ぐのか？

この行動は、どのような世界環境の再創造を助けるのか？

教育、教師、性質

教育もまた、性質と一貫性を通して検証されなければならない。

子どもたちは情報だけを受け継ぐのではない。

行動を受け継ぐ。

子どもたちは次のものを観察する。

大人がどのように行動するか。

教師がどのように行動するか。

権威がどのように行動するか。

システムがどのように行動するか。

人々がどのように反応するか。

人々がどのように沈黙するか。

人々がどのように問うか。

人々がどのように問うことを避けるか。

子どもたちは徐々に、それらの行動を自分自身も受け継ぐことがある。

これは教師を攻撃するためのものではない。

教師を形づくる環境を理解するためのものである。

人々は次のように問うべきである。

子どもたちはどのような行動を繰り返し見ているのか？

子どもたちはどのような行動を繰り返し受け継いでいるのか？

子どもたちはどのような行動によって繰り返し報われているのか？

子どもたちはどのような行動を問うことを繰り返し抑えられているのか？

繰り返される行動が見えないままでは、教育は適切に改善できない。

人間の意識と世界環境から学ぶこと

人類の進歩において最も大きく欠けている経路の一つは、すでに見えているものから学ぶことである。

人類には絶えず次のものが示されている。

矛盾。

依存。

沈黙。

権威。

恐怖。

追従。

正常化。

誘因。

反復。

行動。

しかし人類は、これらの仕組みからどう学ぶかを適切に教えられていない。

人々は、存在する中で最大の学習環境の中にすでに立っているのに、教えられるのを待っていることが多い。

世界環境そのものが教訓である。

世界環境そのものが証拠である。

世界環境そのものが学ぶ機会である。

世界環境そのものが教師である。

人々が示されるものに反応することを止め、示されるものから学び始めると、人間の意識は進歩する。

したがって、人々は次のように問うべきである。

これは何を示しているのか？

これは何を教えているのか？

人類はここから何を学べるのか？

どの繰り返しのパターンが明らかにされているのか？

どの行動が明らかにされているのか？

どのような世界環境が再創造されているのか？

人々がこれらの問いを学ぶと、反応の先へ進み、理解へ向かい始める。

性質と人類の進歩

性質と一貫性は「人類の進歩への欠けている経路」の一部である。

繰り返される矛盾が見えないままでは、人類は進歩できない。

人々が一つのことを言いながら、繰り返し別のことをする間、人類は進歩できない。

イメージが行動より重要になる間、人類は進歩できない。

評判が一貫性より重要になる間、人類は進歩できない。

二重基準が正常なものとして残る間、人類は進歩できない。

誘因が繰り返し原則を上回る間、人類は進歩できない。

繰り返される行動が検証されずに受け継がれる間、人類は進歩できない。

子どもたちが、それらをどう問うかを教えられないまま行動を受け継ぐ間、人類は進歩できない。

人々が示されているものから学ぶ代わりに、示されているものに反応する間、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何が行動に報い、何が行動を守っているのかを問う。

性質と一貫性は次のように問う。

行動は、主張されていることと繰り返し一致しているのか？

その行動は何を示しているのか？

その矛盾は何を教えているのか？

その繰り返しのパターンは何を明らかにしているのか？

人類は、示されているものから何を学べるのか？

こうして人々はパターンを認識し始める。

矛盾を認識し始める。

一貫性を認識し始める。

世界環境がすでに示しているものから学び始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることに進む。

セクション5 - 問うことへの許可

問うことへの許可とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境を見ることを学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、証拠が主張されていることを裏づけているかを検証しなければならないことを確立した。

セクション3では、どの誘因が行動に報い、行動を守り、行動を繰り返させているのかを理解しなければならないことを確立した。

セクション4では、繰り返される行動がすでに人類に示しているものから学ばなければならないことを確立した。

セクション5は、ここから問うことへの許可へ進む。

問うことへの許可が存在するのは、人々が、受け入れ、従い、繰り返し、服従し、沈黙することを教える環境によって形づくられながら、これをどう問うかを教えられていないからである。

人々は、思考そのものを適切にどう問うかを教えられないまま、何を考えるべきかを教えられる。

何を信じるべきかを教えられながら、その信念がどう形成されたかを教えられない。

何を繰り返すべきかを教えられながら、繰り返されているものをどう検証するかを教えられない。

誰を信頼すべきかを教えられながら、信頼をどう問うかを教えられない。

どの権威を受け入れるべきかを教えられながら、権威をどう問うかを教えられない。

システムの中でどう機能するかを教えられながら、システムをどう問うかを教えられない。

これは、人類の進歩に対する最大の障壁の一つを生み出す。

人々は、問うには許可が必要だと感じ始めることがある。

権威からの許可。

システムからの許可。

教師からの許可。

親からの許可。

雇用主からの許可。

政府からの許可。

メディアからの許可。

専門家からの許可。

集団からの許可。

人気からの許可。

社会的受容からの許可。

周囲の世界環境からの許可。

問うことへの許可は、人々に次のように問うことを教える。

私はこれを問ってよいのか？

誰が私に許可が必要だと教えたのか？

問ったら何が起きると私は恐れているのか？

私が問わなければ誰が利益を得るのか？

問うことが抑えられると、どの行動が守られるのか？

人々が問う許可を待つと、どのような世界環境が再創造されるのか？

問うことへの許可は、単に質問をすることだけの話ではない。

そもそも、なぜ人々が自分自身に問うことを止めさせるのかを理解することである。

問うことへの許可は、許可そのものを問うことも人々に教える。

条件づけと生涯にわたる許可構造

人々はしばしば、生涯を通して許可を求めるよう条件づけられる。

子どもは大人に許可を求めることがある。

生徒は教師に許可を求めることがある。

従業員は雇用主に許可を求めることがある。

人々はシステムに許可を求めることがある。

集団に許可を求めることがある。

権威に許可を求めることがある。

社会そのものに許可を求めることがある。

時間がたつにつれて、この行動は正常なものになることがある。

人々は徐々に、自分自身の観察を信頼しなくなることがある。

自分自身の学ぶ能力を徐々に信頼しなくなることがある。

示されているものを徐々に問わなくなることがある。

人々は許可を求めることに慣れすぎて、自分がそうしていることすら認識しなくなることがある。

許可構造は最終的に見えなくなることがある。

人々は、自分がその内側で活動していることに気づかなくなることがある。

人々は次のように問うべきである。

誰が私に許可を求めることを教えたのか？

私はいつ許可を求め始めたのか？

私はどの許可構造を受け継いだのか？

私は自分自身の学ぶ能力を信頼しているのか？

それとも、学ぶ前に承認を待っているのか？

学ぶ許可を待つこと

人々は、存在する中で最大の学習環境の中にすでに立っているのに、教えられるのを待っていることが多い。

世界環境はすでに、行動、矛盾、反復、依存、沈黙、権威、誘因、恐怖、結果、繰り返しのパターンを示している。

しかし人々は、それでも何が重要かを誰か他の人に言われるのを待つことがある。

権威が承認するのを待つことがある。

メディアが示すのを待つことがある。

専門家が説明するのを待つことがある。

教師が教えるのを待つことがある。

集団が受け入れるのを待つことがある。

調べる前に人気が出るのを待つことがある。

学ぶ前に許可を待つことがある。

人類はしばしば、すでに見えている世界から学ぶための許可を待つ。

つまり人々は、世界環境の中で生きながら、そこから学ばないことがあり得る。

示されているものを見ても、それを問わないことがある。

矛盾を見ても、誰か他の人が説明するのを待つことがある。

繰り返される行動を見ても、それを問うことを誰か他の人が承認するのを待つことがある。

システムが同じパターンを繰り返すのを見ても、それが重要だと誰か他の人に言われるのを待つことがある。

人々は次のように問うべきである。

私は世界環境から学んでいるのか？

それとも、そこから学ぶ許可を待っているのか？

私は示されているものを問っているのか？

それとも、誰か他の人が先に問うのを待っているのか？

私は自分自身の心を使っているのか？

それとも、何が自分の注意に値するかを別の情報源に決めてもらうのを待っているのか？

世界こそが本当の学校である。

しかし、世界を問う許可を待っているなら、人々は世界から学ぶことができない。

権威、承認、委任された思考

人々は、権威を適切にどう問うかを教えられないまま、権威を信頼するよう教えられる。

肩書を信頼するよう教えられる。

役割を信頼するよう教えられる。

地位を信頼するよう教えられる。

システムを信頼するよう教えられる。

公式発表を信頼するよう教えられる。

承認された情報源を信頼するよう教えられる。

受け入れ可能なものとして提示されるものを信頼するよう教えられる。

これは、委任された思考を生み出すことがある。

委任された思考とは、人々が別の人、役割、システム、情報源、集団、権威に、自分が何を問い、信じ、受け入れ、繰り返し、拒絶してよいかを決めさせるときに起きる。

人々は、他者が作った境界の内側で考え続けているのに、自分は独立して考えていると信じることがある。

より広い枠組みを問わないまま、一つのことを問うことがある。

一つの権威を拒絶しながら、別の権威を受け入れることがある。

一つのナラティブを離れ、別のナラティブに入ることがある。

すでに信頼している誰かに承認されたという理由で、結論で止まることがある。

問うことへの許可は、人々に次のように問うことを教える。

私は自分で考えているのか？

それとも別の情報源に私の代わりに考えさせているのか？

私は枠組みそのものを問っているのか？

それとも与えられた枠組みの内側だけで問っているのか？

私は証拠を信頼しているのか？

それとも承認を信頼しているのか？

私は理解に従っているのか？

それとも権威に従っているのか？

人々が問うことを他者に委ねるなら、独立した思考は発達できない。

恐怖、所属、周囲に合わせること

問うことが所属を脅かす可能性があるため、人々はしばしば自分自身に問うことを止めさせる。

拒絶されることを恐れることがある。
批判されることを恐れることがある。
嘲笑されることを恐れることがある。
孤立することを恐れることがある。
承認を失うことを恐れることがある。
地位を失うことを恐れることがある。
仕事を失うことを恐れることがある。
人間関係を失うことを恐れることがある。
一人で立つことを恐れることがある。
所属が、問うことより強くなることがある。
承認が、真実より強くなることがある。
恐怖が、理解より強くなることがある。
周囲に合わせたいという理由で、人々は沈黙することがある。
所属したいという理由で、他の人々が繰り返すものを繰り返すことがある。
排除を恐れるため、他の人々が守るものを守ることがある。
違って見られたくないため、問いを避けることがある。
自分が何に従っているのかを理解する前に、他の人々の行動に従うことがある。
これは誘因と利得に直接つながる。

人々が問うことを避けるのは、それが真実だと信じているからだけではない。

問うことが、自分の依存するもの、所属するもの、失うことを恐れるものを脅かすために、問うことを避ける場合もある。

人々は次のように問うべきである。

これを問ったら、私は何を失うことを恐れているのか？

私は理解しているから沈黙しているのか？

それとも排除を恐れているから沈黙しているのか？

私は検証したから同意しているのか？

それとも所属したいから同意しているのか？

これは真実だから繰り返しているのか？

それとも他の人々が繰り返しているから繰り返しているのか？

問うことへの許可は、人々に真実と所属を分けることを教える。

追従、同調、社会的受容

人間の環境はしばしば、追従に報いる。

同意することで報われることがある。

繰り返すことで報われることがある。

追従することで報われることがある。

受け入れられた境界の内側にいることで報われることがある。

他の人々が受け入れているものを問わないことで報われることがある。

同調が正常なものになることがある。

正常化が受け継がれることがある。

受け継がれた行動が、受け入れられた現実になることがある。

すると人々は、社会的受容を真実と取り違えることがある。

多くの人々が受け入れているから正しいと信じることがある。

多くの人々が従っているから安全だと信じることがある。

問う人が少ないから、問うことが間違っていると信じることがある。

承認、到達範囲、地位、人気を与えられていないから重要ではないと信じることがある。

人々はまた、他と違うことを恐れることがある。

離れて立つことを恐れることがある。

周囲に合わないことを恐れることがある。

間違っ見えることを恐れることがある。

一人になることを恐れることがある。

人々は次のように問うべきである。

私は理解しているから従っているのか？

それとも他の人々が従っているから従っているのか？

私は、証拠がそれを裏づけているから受け入れているのか？

それとも社会的に受け入れられているから受け入れているのか？

私は検証したから問うことを避けているのか？

それとも、それを問えば自分だけが離れて立つことになるからなのか？

追従は理解ではない。

同調は真実ではない。

社会的受容は証拠ではない。

許可構造は、繰り返される世界の問題を続けさせる最大の仕組みの一つになり得る。

問うことへの許可が重要なのは、何を問ってよいかを決めるために社会的承認に依存している間、人々は独立した思考者になれないからである。

子ども、教育、問う能力を失うこと

子どもたちは自然に質問する。

子どもたちはしばしば、なぜなのかを知りたがる。

なぜ物事が起きるのかを問う。

なぜ人々が特定の行動をするのかを問う。

なぜ規則が存在するのかを問う。

なぜ大人が一つのことを言いながら別のことをするのかを問う。

理解しようとしているから問うのである。

しかし世界環境は、子どもたちを徐々に問うことから遠ざけるよう訓練することがある。

子どもたちは静かにするよう教えられることがある。

受け入れるよう教えられることがある。

繰り返すよう教えられることがある。

服従するよう教えられることがある。

なぜと問うことを止めるよう教えられることがある。

問うことは失礼だと教えられることがある。

権威を問うことは間違いだと教えられることがある。

より良い問いより、正しい答えのほうが重要だと教えられることがある。

理解より承認のほうが重要だと教えられることがある。

受け入れられた境界に異議を示す問いをするというだけで、難しい、邪魔をする、問題がある、トラブルメーカーだとさえ評価されることがある。

教育はしばしば、問うことより答えに報いる。

検証より反復に報いることが多い。

独立した思考より服従に報いることが多い。

世界環境を適切にどう問うかを教えないまま、その中で機能する準備を子どもたちにさせることが多い。

だからこそ、問うことへの許可は教育にとって極めて重要である。

子どもたちが問う能力を失えば、何が世界環境を形づくっているのかを理解しないまま、それを受け継ぐことがある。

子どもたちが安全に、適切に問う方法を教えられなければ、自分が生まれた同じ繰り返しのパターンの産物になることがある。

人々は次のように問うべきである。

子どもたちは問い方を教えられているのか？

それとも答え方だけを教えられているのか？

子どもたちは検証する方法を教えられているのか？

それとも繰り返す方法だけを教えられているのか？

子どもたちは世界環境から学ぶ方法を教えられているのか？

それともその中で機能する準備をさせられているのか？

子どもたちには問うことへの許可が必要である。なぜなら、問うことは、見ること、理解すること、学ぶこと、独立した思考へ入る経路の一つだからである。

なぜ問うことへの許可が重要なのか

問うことへの許可が重要なのは、問うことを許されていないと感じる世界から人々は学べないからである。

見えない許可構造は、人々が見えなくなる心理的境界になり得る。

人々は身体的には自由であっても、精神的には受け継いだ境界の内側で活動していることがある。

人々は、自分自身も寄与している問題を誰か他の人が解決するのを待ちながら一生を過ごすことがある。

指導者を待つことがある。

システムを待つことがある。

専門家を待つことがある。

権威を待つことがある。

誰か他の人が行動するのを待つことがある。

独立して考える許可を待っている間、人類は独立した思考者になることができない。

人々が世界環境から学ぶ者になる許可を待っている間、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何が行動に報い、何が行動を守っているのかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと繰り返し一致しているかを問う。

問うことへの許可は次のように問う。

誰が、または何が、人々に問うには許可が必要だと信じさせたのか？

人々が問うと何が起きるのか？

人々が問わないと何が起きるのか？

問うことが抑えられると、どの行動が守られるのか？

人々が問う許可を待つと、どのような世界環境が再創造されるのか？

このようにして、人々は自分自身の思考を取り囲む見えない境界を見始める。

このようにして、人々は委任された思考を認識し始める。

恐怖に基づく沈黙を認識し始める。

同調を認識し始める。

社会的承認を仕組みとして認識し始める。

このようにして、人々は受け入れから問うことへ進む。

こうして人々は、問うことから見ることへ進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることへ進む。

自己検閲と内面的な許可

このセクションの最初の部分では、人々が問うには許可が必要だと感じ始めることがあると説明した。

ここからは、世界環境の中で作動する最も大きな見えない仕組みの一つへ進む。

人々はしばしば、誰か他の人が止める前に自分自身に問うことを止めさせる。

自分自身を検閲する。

自分自身を沈黙させる。

自分自身の観察を退ける。

矛盾を無視する。

難しい問いを避ける。

好奇心を抑える。

自分自身が話すのを止める。

人々は次のように考えることがある。

私はこれを問うべきではない。

私はそれを言うべきではない。

私は尋ねるべきではない。

これは放っておくべきだ。

私はそれに異議を示すべきではない。

私は周囲から離れて立つべきではない。

人々は徐々に、自分自身が学びへの障壁になることがある。

人々は次のように問うべきである。

なぜ私は自分自身を止めているのか？

私は何を恐れているのか？

誰が私に、問うことを恐れるよう教えたのか？

私はどのような結果を想像しているのか？

私は真実を守っているのか？

それとも快適さ、承認、所属、依存を守っているのか？

問うことへの許可は、学びが始まる前に学びを止める内面的な障壁を認識することを人々に教える。

問うことへの許可は、許可そのものを問うことも人々に教える。

見えない許可構造

許可構造は最終的に見えなくなることがある。

人々は、自分がその内側で活動していることに気づかなくなることがある。

受け継いだ境界の内側で機能し続けながら、自分は自由に考えていると信じることがある。

承認された問いの範囲内にとどまりながら、自分は問っていると信じることがある。

他者の承認を求め続けながら、自分は独立していると信じることがある。

身体的には自由でありながら、心理的には制限されることがある。

誰かが身体的に止めているからではなく、見えない許可構造が正常なものとされているからである。

人々は許可を求めることに慣れすぎて、自分がそうしていることすら認識しなくなることがある。

人々は次のように問うべきである。

私は何を問ってよいのか？

誰がその境界を決めたのか？

私は何を一度も問ったことがないのか？

私は何を問わないよう教えられてきたのか？

何を問うことが不快に感じられるのか？

それを問ったら何が起きると私は恐れているのか？

見えない許可構造は、人々が見えなくなる心理的境界になり得る。

集団行動と集団的許可

人間は社会的な学習者である。

人々はしばしば、他者の行動から学ぶ。

集団を見る。

集団を真似る。

集団を繰り返す。

集団に従う。

集団を擁護する。

集団からの受容を求める。

したがって集団は、集団的な許可構造を作ることがある。

他の人々が問うと、人々は問っても安全だと感じることもある。

他の人々が沈黙すると、自分も沈黙することがある。

他の人々が従うと、自分も従うことがある。

他の人々が繰り返すと、自分も繰り返すことがある。

誰も問っていないというだけで、問うことを避けることがある。

集団的行動は、個人の理解より強くなることがある。

人々は次のように問うべきである。

この集団はどの行動に報いているのか？

この集団はどの行動を抑えているのか？

この集団はどの行動を正常なものとしているのか？

この集団はどの行動を守っているのか？

私は独立して考えているのか？

それとも集団の行動を真似ているのか？

集団が自動的に理解を生み出すわけではない。

集団は反復を再創造することもある。

沈黙、服従、参加

沈黙は、世界環境の中で作動する最も強い許可の仕組みの一つである。

人々はしばしば、沈黙は何も意味しないと考える。

しかし沈黙は参加になり得る。

沈黙は保護になり得る。

沈黙は寄与になり得る。

人々は結果を恐れるために沈黙することがある。

システムに依存しているために沈黙することがある。

周囲から離れて立つことを恐れるために沈黙することがある。

沈黙を正常な行動として受け継いだために沈黙することがある。

服従が報われると学んだために沈黙することがある。

人々は次のように問うべきである。

その沈黙から誰が利益を得るのか？

どのような行動が守られているのか？

どの矛盾が続くことを許されているのか？

どのような世界環境が再創造されているのか？

人々は、服従が自動的に理解になるわけではないと理解しなければならない。

服従は自動的に真実ではない。

参加は常に能動的なものとは限らない。

一度も検証したことのない行動を続けるだけで、人々は参与することがある。

許可構造は、繰り返される世界の問題を続けさせる最大の仕組みの一つになり得る。

表面性、イメージ、社会的受容

人々はしばしば、理解を発達させる方法を学ぶ前に、イメージを管理する方法を学ぶ。

成功しているように見せることに熟達することがある。

幸せそうに見せることに熟達することがある。

知識があるように見せることに熟達することがある。

重要な存在のように見せることに熟達することがある。

受け入れられているように見せることに熟達することがある。

社会的環境は、提示に報いることがある。

人々は他者の言葉を真似ることがある。

他者の行動を真似ることがある。

他者の外見を真似ることがある。

人気があると思うものを真似ることがある。

本当の気持ちを隠すことがある。

現実を反映していない生活を提示することがある。

真実ではなくイメージを守ることがある。

実際にどう感じているかを隠しながら、何年も幸せなふりをすることがある。

もはや自分自身を見いだせないイメージを維持することに閉じ込められることがある。

人々は次のように問うべきである。

私は何を守ろうとしているのか？

私は現実を示しているのか？

それともイメージを示しているのか？

私は独立して考えているのか？

それとも成功しているように見えるものを真似ているのか？

私は世界環境から学んでいるのか？

それとも、その中に合わせる方法を学んでいるのか？

表面性は、人々が問うことを止める別の仕組みになり得る。

何年もかけて築いたイメージを失うことを恐れることがある。

他と違うことへの許可

問うことへの最大の見えない障壁の一つは、他と違うことへの恐怖である。

人々は、周囲とは異なる立場に立つことを恐れることがある。

意見が異なることを恐れることがある。

間違って見えることを恐れることがある。

評価されることを恐れることがある。

人々は一人になることを恐れることがある。

受容を失うことを恐れることがある。

人々は所属を失うことを恐れることがある。

部外者になることを恐れることがある。

これは、同調することへの非常に大きな圧力を生み出すことがある。

人々は最終的に、理解するより周囲に合わせるほうが安全だと学ぶことがある。

人々は次のように問うべきである。

私は理解しようとしているのか？

それとも周囲に合わせようとしているのか？

私は真実を守っているのか？

それとも所属を守っているのか？

私は理解に従っているのか？

それとも受容に従っているのか？

人類の進歩は、人々が他と違うことを恐れなくなるときに始まることが多い。

他者が問題を解決するのを待つこと

人々はしばしば、自分自身も寄与している問題を誰か他の人が解決するのを待つ。

指導者を待つことがある。

システムを待つことがある。

専門家を待つことがある。

権威を待つことがある。

誰か他の人が行動するのを待つことがある。

しかし世界環境は、何百万人もの個人の寄与によって集団的に再創造されている。

一人が教える。

一人が繰り返す。

一人が強制する。

一人が承認する。

一人が守る。

一人が沈黙する。

一人が従う。

個別には、これらの行動は小さく見えることがある。

集団として、彼らは世界環境全体を再創造することができる。

人々は次のように問うべきである。

私は何に寄与しているのか？

私は何の再創造を助けているのか？

私はどの行動を繰り返しているのか？

私はどの行動を守っているのか？

私はどの行動を正常なものにしているのか？

誰か他の人が解決するのを待ちながら、人類は繰り返される問題を解決することはできない。

人間の意識と問うことへの許可

人々が学ぶための許可を待つことを止めると、人間の意識は進歩する。

人々は、存在する中で最大の学習環境の中にすでに立っているのに、教えられるのを待っていることが多い。

世界環境そのものが教訓である。

世界環境そのものが証拠である。

世界環境そのものが学ぶ機会である。

世界環境そのものが教師である。

人々は、すでに見えているものから学ぶための許可を必要としない。

それを理解するための道具が必要である。

人類はしばしば、すでに見えている世界から学ぶための許可を待つ。

だからこそ、問うことへの許可が重要なのである。

それは、学びを止める見えない障壁を取り除く。

問うことへの許可と人類の進歩

問うことへの許可は「人類の進歩への欠けている経路」の一部である。

人々が問う許可を待つ間、人類は進歩できない。

委任された思考が独立した思考に取って代わる間、人類は進歩できない。

所属が真実より強くなる限り、人類は進歩できない。

恐怖が理解より強くなる間、人類は進歩できない。

社会的受容が行動を支配する間、人類は進歩できない。

表面性が正常なものになる間、人類は進歩できない。

子どもたちが問う能力を失い、学ぶ前に許可を求め続ける大人へ成長する間、人類は進歩できない。

学びが始まる前に人々が自分自身に学ぶことを止めさせる間、人類は進歩できない。

独立して考える許可を待っている間、人類は独立した思考者になることができない。

人々が世界環境から学ぶ者になる許可を待っている間、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何が行動に報い、何が行動を守っているのかを問う。

性質と一貫性は、繰り返される行動が主張されていることと一致しているかを問う。

問うことへの許可は次のように問う。

誰が、または何が、許可を支配しているのか？

何が人々を問うことから止めているのか？

問うことが抑えられると、どの行動が守られるのか？

人々が許可を待つと、どのような世界環境が再創造されるのか？

人々が学ぶ許可を待つことを止めると何が起きるのか？

このようにして、人々は自分自身の思考を取り囲む見えない障壁を認識し始める。

自己検閲を認識し始める。

集団行動を認識し始める。

恐怖に基づく沈黙を認識し始める。

表面性を認識し始める。

このようにして、人々は受け入れから問うことへ進む。

こうして人々は、問うことから見ることへ進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることへ進む。

セクション6 - 感情的影響

感情的影響とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境を見ることを学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、証拠が主張されていることを裏づけているかを検証しなければならないことを確立した。

セクション3では、どの誘因が行動に報い、行動を守り、行動を繰り返させているのかを理解しなければならないことを確立した。

セクション4では、繰り返される行動がすでに人類に示しているものから学ばなければならないことを確立した。

セクション5では、学びが始まる前に、なぜ自分自身に問うことを止めさせることがあるのかを理解しなければならないことを確立した。

セクション6は、ここから感情的影響へ進む。

感情的影響が存在するのは、理解が発達する前に感情が心をどのように形づくるかを理解するまで、人々は人間の行動、信念、信頼、沈黙、反応、反復、学びを適切に理解できないからである。

人々は、完全に独立した思考者になる前から感情を持つ存在である。

理解する前に反応することがある。

検証する前に恐れることがある。

問う前に擁護することがある。

証拠を検証する前に信じることがある。

学ぶ前に側を選ぶことがある。

その結びつきを何が形づくったのかを理解する前に、感情的に結びつくことがある。

これは、人類の進歩に対する最大の障壁の一つを生み出す。

感情は、人々が何を受け入れるかに影響することがある。

何を拒絶するかに影響することがある。

誰を信頼するかに影響することがある。

何を恐れるかに影響することがある。

何を擁護するかに影響することがある。

何を避けるかに影響することがある。

何について沈黙するかに影響することがある。

何を繰り返すかに影響することがある。

何を問うことを拒むかに影響することがある。

感情的影響は、人々に次のように問うことを教える。

どの感情が作動させられているのか？

どのような反応が作られているのか？

どの恐怖が引き起こされているのか？

どのような怒りが使われているのか？

どのような感情的な結びつきが守られているのか？

どの信念が擁護されているのか？

この感情はどのような行動を生み出しているのか？

この感情的反応は、どのような世界環境の再創造を助けるのか？

感情的影響は、人類から感情を取り除くことについてのものではない。

理解が発達する前に、感情が人類をどのように形づくるかを学ぶことである。

感情は敵ではない

感情は敵ではない。

感情は人間であることの一部である。

感情は、何かが重要であることを示すことがある。

人々に危険を知らせることがある。

傷つきを明らかにすることがある。

気遣いを明らかにすることがある。

恐怖を明らかにすることがある。

感情的な結びつきを明らかにすることがある。

人々が何を価値あるものと考えているかを明らかにすることがある。

しかし感情は自動的に真実ではない。

恐怖は自動的に真実ではない。

怒りは自動的に真実ではない。

憤りは自動的に真実ではない。

興奮は自動的に真実ではない。

悲しみは自動的に真実ではない。

幸福感は自動的に真実ではない。

緊急性は自動的に真実ではない。

自信は自動的に真実ではない。

人々は何かを強く感じて、示されているものを誤解していることがある。

確信していても、間違っていることがある。

恐れていても、何がその恐怖を生み出したのかを理解していないことがある。

怒っていても、その怒りの下にある仕組みを理解していないことがある。

人々は次のように問うべきである。

私は何を感じているのか？

なぜ私はそれを感じているのか？

何がこの感情を生み出したのか？

どの証拠が、私が感じているものを裏づけているのか？

この感情は、私をどのような行動へ押しているのか？

この感情は、私が理解するのを助けているのか？

それとも、この感情は私が学ぶことを止めているのか？

感情には盲目的に従うのではなく、問いを向けるべきである。

感情的な提示は証拠ではない

感情的な提示は証拠ではない。

人が親切そうに話すことは証拠ではない。

情熱的に話すことは証拠ではない。

怒って話すことは証拠ではない。

誠実そうに話すことは証拠ではない。

自信を持って話すことは証拠ではない。

落ち着いて話すことは証拠ではない。

気遣いがあるように話すことは証拠ではない。

肩書を持っていることは証拠ではない。

専門家と呼ばれていることは証拠ではない。

証拠が主張を裏づけているかを検証する前に、人々は感情的な提示によって影響されることがある。

人は穏やかに話しても、誤らせることがある。

親切そうに話しても、欺くことがある。

情熱的に話しても、間違っていることがある。

怒って話しても、操作していることがある。

誠実そうに話しても、演じていることがある。

自信を持って話しても、証拠を欠いていることがある。

真実が検証される前に、肩書を使って信頼を作ることがある。

人々は次のように問うべきである。

私は証拠を信頼しているのか？

それとも提示を信頼しているのか？

私は真実を聞いているのか？

それとも感情に反応しているのか？

私は証拠を示されているのか？

それとも受け入れるよう感情的に影響されているのか？

これは証拠基準に直接つながる。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

感情的影響は、証拠が検証される前に人々を受け入れさせるために感情が使われているかを問う。

感情的演技と偽りの性質イメージ

感情的な演技は、時間を通して偽りの性質イメージを作ることがある。

人は親切さを繰り返し演じることができる。

誠実さを繰り返し演じることができる。

自信を繰り返し演じることができる。

落ち着きを繰り返し演じることができる。

関心を繰り返し演じることができる。

権威を繰り返し演じることができる。

専門性を繰り返し演じることができる。

時間がたつと、繰り返される感情的演技が、人々が性質と取り違える公的イメージを作ることがある。

これは性質と一貫性に直接つながる。

性質は、人が感情的に演じるものではない。

性質とは、時間を通して行動が繰り返し示すものである。

人々は次のように問うべきである。

どの行動がこの感情的な提示を裏づけているのか？

どの一貫性がこのイメージを裏づけているのか？

どの証拠がこの信頼を裏づけているのか？

どの誘因がこの演技を形づくっている可能性があるのか？

この感情的イメージが問われると何が起きるのか？

偽りの性質イメージは、人々が検証する前に信頼するようにさせることがあるため、感情的演技は問われなければならない。

理解より先の反応

人間の学びにおける最大の限界の一つは、人々が理解する前に反応することが多いことである。

反応はすぐに起きることがある。

理解には作業が必要である。

反応は即時的に感じられることがある。

理解には問うことが必要である。

反応は確信のように感じられることがある。

理解には検証が必要である。

反応は、人にすでに分かっていると思わせることがある。

理解には、人が立ち止まり、学ぶことが必要である。

人は何かを見て、直ちに怒ることがある。

何かを聞いて、直ちに恐れることがある。

何かを読んで、直ちにどちらかの側を選ぶことがある。

何かを見て、直ちにある立場を擁護することがある。

何かを経験して、直ちに結論を受け入れることがある。

しかし、反応は理解ではない。

人々は次のように問うべきである。

私は反応しているのか？

それとも、学んでいるのか？

私は擁護しているのか？

それとも、検証しているのか？

私はどちらかの側を選んでいるのか？

それとも、理解しようとしているのか？

私は感情によって動かされているのか？

それとも、明確に見ているのか？

目的地は反応ではない。

目的地は理解である。

感情的メカニズムとしての恐怖

恐怖は、世界環境の中で働く最も強い感情的メカニズムの一つである。

恐怖は問うことを止めることがある。

恐怖は、話すことを止めることがある。

恐怖は、明らかにすることを止めることがある。

恐怖は、学ぶことを止めることがある。

恐怖は、真実を止めることがある。

恐怖は、独立した思考を止めることがある。

恐怖は、従属を生み出すことがある。

恐怖は、沈黙を生み出すことがある。

恐怖は服従を生み出すことがある。

恐怖は、反復を生み出すことがある。

人は権威を恐れることがある。

人は制度を恐れることがある。

人は金を失うことを恐れることがある。

人は仕事を失うことを恐れることがある。

人々は所属を失うことを恐れることがある。

人は承認を失うことを恐れることがある。

人は自分が間違っていることを恐れることがある。

人々は一人になることを恐れることがある。

人々は、周囲とは異なる立場に立つことを恐れることがある。

恐怖は、問うことより強くなることがある。

恐怖は、証拠より強くなることがある。

恐怖は、一貫性より強くなることがある。

恐怖は、真実より強くなることがある。

人々は次のように問うべきである。

どのような恐怖が働いているのか？

この恐怖から誰が利益を得るのか？

この恐怖はどのような行動を生み出しているのか？

この恐怖は、私が何を問うことを止めているのか？

この恐怖は、私が何を学ぶことを止めているのか？

この恐怖は、どのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

恐怖が自動的に行動を支配すべきではない。

恐怖は問われるべきである。

怒り、憤り、そして感情による捕捉

怒りは、何かが重要であることを明らかにすることがある。

しかし、怒りは学ぶことを止めることもある。

憤りは、理解を妨げながら人に力を持っているように感じさせることがある。

人は怒りによって感情的に捕らわれることがある。

検証する前に攻撃することがある。

理解する前に責めることがある。

問う前に繰り返すことがある。

学ぶ前に擁護することがある。

感情的な反応の中に閉じ込められることがある。

怒りはまた、ナラティブ、制度、集団、メディア、社会環境によって、人を理解するのではなく反応し続けさせるために利用されることがある。

人は怒りを真実と取り違えることもある。

その人が怒っているように聞こえるという理由で、その人を信じることがある。

その人が情熱的に見えるという理由で、その人を信じることがある。

その人が感情的な力を込めて話すという理由で、その人を信じることがある。

しかし、怒りは証拠ではない。

情熱は証拠ではない。

感情的な力は証拠ではない。

人々は次のように問うべきである。

この怒りは何を示しているのか？

この怒りは何を隠しているのか？

この怒りは私に何をさせようとしているのか？

この怒りから誰が利益を得るのか？

この憤りはどのような行動を生み出しているのか？

この怒りは私が学ぶことを助けているのか？

それとも、私を反応の中に閉じ込めているのか？

怒りが学びの終点になってはならない。

怒りは、人がそこから学ぶものにならないといけない。

作られた信頼と感情的な欺き

信頼は感情的に作り出されることがある。

証拠が検証される前に、人は信頼するよう影響されることがある。

その人が親切に見えるという理由で信頼することがある。

その人が落ち着いて見えるという理由で信頼することがある。

その人が誠実に見えるという理由で信頼することがある。

その人が自信に満ちて見えるという理由で信頼することがある。

その人が思いやり深く見えるという理由で信頼することがある。

その人が専門的に見えるという理由で信頼することがある。

その人が肩書きを使うという理由で信頼することがある。

その人が専門家として示されるという理由で信頼することがある。

その人が感情的な物語を語るという理由で信頼することがある。

しかし、外見は証拠ではない。

親切さは証拠ではない。

落ち着きは証拠ではない。

誠実さは証拠ではない。

自信は証拠ではない。

専門的な外見は証拠ではない。

専門家という地位は証拠ではない。

感情的な物語それ自体は証拠ではない。

人は感情的な演出によって欺かれることがある。

人は親切さを演じることができる。

人は誠実さを演じることができる。

人は自信を演じることができる。

人は心配している様子を演じることができる。

人は権威を演じることができる。

人は専門性を演じることができる。

人々は次のように問うべきである。

どの証拠がこの信頼を裏づけているのか？

どのような行動がこの信頼を支えているのか？

どのような一貫性がこの信頼を支えているのか？

どのような誘因がこの見せ方を形作っている可能性があるのか？

私は理解するよう助けられているのか？

それとも、信じるよう感情的に動かされているのか？

作られた信頼は問われなければならない。なぜなら、感情的な欺きは証拠が検証される前に人を信じさせることがあるからである。

信念への感情的執着

人は信念に感情的に執着することがある。

ナラティブに執着することがある。

集団に執着することがある。

アイデンティティに執着することがある。

制度に執着することがある。

権威に執着することがある。

嘘に執着することがある。

受け継いだものに執着することがある。

いったん感情的な執着が形成されると、問われることが攻撃のように感じられることがある。

信念を問うことが、その人自身を問うことのように感じられることがある。

集団を問うことが、裏切りのように感じられることがある。

制度を問うことが、危険のように感じられることがある。

ナラティブを問うことが、喪失のように感じられることがある。

これは、人が学ぶことを止めることがある。

人は、一度も検証したことのない信念であっても、それが自分自身だと思っているものの一部になっているために擁護することがある。

人々は次のように問うべきである。

私は真実を擁護しているのか？

それとも、執着を擁護しているのか？

私は証拠を守っているのか？

それとも、アイデンティティを守っているのか？

私はこれを検証しているのか？

それとも、感情的に守っているのか？

もしこの信念が間違っていたら、どうなるのか？

これを問えば、私は何を失うのか？

感情的執着は、独立した思考に対する最大の障壁の一つになり得る。

社会環境と感情的影響

現代の環境は、絶えず感情を活性化させることがある。

人は恐怖を示される。

人は憤りを示される。

人は対立を示される。

人は比較を示される。

人は人気を示される。

人は地位を示される。

人は羨望を示される。

人は嫉妬を示される。

人は緊急性を示される。

人は表面的なものを示される。

これらの感情的環境は行動を形作ることがある。

それらは人を反応させることがある。

それらは人を比較させることがある。

それらは人をまねさせることがある。

それらは人を擁護させることがある。

それらは人に自分は不十分だと感じさせることがある。

それらは人に承認を求めさせることがある。

それらは人に排除を恐れさせることがある。

それらは人に可視性を重要性と取り違いさせることがある。

また、人に感情的な演出を真実と混同させることもある。

人々は次のように問うべきである。

この環境はどのような感情を生み出しているのか？

この環境はどのような行動に報いているのか？

どのような比較が促されているのか？

どのような反応が生み出されているのか？

どのような感情的な見せ方が信頼されているのか？

どのような理解が妨げられているのか？

社会環境は感情の教室になり得る。

しかし、人が感情的影響の問い方を教えられていなければ、その教室は理解ではなく反応を教えることがある。

教育、子ども、そして感情的影響

教育は、子どもに感情的影響を問うことも教えなければならない。

子どもに必要なのは情報だけではない。

子どもは、自分の心がどのように形作られ得るかを理解する必要がある。

感情が、信頼、恐怖、信念、反応、沈黙、所属、行動にどのように影響し得るかを理解する必要がある。

子どもは恐れさせられることがある。

子どもは怒らされることがある。

子どもは恥を感じさせられることがある。

子どもは気まずさを感じさせられることがある。

子どもは排除されたと感じさせられることがある。

子どもは、問うことが間違いであるかのように感じさせられることがある。

子どもは、問うことが不快感を生むと感情によって教えられたために、沈黙することを学ぶことがある。

子どもは感情的な見せ方を信頼することも学ぶことがある。

相手が親切そうに聞こえるという理由で、その人を信じることがある。

相手が自信に満ちて聞こえるという理由で、その人を信じることがある。

相手が情熱的に聞こえるという理由で、その人を信じることがある。

相手が肩書きを持つという理由で、その人を信じることがある。

相手が専門家として示されるという理由で、その人を信じることがある。

これは、子どもから感情を取り除くことではない。

子どもが感情を理解するのを助けることである。

子どもは、人が親切、怒っている、自信がある、誠実、専門家らしい、権威的に見えることが、証拠、行動、一貫性、誘因を問う必要をなくすものではないと学ぶべきである。

人々は次のように問うべきである。

子どもは、感情がどのように行動を形作るかを教えられているか？

子どもは、恐怖がどのように問うことを止め得るかを教えられているか？

子どもは、怒りがどのように学ぶことを止め得るかを教えられているか？

子どもは、所属がどのように信念を形作り得るかを教えられているか？

子どもは、恥がどのように沈黙を生み出し得るかを教えられているか？

子どもは、感情的な見せ方が、証拠が検証される前にどのように信頼を生み出し得るかを教えられているか？

子どもは、感情的影響を安全に問う方法を教えられているか？

子どもが感情的影響の問い方を教えられていなければ、理解していない感情的環境の産物になり得る。

感情的影響が重要な理由

感情が繰り返し理解を上回る限り、人類は世界環境から適切に学ぶことができないため、感情的影響は重要である。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何が行動に報い、何が行動を守っているのかを問う。

性質と一貫性は、繰り返される行動が主張されていることと一致しているかを問う。

問うことへの許可は、誰が、または何が許可を支配しているのかを問う。

感情的影響は問う：

どのような感情がこれを形作っているのか？
どのような反応が作られているのか？
どのような恐怖が使われているのか？
どのような怒りが使われているのか？
どのような信頼が作り出されているのか？
どのような感情的な結びつきが守られているのか？
この感情はどのような行動を生み出しているのか？
この感情はどのような理解を妨げているのか？
こうして人は感情的影響を認識し始める。
こうして人は反応を認識し始める。
こうして人は感情的執着を認識し始める。
こうして人は作られた信頼を認識し始める。
こうして人は感情的な欺きを認識し始める。
こうして人は恐怖に基づく行動を認識し始める。
こうして人は反応から問うことへと移る。
こうして人々は、問うことから見ることへ進む。
こうして人々は、見ることから理解へ進む。
こうして人々は、理解から学びへ進む。
こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。
こうして人は感情的環境の産物であることから、世界環境の学習者へと移る。

時間を通じた感情的影響

この節の前半では、感情は敵ではないが、感情が自動的に真実になるわけではないことを説明した。

また、感情的な見せ方は証拠ではないこと、証拠が検証される前に信頼が感情的に作り出され得ること、そして繰り返される感情的な演出が時間を通じて偽の性質のイメージを作り出し得ることも説明した。

ここからは、感情的影響が時間を通じてどのように働くかへ進む。

感情的影響は一瞬だけに起こるものではない。

それは繰り返され得る。

それは正常化され得る。

それは受け継がれ得る。

それは世界環境の一部になり得る。

人は理解する前に繰り返し反応することがある。

検証する前に繰り返し恐れることがある。

問う前に繰り返し擁護することがある。

証拠を検証する前に繰り返し信念を守ることがある。

学ぶ前に繰り返し感情に従うことがある。

証拠を検証する前に、繰り返し見せ方を信頼することがある。

時間を通じて、感情的反応はパターンになり得る。

感情的パターンは行動になり得る。

行動は世界環境を再び作ることに寄与し得る。

人々は次のように問うべきである。

時間を通じて、どのような感情的反応が繰り返されてきたのか？

どのような恐怖が繰り返されてきたのか？

どのような怒りが繰り返されてきたのか？

どのような執着が守られてきたのか？

どのような感情的な見せ方が繰り返し信頼されてきたのか？

どのような感情的な演出が繰り返し信頼を生み出してきたのか？

どのような感情的パターンが繰り返し現れているのか？

この感情は、どのような行動を繰り返し生み出してきたのか？

この感情的パターンは、どのような世界環境を再び作ることに寄与してきたのか？

時間を通じた感情的影響は、反応が必ずしも孤立したものではないことを人が見るのを助ける。

それらは繰り返される人間の行動になり得る。

感情的条件付け

人は世界環境によって感情的に条件付けられることがある。

特定の問いを恐れるよう条件付けられることがある。

問うことに恥を感じるよう条件付けられることがある。

周囲と異なる立場に立つことに罪悪感を感じるよう条件付けられることがある。

理解する前に怒るよう条件付けられることがある。

検証する前に忠誠心を感じるよう条件付けられることがある。

信念が問われると脅威を感じるよう条件付けられることがある。

同調すると安心を感じるよう条件付けられることがある。

感情的な見せ方を信頼するよう条件付けられることもある。

自信を信頼することを学ぶことがある。

情熱を信頼することを学ぶことがある。

穏やかさを信頼することを学ぶことがある。

親切さを信頼することを学ぶことがある。

肩書きを信頼することを学ぶことがある。

専門家らしい見せ方を信頼することを学ぶことがある。

感情的な物語を信頼することを学ぶことがある。

誠実に見える人を信頼することを学ぶことがある。

この感情的条件付けは、人生の早い段階から始まることもある。

子どもは、何が承認を生むかを学ぶことがある。

子どもは、何が拒絶を生むかを学ぶことがある。

子どもは、何が気まずさを生むかを学ぶことがある。

子どもは、何が罰を生むかを学ぶことがある。

子どもは、何が所属を生むかを学ぶことがある。

子どもは、どのような感情的な見せ方が信頼を得るかを学ぶことがある。

そして子どもは、自分が一度も問ったことのない感情的パターンを抱えた大人へと成長することがある。

人々は次のように問うべきである。

私はどのような感情的反応を受け継いだのか？

どのような感情的反応を教えられたのか？

どのような感情的反応が報われたのか？

どのような感情的反応が罰せられたのか？

どのような感情的な見せ方を信頼するよう教えられてきたのか？

どのような話題が私を感情的に防御的にするのか？

どのような問いが私を不快にするのか？

どのような感情が、私が適切に検証することを止めるのか？

感情的条件付けは、人間の行動を形作る隠れたメカニズムの一つになり得る。

恐怖、権威、そして服従

恐怖は権威と強く結び付くことがある。

人は権威を問うことを恐れることがある。

人は制度に異議を示すことを恐れることがある。

人は教師に反対することを恐れることがある。

人は政府を問うことを恐れることがある。

人はメディアを問うことを恐れることがある。

人は専門家を問うことを恐れることがある。

人は雇用主を問うことを恐れることがある。

人は結果を恐れることがある。

すると、理解が発達する前に恐怖が服従を生み出すことがある。

人は理解しているから従うことがある。

しかし、従わなければ何が起きるかを恐れているために従うこともある。

人々は次のように問うべきである。

私は理解しているから従っているのか？

それとも、恐れているから従っているのか？

私は、証拠がそれを裏づけているから受け入れているのか？

それとも、権威が恐怖を生み出すから受け入れているのか？

私は同意しているから沈黙しているのか？

それとも、結果を恐れているから沈黙しているのか？

恐怖に基づく服従は、真実が検証される前に人が問うことをやめる場合があるため、繰り返される世界の問題を継続させることがある。

感情的執着とアイデンティティ

人は、自分が何者だと信じているかに感情的に執着することがある。

自分のアイデンティティに執着することがある。

自分の集団。

自分の役割。

自分の地位。

自分の信念。

自分の意見。

自分の歴史。

自分のイメージ。

自分の評判。

自分の権威。

自分の制度。

アイデンティティが信念と感情的に結び付くと、問われることが個人的なことのよう感じられることがある。

問いが攻撃のよう感じられることがある。

証拠が脅威のよう感じられることがある。

矛盾が屈辱のよう感じられることがある。

訂正が拒絶のよう感じられることがある。

学ぶことが喪失のよう感じられることがある。

すると、人は真実を求めるのではなくアイデンティティを擁護することがある。

人々は次のように問うべきである。

私のどの部分が脅かされていると感じているのか？

私はどのアイデンティティを守っているのか？

どの信念が、問うにはあまりにも苦痛に感じられるのか？

理解を変えたら、私は何を失うのか？

私は真実を守っているのか？

それとも、自分が何者だと信じているかを守っているのか？

人類の進歩には、あらゆる異議提示を個人的な破壊として扱うことなく学べるようになることが必要である。

感情的操作と見せ方

感情は、情報がどのように受け取られるかを形作るために使われることがある。

情報は恐怖とともに示されることがある。

緊急性とともに示されることがある。

憤りとともに示されることがある。

同情とともに示されることがある。

恥とともに示されることがある。

罪悪感とともに示されることがある。

誇りとともに示されることがある。

所属とともに示されることがある。

脅しとともに示されることがある。

親切さとともに示されることがある。

落ち着きとともに示されることがある。

誠実さとともに示されることがある。

自信とともに示されることがある。

専門家というアイデンティティを通じて示されることがある。

専門的な地位を通じて示されることがある。

この見せ方は、証拠が検証される前に人へ影響を与えることがある。

人は恐れているために受け入れることがある。

怒っているために繰り返すことがある。

忠誠を感じるために擁護することがある。

罪悪感を感じるために従うことがある。

恥を感じるために沈黙することがある。

誰かが親切そうに話すために信頼することがある。

誰かが誠実そうに話すために信頼することがある。

誰かが自信に満ちて話すために信頼することがある。

誰かが落ち着いて話すために信頼することがある。

誰かが専門的に話すために信頼することがある。

誰かが専門家として示されるために信頼することがある。

人々は次のように問うべきである。

この情報にはどのような感情が結び付けられているのか？

感情は理解を助けるために使われているのか？

それとも、問うことを止めるために感情が使われているのか？

証拠が示されているのか？

それとも、証拠の代わりに感情的圧力が使われているのか？

信頼は証拠によって得られているのか？

それとも、見せ方によって信頼が作り出されているのか？

これは証拠基準に直接つながる。

恐怖は証拠ではない。

憤りは証拠ではない。

緊急性は証拠ではない。

感情的圧力は証拠ではない。

親切さは証拠ではない。

誠実さは証拠ではない。

自信は証拠ではない。

専門家らしい見せ方は証拠ではない。

感情的な物語と作られた信念

物語は感情的な信念を作り出すことがある。

物語は人に同情を感じさせることがある。

物語は人に怒りを感じさせることがある。

物語は人に恐怖を感じさせることがある。

物語は人に忠誠心を感じさせることがある。

物語は人に罪悪感を感じさせることがある。

物語は人に責任を感じさせることがある。

物語は人にどちらかの側を選ばせることがある。

物語は人に、検証する前に受け入れさせることがある。

物語は真実であり得る。

物語は選択されたものであることもある。

物語は形作られることもある。

物語は演じられることもある。

物語は繰り返されることもある。

物語は感情的反応を導くために使われることもある。

人々は次のように問うべきである。

この物語はどのような感情を生み出しているのか？

どのような証拠がこの物語を支えているのか？

どの証拠が欠けているのか？

どの視点が選択されているのか？

この物語はどのような行動を生み出しているのか？

人がこの物語を信じることで誰が利益を得るのか？

この物語は人が理解するのを助けているのか？

それとも、この物語は感情によって人を方向付けているのか？

感情的な物語は、人を検証する前に感じさせることがあるため、問われなければならない。

感情、ナラティブ、そしてどちらかの側を選ぶこと

感情的影響はナラティブにもつながる。

人は感情的に物語へ引き込まれることがある。

どちらかの側を選ぶよう促されることがある。

一方の集団を擁護し、別の集団を攻撃するよう促されることがある。

メカニズムを理解する前に英雄と悪役を見るよう促されることがある。

証拠が検証される前に感情的に反応するよう促されることがある。

ナラティブは感情と結び付くと強力になり得る。

そのナラティブが所属感を与えるために擁護することがある。

それがアイデンティティを与えるために擁護することがある。

それが確信を与えるために擁護することがある。

それが敵を与えるために擁護することがある。

しかし、どちらかの側を選ぶことは理解することと同じではない。

人々は次のように問うべきである。

私はどの物語へ引き込まれているのか？

この物語はどのような感情を生み出しているのか？

人がどちらかの側を選ぶことで誰が利益を得るのか？

どのような証拠が無視されているのか？

どのようなメカニズムが隠されているのか？

どのような理解が妨げられているのか？

感情が人を世界環境から学ばせるのではなくナラティブの中に閉じ込め続けるなら、人類は進歩できない。

感情的影響、沈黙、そして自己防衛

感情は沈黙を生み出すことがある。

恐れているために沈黙し続けることがある。

恥を感じるために沈黙し続けることがある。

気まずさを感じるために沈黙し続けることがある。

罪悪感を感じるために沈黙し続けることがある。

拒絶を恐れるために沈黙し続けることがある。

自分が間違っていることを恐れるために沈黙し続けることがある。

一人で立つことを恐れるために沈黙し続けることがある。

すると沈黙が反復を守ることがある。

沈黙はシステムを守ることがある。

沈黙はナラティブを守ることがある。

沈黙は依存を守ることがある。

沈黙は不正を守ることがある。

沈黙が世界環境の継続を守ることがある。

人々は次のように問うべきである。

どのような感情が沈黙を生み出しているのか？

この沈黙によって何が守られているのか？

沈黙が終わったら何が起きるのか？

感情は、人がどのような真実を語ることを妨げているのか？

沈黙は、どのような繰り返されるパターンの継続を助けているのか？

感情による沈黙は、強力な参加の形になり得る。

教育、子ども、そして感情的安全

子どもが適切に問うには感情的な安全が必要である。

子どもが問うことを恐れさせられれば、問うことをやめることがある。

子どもが問うことで恥をかかされれば、問うことをやめることがある。

子どもが問うことで嘲笑されれば、問うことをやめることがある。

子どもが問うことで扱いにくいと決め付けられれば、問うことをやめることがある。

子どもが問うことで問題児として扱われれば、問うことをやめることがある。

子どもが問うことで感情的に罰せられれば、理解することより沈黙することの方が安全だと学ぶことがある。

これは、問うことが学びへ至る経路の一つだから重要である。

子どもは、問いは安全に検証できると学ぶ必要がある。

感情は理解できると学ぶ必要がある。

不快感があるからといって、その問いが自動的に間違いになるわけではないと学ぶ必要がある。

恐怖を感じるからといって、自動的にやめるべきというわけではないと学ぶ必要がある。

怒りを感じるからといって、自動的に理解していることになるわけではないと学ぶ必要がある。

また、感情的な見せ方が誤解させ得ることも学ぶ必要がある。

親切さが自動的に証拠になるわけではないと学ぶ必要がある。

自信が自動的に証拠になるわけではないと学ぶ必要がある。

誠実さが自動的に証拠になるわけではないと学ぶ必要がある。

専門家らしい見せ方が自動的に証拠になるわけではないと学ぶ必要がある。

子どもは、人が親切、怒っている、自信がある、誠実、専門家らしい、権威的に見えることが、証拠、行動、一貫性、誘因を問う必要をなくすものではないと学ぶべきである。

人々は次のように問うべきである。

子どもは感情的に安全に問えるか？

子どもは感情的反応を理解するよう教えられているか？

子どもは、問いが学びの一部であると教えられているか？

子どもは、不快感を検証できると教えられているか？

子どもは、感情がどのように信念、沈黙、行動を形作り得るかを教えられているか？

子どもは、感情的な見せ方が、証拠が検証される前にどのように信頼を生み出し得るかを教えられているか？

子どもが感情的に問うことから遠ざけるよう訓練されているなら、教育は適切に改善できない。

感情的影響と人間の意識

人が感情に支配されるのではなく感情を理解することを学ぶとき、人間の意識は進歩する。

これは、人間が感情を失うという意味ではない。

感情が学びの一部になるという意味である。

恐怖は問うものになる。

怒りは理解するものになる。

執着は検証するものになる。

恥は認識するものになる。

沈黙はそこから学ぶものになる。

反応は乗り越えるものになる。

感情的な見せ方は問うものになる。

作られた信頼は検証するものになる。

感情的な物語は確かめるものになる。

人は感情を破壊する必要はない。

感情的影響を理解する必要がある。

世界環境は常に感情的影響を示している。

恐怖を示す。

怒りを示す。

憤りを示す。

所属を示す。

恥を示す。

比較を示す。

執着を示す。

沈黙を示す。

反応を示す。

感情的な演出を示す。

作られた信頼を示す。

感情的な欺きを示す。

人々は次のように問うべきである。

どのような感情的影響が示されているのか？

どのような感情的な見せ方が信頼されているのか？

人類はそこから何を学べるのか？

感情はどのような行動を生み出しているのか？

感情はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

感情的影響が見えるようになると、行動が見えるようになる。

行動が見えるようになると、理解が可能になる。

理解が可能になると、学びは進歩し得る。

感情的影響と人類の進歩

感情的影響は、人類の進歩への欠けている経路の一部である。

感情が繰り返し理解を上回る限り、人類は進歩できない。

恐怖が問うことを止める限り、人類は進歩できない。

怒りが学びに取って代わる限り、人類は進歩できない。

憤りが検証に取って代わる限り、人類は進歩できない。

感情的執着が受け継いだ信念を守る限り、人類は進歩できない。

恥が沈黙を生み出す限り、人類は進歩できない。

感情的圧力が証拠に取って代わる限り、人類は進歩できない。

証拠が検証される前に感情的な見せ方が信頼を作り出す限り、人類は進歩できない。

理解が発達する前に感情的な物語が信念を作り出す限り、人類は進歩できない。

子どもが感情的に問うことから遠ざけるよう訓練される限り、人類は進歩できない。

人が世界環境から学ぶのではなく、それに反応する限り、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、何が行動に報い、何が行動を守っているのかを問う。

性質と一貫性は、繰り返される行動が主張されていることと一致しているかを問う。

問うことへの許可は、誰が、または何が許可を支配しているのかを問う。

感情的影響は問う：

どのような感情がこれを形作っているのか？

どのような反応が作られているのか？

どのような恐怖が使われているのか？

どのような感情的な結びつきが守られているのか？

どのような沈黙が生み出されているのか？

どのような感情的な見せ方が信頼されているのか？

どのような信頼が作り出されているのか？

どのような感情的な物語が使われているのか？

この感情はどのような行動を生み出しているのか？

この感情はどのような理解を妨げているのか？

この感情はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

こうして人は感情的影響を認識し始める。

こうして人は感情的条件付けを認識し始める。

こうして人は感情的操作を認識し始める。

こうして人は感情的な見せ方を認識し始める。

こうして人は作られた信頼を認識し始める。

こうして人は感情的な物語を認識し始める。

こうして人は感情による沈黙を認識し始める。

こうして人は反応から問うことへと移る。

こうして人々は、問うことから見ることへ進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人は感情的環境の産物であることから、世界環境の学習者へと移る。

セクション7 - ナラティブ対現実

ナラティブ対現実とは本当は何か

セクション1では、人々は単に世界環境の産物になるのではなく、世界環境から学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、人々は、証拠が主張され、繰り返され、守られ、提示され、または強制されているものを裏づけているかを検証しなければならないことを確立した。

セクション3では、誘因が人に同じ世界を再び作ることに繰り返し報いるため、人類が同じ世界を繰り返し再び作ることを確立した。

セクション4では、繰り返される行動が言葉以上のことを明らかにする場合が多いことを確立した。

セクション5では、学びが始まる前から、人が問うことをしばしば抑制されていることを確立した。

セクション6では、理解が発達する前に、感情が信頼、信念、恐怖、反応、沈黙、行動を形作り得ることを確立した。

セクション7は、ここからナラティブ対現実へ進む。

ナラティブ対現実が存在するのは、人が現実の検証方法を適切に教えられないままナラティブを示されているからである。

人はナラティブの中に生まれる。

人はナラティブを教えられる。

人はナラティブを示される。

人はナラティブを受け継ぐ。

人はナラティブを擁護する。

人はナラティブに感情的に執着する。

人はやがて、ナラティブを現実そのものとは取り違えることがある。

ナラティブは、人類を形作る最大のメカニズムの一つである。

ナラティブが自動的に現実になるわけではない。

ナラティブは物語である。

ナラティブは説明である。

ナラティブは出来事の一つの版である。

ナラティブは、人が受け入れるよう促される枠組みである。

ナラティブは真実であり得る。

ナラティブは部分的に真実であり得る。

ナラティブは不完全であり得る。

ナラティブは操作され得る。

ナラティブは選択され得る。

ナラティブは作り出され得る。

ナラティブは守られ得る。

ナラティブは受け継がれ得る。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどの物語を示されているのか？

誰がこの物語を作ったのか？

誰がこの物語を繰り返しているのか？

誰がこの物語を守っているのか？

この物語が信じられることで誰が利益を得るのか？

どのような証拠がこの物語を支えているのか？

どのような現実がこの物語を支えているのか？

何が除かれているのか？

何が加えられているのか？

何が隠されているのか？

ナラティブ対現実、提示されているものと実際に示されているものを分けることを人に教える。

現実独立して存在する

現実、人がそれについて何を信じているかとは独立して存在する。

現実、合意を必要としない。

現実、人気を必要としない。

現実、肩書きを必要としない。

現実、権威を必要としない。

現実、感情を必要としない。

現実、反復を必要としない。

人が認識するかどうかにかかわらず、現実には存在し続ける。

人は現実を否定することができる。

人は現実を無視することができる。

人は感情的に現実を拒絶することができる。

人は現実に対してナラティブを擁護することができる。

人は集団として現実を避けることができる。

しかし、現実には存在し続ける。

これは、人類が学ばなければならない最大の教訓の一つである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は現実から学んでいるのか？

それとも、ナラティブを擁護しているのか？

私は示されているものを見ているのか？

それとも、受け継いだものを守っているのか？

私は世界環境から学んでいるのか？

それとも、世界環境についての物語から学んでいるのか？

人類はナラティブの中で生きることができる

人間の学びにおける最大の限界の一つは、人が一度も独立して検証したことのないナラティブの中で生涯を過ごし得ることである。

人は物語を受け継ぐことができる。

人は肩書きを受け継ぐことができる。

人は制度を受け継ぐことができる。

人は権威を受け継ぐことができる。

人は信念を受け継ぐことができる。

人は説明を受け継ぐことができる。

人は恐怖を受け継ぐことができる。

人は行動を受け継ぐことができる。

人は繰り返されるパターンを受け継ぐことができる。

やがて人は、それらが元々どこから来たのかを理解しないまま、そのすべてを擁護することができる。

すると人は、受け継いだナラティブを現実そのものを取り違えることがある。

問うことがなければ、人は自分が受け継ぐために作られたものを擁護しながら生涯を過ごすことがある。

人類は人類を教えている

人類は主として人類によって教えられている。

人は制度を作る。

人はナラティブを作る。

人は物語を作る。

人は肩書きを作る。

人は役割を作る。

人は説明を作る。

そして人は、過去の世代が作ったものを未来の世代に教える。

すると未来の世代は、受け継いだナラティブを現実そのものと取り違えることがある。

人は、過去の世代が受け入れたものを一度も独立して検証することなく受け継ぐことができる。

これは、同じ世界が繰り返される最大の理由の一つである。

人類はナラティブを作り、ナラティブを受け継ぎ、ナラティブを擁護し、そしてそのナラティブを現実そのものと取り違えることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

元々これを作ったのは誰か？

誰がそれを受け継がせたのか？

今も誰がそれを教えているのか？

今も誰がそれを守っているのか？

今も誰がそれから利益を得ているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

人類がナラティブの問い方を学ぶ前にそれを受け継ぎ続ける限り、人類は適切に進歩できない。

作られた物語、作られた肩書き、そして作られた権威

ナラティブはそれ自体で現れるものではない。

人がそれを作る。

物語は作られ得る。

肩書きは作られ得る。

権威は作られ得る。

地位は作られ得る。

役割は作られ得る。

制度は作られ得る。

信念は作られ得る。

そしてナラティブは、それらすべてに結び付けられ得る。

すると人はそれらを受け継ぐことができる。

人はそれらを繰り返すことができる。

人はそれらを擁護することができる。

人はそれらに感情的に執着することができる。

やがて未来の世代は、それらを現実として受け継ぐことがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰がこの肩書きを作ったのか？

誰がこの権威を作ったのか？

誰がこの役割を作ったのか？

誰がこの物語を作ったのか？

誰がそれに正当性を与えたのか？

誰がそれを守っているのか？

それが継続することで誰が利益を得るのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

肩書きが存在することが自動的に現実になるわけではない。

権威が存在することが自動的に現実になるわけではない。

役割が存在することが自動的に現実になるわけではない。

物語が存在することが自動的に現実になるわけではない。

制度が存在することが自動的に現実になるわけではない。

現実には常にナラティブそのものとは独立して検証されなければならない。

金、反復、そしてナラティブの強化

金に関わると、ナラティブは極めて強力になり得る。

人はナラティブを作るために報酬を受けることがある。

人はナラティブを繰り返すために報酬を受けことがある。

人はナラティブを教えるために報酬を受けことがある。

人はナラティブを強制するために報酬を受けことがある。

人はナラティブを守るために報酬を受けことがある。

人はナラティブを書くために報酬を受けことがある。

人はナラティブを配布するために報酬を受けことがある。

人はナラティブを擁護するために報酬を受けことがある。

すると未来の世代は、繰り返されたナラティブを受け継ぐことがある。

これは、自動的にすべてのナラティブが虚偽であることを意味しない。

メカニズムを問わなければならないという意味である。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰がこのナラティブに資金を提供しているのか？

誰がそれを繰り返しているのか？

誰がそれを教えているのか？

誰がそれを守っているのか？

誰がそれから利益を得ているのか？

それに異議が示されたら何が起きるのか？

それが明らかにされたら何が起きるのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

ナラティブはやがてあまりにも正常化され、人がそれをそもそもナラティブであると認識しなくなることがある。

信念体系と受け継がれた受容

人は、自分では独立して検証できないことを信じるよう促されることがある。

そしてその信念を擁護することがある。

その信念に感情的に執着することがある。

その信念を繰り返すことがある。

その信念を未来の世代へ渡すことがある。

すると未来の世代は、その出所と起源を一度も独立して検証することなく、その信念を受け継ぐことがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰がこの信念を作ったのか？

この信念から誰が利益を得るのか？

どのような証拠がこの信念を支えているのか？

どのような現実がこの信念を支えているのか？

それが問われると何が起きるのか？

人がそれを信じることをやめたら何が起きるのか？

信念それ自体は現実ではない。

現実には常に独立して検証されなければならない。

世界環境は、ナラティブがどのように働くかを絶えず人類に示している

世界環境は、ナラティブがどのように働くかを絶えず人類に示している。

人は、示されているものからどのように学ぶかを適切に教えられていないだけである。

世界こそが本当の学校である。

人類には絶えず次のものが示されている。

反復。

保護。

肩書き。

権威。

所属。

恐怖。

依存。

沈黙。

誘因。

感情。

演出。

ナラティブ。

人はしばしば、これらのメカニズムから学ぶのではなく反応する。

問題は、何も見えていないことではない。

問題は、人が見えているものをどのように問い、見て、理解し、そこから学ぶかを適切に教えられていないことである。

ナラティブは現実より強くなり得る

人類が直面する最大の危険の一つは、ナラティブが現実そのものより強くなり得ることである。

現実は見えることがある。

現実記録されることがある。

現実繰り返し示されることがある。

現実には矛盾を明らかにすることがある。

現実には繰り返されるパターンを明らかにすることがある。

現実には人間の行動を明らかにすることがある。

それでも人は代わりにナラティブを擁護することがある。

人は示されているものを拒絶することがある。

人は受け継いだものを守ることがある。

人は物語に感情的に執着することがある。

人は制度を擁護することがある。

人は権威を擁護することがある。

人は繰り返される説明を擁護することがある。

人は自分が依存しているものを擁護することがある。

人は自分に安全だと感じさせるものを擁護することがある。

人は他の全員が擁護しているものを擁護することがある。

現実が繰り返し異なるものを示していても、人はナラティブを擁護することがある。

ナラティブは世界環境そのものになり得る

ナラティブが長く存在するほど、より正常に見えるようになることがある。

より正常に見えるほど、問われにくくなることがある。

問われにくくなるほど、より守られるようになる。

より守られるほど、未来の世代はそれをより多く受け継ぐ。

やがてナラティブは、世界環境そのものの一部になり得る。

子どもはそれを受け継ぐことがある。

大人はそれを受け継ぐことがある。

教師はそれを受け継ぐことがある。

制度はそれを受け継ぐことがある。

機関はそれを受け継ぐことがある。

社会はそれを受け継ぐことがある。

やがて人は、それがかつて作られたものだったことを忘れることがある。

するとナラティブは現実そのものとして受け入れられることがある。

人類は集団として偽の現実を作り、その後何世代にもわたってそれを擁護することがある。

これは、人類が同じ世界を繰り返し再び作る最大の理由の一つである。

ナラティブ対現実が重要な理由

人類がナラティブを現実そのものと混同している限り、世界環境から適切に学ぶことができないため、ナラティブ対現実には重要である。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実はこちらで問う：

どのような物語が提示されているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

どのような現実がそれと矛盾しているのか？

誰がそれを作ったのか？

誰がそれを守っているのか？

誰がそれを繰り返しているのか？

誰がそれを受け継いでいるのか？

誰がそれによって利益を得るのか？

このナラティブは、どのような世界環境を再創造することに寄与しているのか？

こうして人は、受け継いだナラティブを擁護することから、現実そのものから学ぶことへ移り始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人は受け継いだナラティブの産物であることから、世界環境の学習者へと移る。

人が現実そのものから学ぶのではなく受け継いだナラティブを擁護し続ける限り、人類は進歩できない。

時間を通じたナラティブ

この節の前半では、ナラティブは作られ、繰り返され、受け継がれ、守られ、やがて現実そのものと取り違えられ得ることを説明した。

また、現実とは信念、人気、肩書き、権威、感情、反復とは独立して存在することも説明した。

ここからは、ナラティブが時間を通じてどのように継続するかへ進む。

ナラティブは通常、一夜にして強力になるわけではない。

多くの場合、長い期間をかけて築かれる。

物語は作られることがある。

その物語は繰り返され得る。

その物語は書き留められ得る。

その物語は配布され得る。

その物語は守られ得る。

その物語は教えられ得る。

その物語は受け継がれ得る。

その物語に感情的に執着することが起こり得る。

するとその物語は、受け入れられた現実になり得る。

時間が経つと、人はそれがそもそもナラティブだったこと
さえ忘れることがある。

人々は次のように問うべきである。

このナラティブはどれほど長く存在してきたのか？

誰がそれを繰り返してきたのか？

誰がそれを守ってきたのか？

誰がそれを受け継いできたのか？

誰がそれから利益を得てきたのか？

どの証拠がそれを裏づけているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

どのような矛盾が存在するのか？

時間を通じて何が変わったのか？

何が守られ続けたのか？

時間を通じたナラティブは、人類がどのように同じ世界を
繰り返し再び作るかを明らかにすることがある。

人類は集団として偽の現実を作り得る

人類は集団として偽の現実を作り、それを人類自身が現実
と取り違えることがある。

人はメカニズム全体を見ていないことがある。

次のものだけを見ていることがある：

自分自身の役割。

自分自身の仕事。

自分自身の信念。

自分自身の指示。

自分自身の寄与。

自分自身の生存。

しかし世界環境は、多くの場合、自分たちが作ったのではないナラティブに何十億もの人々が集団として参加することによって築かれている。

一人が書く。

一人が教える。

一人が繰り返す。

一人が強制する。

一人が守る。

一人が資金を出す。

一人が出版する。

一人が信じる。

一人が沈黙する。

個別には、これらの行動は小さく見えることがある。

集団として、彼らは世界環境全体を再創造することができる。

すると人類は、自ら作ったものを何世代にもわたって擁護することがある。

人々は次のように問うべきである。

私はどのナラティブに寄与しているのか？

私はどのナラティブを繰り返すことに寄与しているのか？

私はどのナラティブを守ることに寄与しているのか？

私はどの現実を置き換えることに寄与しているのか？

私の寄与は、どのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

これは、ナラティブ対現実の中にある最大のメカニズムの一つである。

ナラティブは人間の行動を形作り得る

ナラティブは、人が何を考えるかだけを形作るのではない。

ナラティブは、人が何をするかを形作り得る。

ナラティブは信頼を形作り得る。

ナラティブは恐怖を形作り得る。

ナラティブは所属を形作り得る。

ナラティブは沈黙を形作り得る。

ナラティブは服従を形作り得る。

ナラティブは依存を形作り得る。

ナラティブは感情的執着を形作り得る。

ナラティブはアイデンティティを形作り得る。

ナラティブは行動そのものを形作り得る。

人は自分が形作られていることにさえ気付かないことがある。

自分は独立して行動していると信じていることがある。

しかし、その行動は受け継いだナラティブによってすでに影響されていることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

このナラティブはどのような行動を生み出しているのか？

このナラティブはどのような感情を生み出しているのか？

このナラティブはどのような恐怖を生み出しているのか？

このナラティブはどのような沈黙を生み出しているのか？

このナラティブはどのような依存を生み出しているのか？

このナラティブは、どのような世界環境を再創造することに寄与しているのか？

人が自分がナラティブによって形作られていることを認識しなくなると、ナラティブは危険になる。

周囲に合わせること、所属、そして社会的ナラティブ

人は社会的な存在である。

多くの人は受け入れられることを望む。

多くの人は所属を望む。

多くの人は承認を望む。

多くの人は周囲に合わせたいと望む。

これは、ナラティブを強化する最大のメカニズムの一つになり得る。

人は他人が言うことをまねることがある。

人は他人の振る舞い方をまねることがある。

人は他人の服装をまねることがある。

人は他人の話し方をまねることがある。

人は他人が宣伝するものをまねることがある。

人は他人が擁護するものをまねることがある。

人は他人が信じるものをまねることがある。

人は他人が恐れるものをまねることがある。

人は他人が拒絶するものをまねることがある。

人は他人が称賛するものをまねることがある。

やがて人は、何かが真実かどうかを問うことをやめ、代わりにそれが自分の所属に役立つかどうかを問うようになることがある。

人々は次のように問うべきである。

私は学んでいるのか？

それとも、周囲に合わせているのか？

私は問うているのか？

それとも、まねているのか？

私は独立して考えているのか？

それとも、集団に従っているのか？

私は現実から学んでいるのか？

それとも、所属する方法を学んでいるのか？

人がその問い方を教えられていなければ、所属は真実より強くなり得る。

現代のナラティブ環境

現代の環境は、ナラティブを迅速に作り、広めることができる。

人は生活様式を示されることがある。

人は意見を示されることがある。

人は反応を示されることがある。

人は憤りを示されることがある。

人は人気を示されることがある。

人は成功を示されることがある。

人は地位を示されることがある。

人は外見を示されることがある。

人は感情的な物語を示されることがある。

人は、現実を反映していない人生の版を示されることがある。

すると人は、繰り返し示されるものをまねることがある。

言葉をまねることがある。

人格をまねることがある。

生活様式をまねることがある。

外見をまねることがある。

行動をまねることがある。

人気があるように見えるものをまねることがある。

成功しているように見えるものをまねることがある。

幸福を演じることがある。

所属を演じることがある。

完璧さを演じることがある。

重要さを演じることがある。

したがって、現代のナラティブ環境は、人々が集団としてまねる偽の現実を作り出すことがある。

人々は次のように問うべきである。

この環境はどのようなナラティブを作っているのか？

この環境はどのような行動に報いているのか？

この環境はどのような演出を促しているのか？

どのような現実が隠されているのか？

どのような現実が置き換えられているのか？

どのような理解が妨げられているのか？

現代のナラティブ環境は、人に現実ではなく演出の中で生きさせることがある。

社会的演出とナラティブの中で生きること

人は自分自身のある版を演じ始めることもある。

幸福を演じることがある。

成功を演じることがある。

自信を演じることがある。

重要さを演じることがある。

地位を演じることがある。

完璧さを演じることがある。

所属を演じることがある。

人は現実を反映していない人生を提示することがある。

すると他の人は、自分自身をその演出と比較することがある。

比較はさらに多くの演出を生み出すことがある。

演出はさらに多くの模倣を生み出すことがある。

模倣はさらに多くの反復を生み出すことがある。

やがて人は、現実そのものではなく集団的なナラティブの中で生きることがある。

人々は次のように問うべきである。

何が示されているのか？

何が隠されているのか？

これは現実なのか？

それとも、演出なのか？

私は自分を現実と比較しているのか？

それとも、自分をナラティブと比較しているのか？

この演出はどのような行動を生み出しているのか？

人は、提示されたものが自動的に現実になるわけではなく
と学ばなければならない。

ナラティブ、子ども、そして受け継いだ信念

子どもは、自分が作ったのではないナラティブの中に生まれる。

子どもは物語を受け継ぐ。

子どもは制度を受け継ぐ。

子どもは肩書きを受け継ぐ。

子どもは権威を受け継ぐ。

子どもは信念を受け継ぐ。

子どもは行動を受け継ぐ。

子どもは恐怖を受け継ぐ。

子どもは感情的執着を受け継ぐ。

子どもは繰り返されるパターンを受け継ぐ。

そして子どもは、自分が受け継いだものを擁護する大人へ成長することがある。

これが、人類が同じ世界を繰り返す最大の理由の一つである。

したがって、子どもは次のことを問うことを学ぶべきである：

誰がこれを作ったのか？

なぜそれは作られたのか？

誰がそれによって利益を得るのか？

どの証拠がそれを裏づけているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

それはどのような行動を生み出すのか？

それはどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

子どもは単にナラティブを受け継ぐべきではない。

子どもは、それを安全に問う方法を学ぶべきである。

制度、ナラティブ、そして世界環境

ナラティブは制度の中に組み込まれることがある。

制度はナラティブを繰り返すことがある。

制度はナラティブを守ることがある。

制度はナラティブを正常化することがある。

制度はナラティブに報いることがある。

制度は問うことを抑制することがある。

やがて人は、制度による反復を真実と取り違えることがある。

しかし、繰り返される制度が自動的に現実になるわけではない。

人々は次のように問うべきである。

この制度はどのナラティブを繰り返しているのか？

この制度はどのナラティブを守っているのか？

この制度はどのナラティブに報いているのか？

この制度は、人がどのナラティブを問うことを抑制しているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

どのような現実がそれと矛盾しているのか？

人がそれを信じることをやめたら何が起きるのか？

人はしばしば、その結果を作り出しているナラティブを問わないまま、結果を直そうとする。

これは、人類に同じ世界を繰り返させることがある。

世界環境は、ナラティブがどのように働くかを絶えず人類に示している

世界環境は、ナラティブがどのように働くかを絶えず人類に示している。

人は、示されているものからどのように学ぶかを適切に教えられていないだけである。

世界こそが本当の学校である。

人類には絶えず次のものが示されている。

反復。

保護。

肩書き。

権威。

所属。

恐怖。

依存。

沈黙。

誘因。

感情。

演出。

ナラティブ。

問題は、何も見えていないことではない。

問題は、人が見えているものをどのように問い、見て、理解し、そこから学ぶかを適切に教えられていないことである。

ナラティブ、力、そして人間の意識

人類が学ばなければならない最大の教訓の一つは、力は強制によってのみ存在するのではないということである。

力はナラティブを通じて存在することがある。

人がナラティブを形作ることができれば、行動を形作ることができる。

行動を形作ることができれば、結果を形作ることができる。

結果を形作ることができれば、世界環境を形作ることができる。

人類が自ら進んで同じ世界を繰り返すなら、人類に同じ世界を繰り返させるために強制する必要すらないかもしれない。

人類はナラティブを作り、ナラティブを受け継ぎ、ナラティブを擁護し、そしてそのナラティブを現実そのものを取り違えることがある。

これは、人類の歴史全体を通じて働いてきた最大のメカニズムの一つである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰がナラティブを形作っているのか？

誰がナラティブを強化しているのか？

誰がナラティブから利益を得ているのか？

誰がナラティブを受け継いでいるのか？

誰がナラティブを擁護しているのか？

誰がナラティブに感情的に執着しているのか？

誰がナラティブを問うことを恐れているのか？

このナラティブは、どのような世界環境を再創造することに寄与しているのか？

人がナラティブの中で生きることをやめ、現実そのものから学び始めるとき、人間の意識は進歩する。

ナラティブ対現実と人類の進歩

ナラティブ対現実とは、人類の進歩への欠けている経路の一部である。

ナラティブが繰り返し現実と取り違えられる限り、人類は進歩できない。

人が物語の問い方を学ぶ前にそれを受け継ぐ限り、人類は進歩できない。

人が一度も独立して検証したことのないナラティブを擁護する限り、人類は進歩できない。

人が集団として偽の現実を作り、その中で生きる限り、人類は進歩できない。

人が集団として偽の現実を作り、その後何世代にもわたってそれを擁護する限り、人類は進歩できない。

所属が真実より強くなる限り、人類は進歩できない。

人が現実から学ぶのではなく互いをまねる限り、人類は進歩できない。

人が自分自身を理解するのではなく、自分自身のある版を演じる限り、人類は進歩できない。

制度が、人にその問い方を教えないままナラティブを強化する限り、人類は進歩できない。

信念体系が現実にとって代わる限り、人類は進歩できない。

未来の世代が、それを何が作ったのかを理解しないまま同じ世界を受け継ぐ限り、人類は進歩できない。

人が現実そのものから学ぶのではなく受け継いだナラティブを擁護し続ける限り、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実はこちらで問う：

どのような物語が提示されているのか？

どのような現実がそれを支えているのか？

どのような現実がそれと矛盾しているのか？

誰がそれを作ったのか？

誰がそれを繰り返しているのか？

誰がそれを守っているのか？

誰がそれを受け継いでいるのか？

誰がそれによって利益を得るのか？

それはどのような行動を生み出しているのか？

それはどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

こうして人は、受け継いだナラティブから現実へ移り始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人は受け継いだナラティブの産物であることから、世界環境の学習者へと移る。

セクション8 - 心理的影響

心理的影響とは本当は何か

セクション1では、人は何かがどこから来て、何がそれを形作ったのかを学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、人は証拠が主張されていることを支えているかを学ばなければならないことを確立した。

セクション3では、誘因が人に同じ世界を再び作ることに繰り返し報いるため、人類が同じ世界を繰り返し再び作ることを確立した。

セクション4では、繰り返される行動が言葉以上のことを明らかにする場合が多いことを確立した。

セクション5では、学びが始まる前から、人が問うことをしばしば抑制されていることを確立した。

セクション6では、理解が発達する前に、感情が信頼、信念、恐怖、反応、沈黙、行動を形作り得ることを確立した。

セクション7では、人類が集団としてナラティブを作り、受け継ぎ、擁護し、現実そのものと取り違い得ることを確立した。

セクション8は、ここから心理的影響へ進む。

心理的影響が存在するのは、人が世界環境に心を形作られていると理解する前から、世界環境が絶えず人間の心を形作っているからである。

人は世界を理解した状態で生まれるのではない。

人が自分の心を守る方法を理解する前から、世界は人に考え方を教える。

人は絶えず次のものにさらされている：

金銭。

依存。

権威。

恐怖。

沈黙。

誘因。

ナラティブ。

行動。

反復。

比較。

演出。

表面的なもの。

繰り返される問題。

独立した思考が発達するはるか前から、人間の心はこれらすべてによって形作られ得る。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この環境は人間の心に何をしているのか？

何が繰り返し示されているのか？

何が繰り返し受け入れられているのか？

何が繰り返し正常化されているのか？

何が繰り返し受け継がれているのか？

何が行動を形作っているのか？

何が理解を形作っているのか？

何が未来の世代を形作っているのか？

心理的影響は、世界環境への長期的な曝露が人類そのものに何をしているかを理解することを人に教える。

人間の心は、人類が守ることに失敗してきた最大の環境の一つである

人類が直面する最大の問題の一つは、人が自分が形作られていると理解する前から心理的に形作られている場合が多いことである。

人間の心は、人類が守ることに失敗してきた最大の環境の一つである。

人は自分が作ったのではない環境の中に生まれる。

人々はシステムを受け継ぐ。

人々は行動を受け継ぐ。

ナラティブを受け継ぐ。

権威を受け継ぐ。

依存を受け継ぐ。

人々は繰り返されるパターンを受け継ぐ。

そして人は、自分が受け継いだものを擁護する大人へ成長することがある。

これは、そもそも何が自分を形作ったのかを一度も理解しないまま起こり得る。

したがって、人々は次のように問うべきである。

何が私を形作ってきたのか？

私は何を受け継いだのか？

私は何を受け入れてきたのか？

私は何を繰り返してきたのか？

私は何を一度も独立して検証してこなかったのか？

何が私にとって正常になったのか？

どのような環境が私の理解を作ることに関与したのか？

問うことがなければ、人は、そこから適切に学ぶことのなかった環境によって心理的に形作られながら、生涯を過ごすことがある。

世界環境は絶えず人類を教えている

世界環境は決して教えることをやめない。

人は周囲にあるものから絶えず学んでいる。

子どもはそこから学ぶ。

大人はそこから学ぶ。

教師はそこから学ぶ。

親はそこから学ぶ。

制度はそこから学ぶ。

社会はそこから学ぶ。

世界環境は絶えず人類を教えている。

問題は、人が示されているものからどのように学ぶかを適切に教えられていないことである。

世界こそが本当の学校である。

人は気付いていないかもしれないが、世界環境は絶えず行動へ影響を与えている。

人は世界環境から学ぶ者ではなく、その産物になってしまうことがある。

これは、同じ世界が繰り返される最大の理由の一つである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この環境は何を教えているのか？

どのような行動に報いているのか？

どのような行動を抑制しているのか？

どのような行動を正常化しているのか？

どのような世界環境を再び作っているのか？

人が世界環境からどのように学ぶかを教えられていないと、多くの場合、代わりにそれへ心理的に適応してしまう。

人は不健全な環境に適応し得る

人間には適応能力がある。

これは有益であり得る。

しかし、危険にもなり得る。

人は不健全な環境に心理的に適応することがある。

人は恐怖に適応することがある。

人は依存に適応することがある。

人は不安に適応することがある。

人は不誠実さに適応することがある。

人は表面的なものに適応することがある。

人は圧力に適応することがある。

人は不健全な行動に適応することがある。

人は不健全な制度に適応することがある。

人は繰り返される問題に適応することがある。

欺瞞が繰り返し正常化されると、人は欺瞞そのものに心理的に適応することがある。

やがて、不健全な環境が正常になり得る。

すると未来の世代がその環境を受け継ぐことがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は何に適応しているのか？

これは正常であるべきなのか？

何がこれらの状況を作っているのか？

どのような行動が守られているのか？

どのような世界環境が再創造されているのか？

人はしばしば、原因から学ぶのではなく症状に適応する。

金のメカニズム

金のメカニズムは、心理的影響を形作る最大の影響の一つである。

金は情報を形作り得る。

金は依存を形作り得る。

金は恐怖を形作り得る。

金は沈黙を形作り得る。

金は誘因を形作り得る。

金は決定を形作り得る。

金は行動を形作り得る。

金は反復を形作り得る。

金は環境を形作り得る。

金は、人が受け入れるよう促されるものを形作り得る。

金のメカニズムは、情報、依存、誘因、恐怖、反復、沈黙、行動、そして心理的適応そのものを形作り得る。

人は、それを作り出しているメカニズムから一度も学ばないまま、その結果へ心理的に適応することがある。

これは、人類がそこから学ばなければならない最大のメカニズムの一つである。

したがって、人々は次のように問うべきである。

ここで金は何に影響しているのか？

金はどのような行動を生み出しているのか？

金はどのような沈黙を守っているのか？

金はどのような依存を生み出しているのか？

金はどのような恐怖を生み出しているのか？

金はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

子どもは守るべき最も重要な集団である

子どもは、世界環境の心理的影響から自分自身を守るために必要な手段を持って生まれるのではない。

子どもは、世界環境を理解したり、それから自分を守ったりする手段を持つ前から、心理的に世界環境にさらされている。

子どもは次のものを経験している：

金銭。

依存。

権威。

恐怖。

比較。

演出。

ナラティブ。

表面的なもの。

社会的圧力。

繰り返されるパターン。

それらを理解するはるか前から。

子どもは恐怖を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは不安を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは依存を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは比較を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは不安定感を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは表面的なものを心理的に受け継ぐことがある。

子どもは圧力を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは沈黙を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは不健全な行動を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは繰り返される世界の問題を心理的に受け継ぐことがある。

子どもは、世界環境からどのように学ぶかを適切に教えられないまま、それを心理的に生き延びなければならない状態に置かれるべきではない。

これは、教育が改善されなければならない最大の理由の一つである。

したがって、子どもは次のことを学ぶべきである：

どのように問うか。

どのように見るか。

どのように理解するか。

どのように独立して考えるか。

どのように世界環境から安全に学ぶか。

これが、L2Q問い方ツールキットが極めて重要である理由である。

人間の意識は形作られている

人類がどのように形作られているかを理解する前から、人間の意識は世界環境によって形作られている。

恐怖が繰り返し示されれば、恐怖は広がり得る。

比較が繰り返し示されれば、比較は広がり得る。

依存が繰り返し示されれば、依存は広がり得る。

演出が繰り返し示されれば、演出は広がり得る。

表面的なものが繰り返し示されれば、表面的なものは広がり得る。

反復が繰り返し示されれば、反復は広がり得る。

すると未来の世代がこれらの状況を受け継ぐことがある。

人は世界環境から学ぶのではなく、それに適応することによりあまりにも多くの時間を費やすため、やがて自分が何者なのかを忘れることさえある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この環境はどのような意識を作っているのか？

この環境はどのような理解を作っているのか？

この環境はどのような行動を作っているのか？

この環境はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

心理的影響が重要な理由

人が理解していない環境によって心理的に形作られている限り、人類は適切に進歩できないため、心理的影響は重要である。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実とは、どのような物語が提示されていて、現実がそれを支えているかを問う。

心理的影響はここで問う：

この環境は人間の心に何をしているのか？

それはどのような行動を生み出しているのか？

それはどのような理解を生み出しているのか？

それはどのような恐怖を生み出しているのか？

それはどのような依存を生み出しているのか？

それはどのような比較を生み出しているのか？

それはどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

人が不健全な世界環境から学び、それを改善するのではなく、そこへ心理的に適応し続ける限り、人類は進歩できない。

人が世界環境からどのように学ぶかを教えられていないと、多くの場合、代わりにそれへ心理的に適応してしまう。

こうして人は、世界環境の産物であることから世界環境の学習者へと移る。

時間を通じた心理的形成

この節の前半では、人が自分が形作られていると理解する前から心理的に形作られている場合が多いことを説明した。

ここからは、心理的形成が時間を通じてどのように発達するかへ進む。

心理的影響は通常、一瞬だけに起こるものではない。

多くの場合、繰り返しさらされることを通じて発達する。

人は同じものを繰り返し見る。

人は同じものを繰り返し聞く。

人は同じものを繰り返し経験する。

人は同じものに繰り返し適応する。

時間が経つと、繰り返しさらされることが正常になり得る。

やがて人は、自分が形作られていることをまったく認識しなくなることがある。

繰り返しさらされることは、世界環境の中にある最大の教師の一つになり得る。

人々は次のように問うべきである。

私は何に繰り返しさらされているのか？

私は何を繰り返し受け入れているのか？

私は何に繰り返し適応しているのか？

何が正常になったのか？

私は未来の世代に何を教えているのか？

私はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

比較、地位、そして自己価値

人は自分自身を他人と比較し始めることがある。

比較は、人間の行動を形作る最大の影響の一つになり得る。

人は次のものを比較することがある：

外見。

金銭。

生活様式。

人気。

地位。

成功。

所有物。

人間関係。

重要さ。

やがて人は、自分の自己価値をこれらの比較に結び付けることがある。

誰かがより多くを持っているように見えるために、自分は価値が低いと信じ始めることがある。

自分がより多くを所有しているために、自分は価値が高いと信じ始めることがある。

現実を反映していない環境を基準に、自分の価値を測り始めることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

誰が私に比較することを教えたのか？

私は自分自身を何と比較しているのか？

比較は何を生み出しているのか？

比較は何を隠しているのか？

比較はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

比較は、人を他人との測定に集中させるため、人が自分自身から学ぶことを止めることがある。

表面的なもの、演出、そして嘘の中で生きること

人は自分自身のある版を演じ始めることがある。

幸福を演じることがある。

成功を演じることがある。

自信を演じることがある。

完璧さを演じることがある。

所属を演じることがある。

重要さを演じることがある。

人は本当の気持ちを隠すことがある。

苦闘を隠すことがある。

苦しみを隠すことがある。

不確かさを隠すことがある。

恐怖を隠すことがある。

孤独を隠すことがある。

やがて人は、その演出そのものの中で生き始めることがある。

すると他の人がその演出をまねることがある。

これは循環を作り出すことがある。

演出は模倣を生む。

模倣は反復を生む。

反復は正常化を生む。

正常化は、演出を現実として受け継ぐ未来の世代を生む。

欺瞞が繰り返し正常化されると、人は欺瞞そのものに心理的に適応することがある。

人々は次のように問うべきである。

何が示されているのか？

何が隠されているのか？

私は何であるふりをしているのか？

私は何を明らかにすることを恐れているのか？

私は学んでいるのか？

それとも、演じているのか？

人は、提示されたものが自動的に現実になるわけではない
と学ばなければならない。

社会環境と互いをまねること

人は互いから学ぶ。

これは有益であり得る。

しかし、危険にもなり得る。

人は次のものをまねることがある：

言葉。

意見。

行動。

生活様式。

外見。

人格。

信念。

反応。

感情。

習慣。

やがて人は独立して考えることをやめることがある。

代わりに従い始めることがある。

次のように問うことがある：

他の全員は何をしているのか？

次のように問う代わりに：

何が真実なのか？

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は学んでいるのか？

それとも、まねているのか？

私は理解しているのか？

それとも、従っているのか？

私は独立して考えているのか？

それとも、周囲に合わせているのか？

これは、人類が同じ世界を繰り返し再び作る最大の理由の一つである。

恐怖、不安、そして心理的な生存

人は不健全な環境に心理的に適応することがある。

これは恐怖を生み出すことがある。

これは不安を生み出すことがある。

これは圧力を生み出すことがある。

これは不確かさを生み出すことがある。

人は環境から学ぶのではなく、それを生き延び始めることがある。

人は疲弊することがある。

人は圧倒されることがある。

人は依存するようになることがある。

人は感情的に切り離されることがある。

人々は次のように問うべきである。

私はこの環境から学んでいるのか？

それとも、それを生き延びているのか？

何がこれらの状況を作っているのか？

何がこれらの感情を作っているのか？

どのような世界環境が再創造されているのか？

人は、どのように理解するかを適切に教えられていない環境を心理的に生き延びなければならない状態に置かれるべきではない。

貪欲、羨望、そして人間の意識

人は金によって価値を測り始めることがある。

人は地位によって価値を測り始めることがある。

人は所有物によって価値を測り始めることがある。

人は外見によって価値を測り始めることがある。

人は人気によって価値を測り始めることがある。

これは貪欲を生み出すことがある。

これは羨望を生み出すことがある。

これは競争を生み出すことがある。

これは不安定感を生み出すことがある。

やがて人は世界から学ぶことをやめ、代わりにその中で競争することがある。

人々は次のように問うべきである。

私は何を追い求めているのか？

なぜ私はそれを追い求めているのか？

誰が私にそれを価値あるものと教えたのか？

これはどのような行動を生み出しているのか？

これはどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

人が理解するのではなく競争するよう教えられているとき、人間の意識は適切に進歩できない。

子どもと心理的継承

子どもが受け継いでいるのは情報だけではない。

子どもは環境を受け継いでいる。

子どもは行動を受け継いでいる。

子どもは恐怖を受け継いでいる。

子どもはナラティブを受け継いでいる。
子どもは圧力を受け継いでいる。
子どもは比較を受け継いでいる。
子どもは表面的なものを受け継いでいる。
子どもは演出を受け継いでいる。
子どもは依存を受け継いでいる。
子どもは繰り返される世界の問題を受け継いでいる。
子どもはまた、周囲の大人から学んでいる。
子どもは偽りの幸福を学ぶことがある。
子どもは比較を学ぶことがある。
子どもは社会的圧力を学ぶことがある。
子どもは沈黙を学ぶことがある。
子どもは演出を学ぶことがある。
子どもは苦しみを隠す方法を学ぶことがある。
子どもは、生き延びることそのものを心理的に受け継ぐことがある。
やがて子どもは、それを何が作ったのかを理解する前に苦しみを受け継ぐことがある。
これが、人類が同じ世界を繰り返す最大の理由の一つである。
したがって子どもは、これらの影響が深く正常化される前に、安全に問う方法を学ぶべきである。

人間の意識と世界環境

人間の意識は世界環境によって形作られる。

人類がどのように形作られているかを理解する前から、人間の意識は形作られている。

恐怖が繰り返し示されれば、恐怖は広がり得る。

比較が繰り返し示されれば、比較は広がり得る。

依存が繰り返し示されれば、依存は広がり得る。

演出が繰り返し示されれば、演出は広がり得る。

表面的なものが繰り返し示されれば、表面的なものは広がり得る。

反復が繰り返し示されれば、反復は広がり得る。

すると未来の世代がこれらの状況を受け継ぐことがある。

人は世界環境から学ぶのではなく、それに適応することによりあまりにも多くの時間を費やすため、やがて自分が何者なのかを忘れることさえある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

この環境は人類に何を教えているのか？

それはどのような意識を作っているのか？

それはどのような理解を生み出しているのか？

それはどのような世界を再び作ることに寄与しているのか？

人が世界環境へ心理的に適応することをやめ、代わりにそこから学び始めるとき、人間の意識は進歩する。

金のメカニズムと心理的適応

金のメカニズムは情報を形作り得る。

金のメカニズムは依存を形作り得る。

金のメカニズムは恐怖を形作り得る。

金のメカニズムは行動を形作り得る。

金のメカニズムは反復を形作り得る。

金のメカニズムは沈黙を形作り得る。

金のメカニズムは心理的適応そのものを形作り得る。

人は、それを作り出しているメカニズムから一度も学ばないまま、その結果へ心理的に適応することがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

金は何に影響しているのか？

金はどのような行動を生み出しているのか？

金はどのような恐怖を生み出しているのか？

金はどのような依存を生み出しているのか？

金はどのような沈黙を守っているのか？

金はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

心理的影響と人類の進歩

心理的影響は、人類の進歩への欠けている経路の一部である。

人が理解していない環境へ心理的に適応している限り、人類は進歩できない。

子どもが世界の問題にさらされながら、そこからどのように学ぶかを適切に教えられていない限り、人類は進歩できない。

人が自分自身を偽の現実と比較する限り、人類は進歩できない。

人が自分自身を理解するのではなく、自分自身のある版を演じる限り、人類は進歩できない。

人が不健全な環境を改善するのではなく心理的に生き延びる限り、人類は進歩できない。

人が繰り返される問題を作っているものから学ぶのではなく、その問題へ適応する限り、人類は進歩できない。

金のメカニズムが情報、依存、恐怖、行動、反復、沈黙を形作り続ける一方で、人が原因から学ぶのではなく結果へ心理的に適応する限り、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実には、どのような物語が提示されていて、現実がそれを支えているかを問う。

心理的影響はここで問う：

この環境は人間の心に何をしているのか？

この環境は子どもに何をしているのか？

この環境は理解に何をしているのか？

この環境は人間の意識に何をしているのか？

それはどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

こうして人は、心理的適応から理解へ移り始める。

こうして人々は、信念から検証へ進む。

こうして人々は、検証から見ることに進む。

こうして人々は、見ることから理解へ進む。

こうして人々は、理解から学びへ進む。

こうして人々は、学びから独立した思考へ進む。

こうして人々は、世界環境の産物になることから、世界環境から学ぶ者になることに進む。

セクション9 - どこでも同じ基準を適用する

どこでも同じ基準を適用するとは本当は何か

セクション1では、人は何かがどこから来て、何がそれを形作ったのかを学ばなければならないことを確立した。

セクション2では、人は証拠が主張されていることを支えているかを学ばなければならないことを確立した。

セクション3では、誘因が人に同じ世界を再び作ることに繰り返し報いるため、人類が同じ世界を繰り返し再び作ることを確立した。

セクション4では、繰り返される行動が言葉以上のことを明らかにする場合が多いことを確立した。

セクション5では、学びが始まる前から、人が問うことをしばしば抑制されていることを確立した。

セクション6では、理解が発達する前に、感情が信頼、信念、恐怖、反応、沈黙、行動を形作り得ることを確立した。

セクション7では、人類が集団としてナラティブを作り、受け継ぎ、擁護し、現実そのものと取り違い得ることを確立した。

セクション8では、人類がそうされていると理解する前から、世界環境が人類を心理的に形作っていることを確立した。

セクション9は、ここからどこでも同じ基準を適用するへ進む。

どこでも同じ基準を適用するが存在するのは、人類が異なる人、制度、環境、状況にしばしば異なる基準を適用するからである。

人は、自分自身を守りながら他人には一つの基準を適用することがある。

人は、権威を守りながら制度には一つの基準を適用することがある。

人は、自分が依存しているものを守りながら権威には一つの基準を適用することがある。

人は、一つのものを問いながら別のものを問うことを拒むことがある。

人は、一つのナラティブを問いながら別のナラティブに入ることがある。

人は、一つの制度を問いながら別の制度を守ることがある。

どこでも同じ基準を適用するは、学びから二重基準を取り除くことを人に教える。

しかし、どこでも同じ基準を適用するは二重基準よりも大きい。

そもそもなぜ異なる基準が使われているのかを理解することを人に教える。

人はしばしば、依存、恐怖、所属、アイデンティティ、金、権威、感情、受け継いだナラティブが、人がどこまで進んで学ぼうとするかに影響するため、異なる基準を適用する。

人類はしばしば異なる基準を使う

人類が同じ世界を繰り返し再び作る最大の理由の一つは、人がしばしば異なる基準を使うことである。

人は選択的になり得る。

選択的な問い方。

選択的な証拠。

選択的な信頼。

選択的な懷疑。

選択的な感情。

選択的な憤り。

選択的なナラティブ。

選択的な許可。

選択的な学び。

人は、何かが自分を脅かすと難しい問いをする一方で、何かが自分に利益をもたらすと問いをやめることがある。

人は、自分が嫌うものには証拠基準を適用しながら、自分が依存するものを守ることがある。

人は、他人には一貫性を求めながら、自分自身の一貫性を避けることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどこでも同じ基準を適用しているか？

私は何かを守っているか？

私は何かを避けているか？

私は何を問おうとしていないのか？

私は何に依存しているのか？

私は何に感情的に執着しているのか？

ここで同じ基準を適用すると、何が不快になるのか？

二重基準は、繰り返される世界の問題の継続を可能にする最大のメカニズムの一つになり得る。

同じ基準はどこでも適用されなければならない

真実は、誰が検証されているかによって異なる基準を必要としない。

同じ基準はどこでも適用されなければならない。

同じ基準は次のすべてに適用される：

人々。

子ども。

大人。

親。

教師。

学校。

政府。

メディア。

警察。

システム。

機関。

組織。

権威。

専門家。

ナラティブ。

情報。

物語。

信念。

同じ基準は私たち自身にも適用される。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はこの基準を自分自身にも適用するか？

私はこの基準を自分が支持する人にも適用するか？

私はこの基準を自分が同意しない人にも適用するか？

私はこの基準を制度にも適用するか？

私はこの基準を権威にも適用するか？

私はこの基準を自分が依存するものにも適用するか？

人がどこでも同じ基準を適用することを学ぶまで、独立した思考は完全には発達できない。

人は不快になるところで学ぶことをやめる場合が多い

人は、自分が依存しているものへ学びが異議を突き付け始めるまさにその地点で、学ぶことをやめる場合が多い。

金に関わると問うことをやめることがある。

所属が脅かされると問うことをやめることがある。

権威が関わりと問うことをやめることがある。

自分のアイデンティティが問われると問うことをやめることがある。

自分の役割が明らかにされると問うことをやめることがある。

自分自身の行動を検証しなければならないと問うことをやめることがある。

これは、学びがしばしば快適さが終わる地点から始まるため重要である。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどこで問うことをやめるのか？

私はどこで不快になるのか？

この不快感は何を明らかにしているのか？

私は何を守っているのか？

問い続けたら、私は何を理解しなければならなくなるのか？

どこでも同じ基準を適用するは、問うことが不快になったときに学ぶことをやめないよう人に教える。

金のメカニズムと異なる基準

依存が、人がどこまで進んで問おうとするかに影響し得るため、金のメカニズムは、人がどこでも同じ基準を適用しなくなる最大の理由の一つになり得る。

金は、人が何を問うかを形作り得る。

金は、人が何を避けるかを形作り得る。

金は、人が何を守るかを形作り得る。

金は、人が何を擁護するかを形作り得る。

金は、人が何について沈黙するかを形作り得る。

金は、人が何を繰り返すかを形作り得る。

金は、人が何を進んで検証するかを形作り得る。

人は、金に関わる前には一つの基準を適用し、依存が生じた後には別の基準を適用することがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

ここで金は何に影響しているのか？

どのような依存が存在するのか？

私は何を繰り返すために報酬を受けているのか？

私は何を守るために報酬を受けているのか？

私は金のために何を問うことを恐れているのか？

金に関わると、どの基準が変わるのか？

金のメカニズムが適用される基準を変えるなら、その基準はどこでも適用されていることにはならない。

人はしばしば、嫌うものを問いながら依存するものを守る

人は選択的な学びの中に閉じ込められることがある。

人は自分が嫌うものを問うことがある。

人は自分が利益を得るものを守ることがある。

人は自分が依存するものを守ることがある。

人は安全だと感じるものを守ることもある。

人は受け継いだものを守ることがある。

人は他の全員が守っているものを守ることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

なぜ私はこれを問っているのか？

なぜ私はあれを問っていないのか？

私は何を守っているのか？

私は何を失うことを恐れているのか？

私は何を見ることを恐れているのか？

私はどの基準を適用することを拒んでいるのか？

どこでも同じ基準を適用するは、学びから感情的なえこひいきを取り除くことを人に教える。

どこでも同じ基準を8つすべての節に適用する

どこでも同じ基準を適用するは、前の8つの節を一つにまとめる節である。

出所と起源はどこでも適用されなければならない。

証拠基準はどこでも適用されなければならない。

誘因と利得はどこでも適用されなければならない。

性質と一貫性は、どこでも適用されなければならない。

問うことへの許可はどこでも適用されなければならない。

感情的影響はどこでも適用されなければならない。

ナラティブ対現実はどこでも適用されなければならない。

心理的影響はどこでも適用されなければならない。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はこれらの道具をどこでも使っているか？

それとも、快適に感じるところだけで使っているのか？

私はすべての節に同じ基準を適用しているか？

それとも、ツールキットを選択的に使っているのか？

教育は一貫した思考を教えなければならない

教育はしばしば、科目を分けることを人に教える。

しかし、世界環境はつながっている。

人は、どこでも同じ基準を適用するよう教えられるべきである。

そうでなければ、人はある領域を問うことの専門家になりながら、別の領域を一度も問わないままにいることがある。

人は独立した思考者にならないまま、知識豊富になることがある。

人は情報を得ていても、同じ世界を再び作り続けることがある。

したがって教育は、二重基準を認識することを人に教えるべきである。

教育は、選択的な真実を認識することを子どもに教えるべきである。

教育は、選択的な憤りを認識することを子どもに教えるべきである。

教育は、選択的な問い方を認識することを子どもに教えるべきである。

教育は、選択的な学びを認識することを子どもに教えるべきである。

子どもは、二重基準が何であることを理解する前にそれを受け継ぐことがある。

目的は人を攻撃することではない。

目的は一貫性を作ることである。

この節は私たち自身にも適用される

人が犯す最大の間違いの一つは、これらの節が他人だけに適用されると信じることである。

それらは私たち自身にも適用される。

人々は次のように問うべきである。

私は何に寄与しているのか？

私は何を繰り返しているのか？

私は何を守っているのか？

私は何を避けているのか？

私は何を受け継いだのか？

私は何を一度も独立して検証してこなかったのか？

私は同じ基準を自分自身にも適用するか？

どこでも同じ基準を適用するは、学びから例外を取り除く。

誰も自動的に問われることから免除されるべきではない。

どこでも同じ基準を適用することと人間の意識

人生の異なる領域に異なる基準が適用される限り、人間の意識は適切に進歩できない。

人が自分自身には一つの基準を、他人には別の基準を適用するなら、意識は進歩しない。

人が自分の嫌う制度には一つの基準を、自分が依存する制度には別の基準を適用するなら、意識は進歩しない。

人が自分の拒絶するナラティブには一つの基準を、自分が感情的に守るナラティブには別の基準を適用するなら、意識は進歩しない。

人が遠くの権威には一つの基準を適用する一方で、自分の近くにある権威には適用しないなら、意識は進歩しない。

人がどこでも同じ基準を適用することを学ぶとき、人間の意識は進歩する。

どこでも同じ基準を適用することが重要な理由

異なる人、制度、ナラティブ、環境に異なる基準が適用される限り、人類は適切に進歩できないため、どこでも同じ基準を適用することは重要である。

人が他人を問いながら自分自身を問わない限り、人類は進歩できない。

人が一つの権威を問いながら別の権威を問わない限り、人類は進歩できない。

人が一つのナラティブを問いながら別のナラティブを守る限り、人類は進歩できない。

人が真実を選択的に適用する限り、人類は進歩できない。

人が学びを選択的に適用する限り、人類は進歩できない。

問うことが不快になるところで人が学ぶことをやめる限り、人類は進歩できない。

金のメカニズムが、人が進んで適用する基準を変える限り、人類は進歩できない。

二重基準が正常化されたままである限り、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実、どのような物語が提示されていて、現実がそれを支えているかを問う。

心理的影響は、世界環境が人間の心に何をしているのかを問う。

どこでも同じ基準を適用するはここで問う：

私はどこでも同じ基準を適用しているか？

私は何を免除しているのか？

私は何を守っているのか？

私は何を検証しようとしていないのか？

どこで不快感が私の問いを止めるのか？

どこで金が基準を変えるのか？

異なる基準が使われるとき、どのような世界環境が再び作られているのか？

こうして人は、選択的な学びから一貫した学びへと移る。

こうして人は、選択的な問いから独立した思考へと移る。

こうして人は、世界環境の産物であることから世界環境の学習者へと移る。

二重基準と人類

この節の前半では、人類が異なる人、制度、環境、状況にしばしば異なる基準を適用することを説明した。

ここからは、異なる基準がどのように世界環境を繰り返し再び作るかへ進む。

二重基準は見えなくなることがある。

人は、自分がそれを使っていることに気付いていないことがある。

人は自分自身には一つの基準を、他人には別の基準を適用することがある。

人は権威には一つの基準を、一般の人には別の基準を適用することがある。

人は一つの集団には一つの基準を、別の集団には別の基準を適用することがある。

人は一つのナラティブには一つの基準を、別のナラティブには別の基準を適用することがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は一貫しているか？

私はどの基準を変えているのか？

私は何を守っているのか？

私はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

二重基準は、繰り返される世界の問題が継続する最大の理由の一つになり得る。

所属、アイデンティティ、そして安全に感じるものを守る こと

人は自分が依存するものに感情的に執着することがある。

人は受け継いだものに感情的に執着することがある。

人は自分が同一視するものに感情的に執着することがある。

人は所属に感情的に執着することがある。

人は現実から学ぶのではなく、アイデンティティを守り始めることがある。

人は行動から学ぶのではなく、集団を守り始めることがある。

人は証拠から学ぶのではなく、信念を守り始めることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は自分のアイデンティティのどの部分を守っているのか？

私は自分の所属のどの部分を守っているのか？

私は何を失うことを恐れているのか？

私は何を見ることを恐れているのか？

ここで同じ基準を適用したら、私は何を学ぶのか？

人はしばしば、自分に安全だと感じさせるものを守る。

これは学びを止めることがある。

部族意識、分断、そして選択的な真実

人は自分たちを集団に分けることがある。

集団は学びより強くなることがある。

集団は真実より強くなることがある。

集団は理解より強くなることがある。

人は自分の側を擁護することがある。

人は別の側を攻撃することがある。

人は誰が提示したかによって情報を拒絶することがある。

人は誰が提示したかによって情報を受け入れることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

もし別の誰かが言ったなら、私はこれを信じるか？

もし私が支持する誰かが言ったなら、私はこれを拒絶するか？

私は学んでいるのか？

それとも、どちらかの側を選んでいるのか？

選択的な真実は、独立した思考を妨げる最大のメカニズムの一つになり得る。

依存を守ること

人は、一度も独立して検証したことのない環境に依存するようになることがある。

人は制度に依存するようになることがある。

人は権威に依存するようになることがある。

人は金に依存するようになることがある。

人は承認に依存するようになることがある。

人は所属に依存するようになることがある。

すると人は、それらの依存を守ることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は何に依存しているのか？

もしそれを失ったら、私はそれを問うだろうか？

もしそれが他の誰かに影響したら、私はそれを問うだろうか？

もし私がそこから利益を得ていなければ、私はそれを問うだろうか？

人はしばしば、自分がそうしていると認識せずに依存を守る。

金のメカニズムと一貫性

金のメカニズムは、人がどこでも同じ基準を適用しなくなる最大の理由の一つになり得る。

依存は、人がどこまで進んで学ぼうとするかに影響し得る。

依存は、人がどこまで進んで問おうとするかに影響し得る。

金は、人が何を擁護するかを形作り得る。

金は、人が何を避けるかを形作り得る。

金は、人が何を繰り返すかを形作り得る。

金は、人が何について沈黙し続けるかを形作り得る。

したがって、人々は次のように問うべきである。

金に関わると、どの基準が変わるのか？

どのような依存が存在するのか？

私は何を守っているのか？

私は何を失うことを恐れているのか？

もしこの状況から金を取り除かれたら、私は何を学ぶのか？

金のメカニズムが適用される基準を変えるなら、その基準はどこでも適用されていることにはならない。

人は選択的な学習者になり得る

人は、ある領域を問うことには極めて熟達しながら、別の領域を問うことを拒むようになることがある。

人は、別の場所の問題を見ることには熟達しながら、自分自身の寄与を見ることを拒むようになることがある。

人は、矛盾を明らかにすることには熟達しながら、自分自身の矛盾を守るようになることがある。

人は、ナラティブを問うことには熟達しながら、受け継いだナラティブを守るようになることがある。

人は、制度を問うことには熟達しながら、自分が依存する制度を守るようになることがある。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私は学んでいるのか？

それとも、どこでなら学ぶつもりがあるかを選んでいるのか？

何が私に学ぶことをやめさせるのか？

何が私を不快にするのか？

人は、自分が依存しているものへ学びが異議を突き付け始めるまさにその地点で、学ぶことをやめる場合が多い。

選択的な学びは、独立した思考に対する最大の障壁の一つになり得る。

子どもは異なる基準を受け継ぐことがある

子どもは大人から学ぶ。

子どもは大人が何をするかを見る。

子どもは大人が何を避けるかを見る。

子どもは大人が何を守るかを見る。

子どもは大人が何を繰り返すかを見る。

子どもは、二重基準が何であることを理解する前にそれを受け継ぐことがある。

子どもは次のものを受け継ぐことがある：

選択的な真実。

選択的な憤り。

選択的な問い方。

選択的な学び。

選択的な証拠。

選択的な信頼。

子どもは次のことを学ぶことがある：

他人は問うが、自分自身は問わない。

一部の制度は問うが、他の制度は問わない。

一部の権威は問うが、他の権威は問わない。

一部のナラティブは問うが、他のナラティブは問わない。

一部の人は問うが、他の人は問わない。

すると未来の世代は、なぜかを理解しないまま同じ世界を再び作ることがある。

したがって子どもは、最初から一貫性を学ぶべきである。

一貫性は人類の進歩への最大の経路の一つである

一貫性なしに人類の進歩は適切に起こり得ない。

一貫性は例外を取り除く。

一貫性はえこひいきを取り除く。

一貫性は選択的な学びを取り除く。

一貫性は選択的な真実を取り除く。

一貫性は選択的な問い方を取り除く。

一貫性は、人が独立した思考者になるのを助ける。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はこの基準をどこでも適用するか？

私はそれをすべての人に適用するか？

私はそれを自分自身に適用するか？

私はそれを自分が支持するものに適用するか？

私はそれを自分が依存するものに適用するか？

人がどこでも同じ基準を適用することを学ぶまで、独立した思考は完全には発達できない。

人間の意識と一貫性

人生の異なる領域に異なる基準が適用される限り、人間の意識は適切に進歩できない。

人は一貫性を欠いたまま、極めて多くの知識を持つことがある。

人は一貫性を欠いたまま、情報を得ることがある。

人は一貫性を欠いたまま、教育を受けることがある。

一貫性がえこひいきより強くなるとき、人間の意識は進歩する。

一貫性が所属より強くなるとき、人間の意識は進歩する。

一貫性が依存より強くなるとき、人間の意識は進歩する。

一貫性が恐怖より強くなるとき、人間の意識は進歩する。

したがって、人々は次のように問うべきである。

私はどの一貫性を避けているのか？

私はどの基準を適用しようとしていないのか？

私はどのような世界環境を再び作ることに寄与しているのか？

同じ基準は私たち自身にも適用される

この節は私たち自身にも適用される。

誰も免除されるべきではない。

同じ基準は私たち自身にも適用される。

同じ基準は私たちの仕事にも適用される。

同じ基準は私たちの信念にも適用される。

同じ基準は私たちの行動にも適用される。

同じ基準は私たちの寄与にも適用される。

同じ基準はどこでも適用される。

これは誠実さへの最大の経路の一つである。

どこでも同じ基準を適用することと人類の進歩

どこでも同じ基準を適用するは、人類の進歩への欠けている経路の一部である。

異なる人、制度、権威、ナラティブ、環境に異なる基準が適用される限り、人類は進歩できない。

人が一つのものを問い、別のものを守る限り、人類は進歩できない。

人が真実を選択的に適用する限り、人類は進歩できない。

人が学びを選択的に適用する限り、人類は進歩できない。

人が自分の依存するものを守る限り、人類は進歩できない。

子どもが異なる基準を受け継ぐ限り、人類は進歩できない。

不一貫性が正常化されたままである限り、人類は進歩できない。

出所と起源は、何かがどこから来たのか、何がそれを形づくったのかを問う。

証拠基準は、証拠が主張されていることを裏づけているかを問う。

誘因と利得は、それが継続することで誰が利益を得るかを問う。

性質と一貫性は、行動が主張されていることと一致するかを問う。

問うことへの許可は、何が問うことを止めているのかを問う。

感情的影響は、どのような感情が受容を形作っているのかを問う。

ナラティブ対現実とは、どのような物語が提示されていて、現実がそれを支えているかを問う。

心理的影響は、世界環境が人間の心に何をしているのかを問う。

どこでも同じ基準を適用するのはここで問う：

私はどこでも同じ基準を適用しているか？

私は何を免除しているのか？

私は何を守っているのか？

私は何を検証しようとしていないのか？

どこで不快感が私の問いを止めるのか？

どこで金が基準を変えるのか？

異なる基準が使われるとき、どのような世界環境が再び作られているのか？

こうして人は、選択的な学びから一貫した学びへと移る。

こうして人は、選択的な問いから独立した思考へと移る。

こうして人は、世界環境の産物であることから世界環境の学習者へと移る。

人類の進歩

人類の進歩は、L2Q問い方システムの直接的な成果である。

それは、欠けている教育経路が開発された理由である。

それは、Book of Evidenceが教育経路へ転換された理由である。

それは、World Education Online、Q2L、Young Questionersが存在する理由である。

目的は、単に問い方を改善することでは決してなかった。

目的は、単に教育を改善することでは決してなかった。

目的は、単により多くの情報を提供することでは決してなかった。

目的は人類の進歩である。

Book of Evidenceは、30年以上にわたる直接の経験、タイムスタンプ付き証拠、複数の公的記録、動画、ライブ配信、複数の異議提示、制度とのやり取り、繰り返されるパターン、沈黙、非反駁、そして世界環境の観察を記録しただけではない。

それは矛盾を明らかにした。

問うことはすでに存在していた。

情報はすでに存在していた。

証拠はすでに存在していた。

教育はすでに存在していた。

それでも、同じ繰り返される世界は続いた。

人類は、適切に見て、理解し、そこから学ぶことに失敗していたものを繰り返し続けた。

情報が存在していたにもかかわらず。

問うことが存在していたにもかかわらず。

証拠が存在していたにもかかわらず。

教育が存在していたにもかかわらず。

反復は続いた。

これは欠けている経路を明らかにした。

問題は情報が存在しないことではなかった。

問題は問うことが存在しないことではなかった。

問題は証拠が存在しないことではなかった。

問題は教育制度が存在しないことではなかった。

問題は、世界環境そのものをどのように問い、見て、理解し、そこから学ぶかを学ぶための、構造化され、証拠に基づく経路が存在しないことだった。

人類は、見ることも理解することもできないものから学ぶことはできない。

Book of Evidenceは、繰り返される世界を見えるもの、理解できるものにするに寄与した。

それは、人類が何から学ぶかと、人類が繰り返し何になるかとの関係を明らかにすることに寄与した。

それは、世界環境が時間を通じて繰り返し何を示したかを明らかにすることに寄与した。

それは、何が繰り返されたかを明らかにした。

それは、何が継続したかを明らかにした。

それは、何が守られたかを明らかにした。

それは、何が隠されたかを明らかにした。

それは、なぜ問うことだけでは反復を止められなかったのかを明らかにした。

これがL2Q問い方システムが開発された理由である。

L2Q問い方システムは、最初に作られ、その後世界に適用されたのではない。

それは、世界が繰り返し示したのから開発された。

それは、Book of Evidenceが明らかにしたのから開発された。

それは、問うことがすでに存在していた一方で反復が続いたために開発された。

それは、情報がすでに存在していた一方で反復が続いたために開発された。

それは、証拠がすでに存在していた一方で反復が続いたために開発された。

それは、教育がすでに存在していた一方で反復が続いたために開発された。

欠けていた経路は、より多くの情報ではなかった。

欠けていた経路は、より多く問うことではなかった。

欠けていた経路は、構造化され、証拠に基づく教育経路を通じて、世界環境そのものをどのように問い、見て、理解し、そこから学ぶかを学ぶことだった。

L2Q問い方システムは、その経路を提供する。

それは、世界環境そのものをどのように問い、見て、理解し、そこから学ぶかを学ぶための、構造化され、証拠に基づく経路を提供する。

L2Q問い方システムは、世界環境そのものの問い方を学ぶことを人に助ける。

世界環境の問い方を学ぶことは、自分が何から学んでいるかを見ることを人に助ける。

見ることは、人が理解することを助ける。

理解は独立した思考を発達させる。

独立した思考は、現実にとって代わるために作られたものから学ぶのではなく、現実から学ぶ人類の能力を発達させる。

人類の進歩は、その過程の成果である。

人類の進歩は、人類が世界が繰り返し示すものから学び、それを繰り返し続けることをやめたときの成果である。

人類の進歩は、情報だけを増やすことによって達成されるのではない。

情報は自動的に理解を生み出さない。

何から学んでいるかをどのように問うかを学ばなければ、理解は自動的に発達しない。

理解が独立した思考を発達させ、独立した思考が現実から学ぶ人類の能力を発達させるとき、人類の進歩は達成される。

これまでのセクションは、人類が世代から世代へ同じ問題、行動、制度、ナラティブ、依存、限界、繰り返されるパターンをなぜ繰り返し再び作るのかをすでに示してきた。

それらは、情報だけでは十分でない理由を示してきた。

それらは、問うことだけでは十分でない理由を示してきた。

それらは、人類が世界環境そのものから学ぶための構造化され、証拠に基づく経路を必要とする理由を示してきた。

その経路は今、存在する。

人類の進歩とは、人類が世界環境そのものから学ぶ能力を段階的に改善していくことである。

理解は独立した思考を発達させる。

理解が進歩するにつれて、独立した思考も進歩する。

独立した思考が進歩するにつれて、反復はその経路を失う。

反復がその経路を失うにつれて、人類は現実を段階的に繰り返すのではなく、現実から段階的に学ぶ能力を得る。

すべての人が同じ世界環境の中で生きている。

すべての人がそこから学ぶ。

すべての人がそこへ寄与する。

すべての人がそこから影響を受ける。

すべての人がそこへ影響を与える。

すべての人が、未来の世代が受け継ぐものを形作ることに寄与する。

したがって、人類の進歩はすべての人に利益をもたらす。
なぜなら、すべての人が同じ世界環境を共有し、それが何
になるかを形作ることに寄与するからである。

したがって、人類の進歩は誰か他の人の責任ではない。

それはすべての人のものである。なぜなら、すべての人が
人類を形作る世界環境へ寄与するからである。

子どもは、自分が受け継ぐ世界を作らない。

大人が作る。

子どもは、教育環境を作らない。

大人が作る。

子どもは、どの学習経路が自分たちに提供されるかを決め
ない。

大人が決める。

人が気付いているかどうかにかかわらず、未来の世代がそ
こから学ぶ世界環境を形作ることに寄与している。

子どもが受け継ぐ世界環境は、過去の世代が何を問うこと
を選び、何を無視することを選び、何に異議を示すこと
を選び、何を守ることを選び、何を次へ渡すことを選ぶか
によって形作られる。

人類が何から学ぶかは、人類が何になるかに影響する。

子どもが何から学ぶかは、未来の世代が何になるかに影響
する。

社会が何から学ぶかは、社会が何になるかに影響する。

したがって、人類の進歩は、人が何から学ぶか、そしてそ
れからどのように学ぶかを改善することに依存する。

これは、親、教師、養育者、教育者、学校、教育環境、地域社会、そして社会のすべてが、次の世代が反復より良いものを受け取るのを助ける責任を持つことを意味する。

しかし、責任が遅延になってはならない。

子どもたちは待たなければならない状況であってはならない。

大人は待たなければならない状況であってはならない。

教育が待たなければならない状況であってはならない。

人類と一緒に学ぶとき、人類の進歩は最も速く進む。

子どもが学ぶ。

大人が学ぶ。

親が学ぶ。

教師が学ぶ。

養育者が学ぶ。

教育者が学ぶ。

地域社会が学ぶ。

社会が学ぶ。

目的は、一つの集団が別の集団を待つことではない。

目的は、人類が世界環境から学ぶ能力と一緒に改善することである。

人類の進歩は反復によって達成されるのではない。

人類の進歩は学びによって達成される。

人類の進歩は理解によって達成される。

人類の進歩は独立した思考を発達させることによって達成される。

人が世界環境が繰り返し示すものから学び、それを繰り返し続けることをやめるとき、人類の進歩は達成される。

理解が進歩するにつれて、独立した思考も進歩する。

独立した思考が進歩するにつれて、人は現実にとって代わるために作られたものから学ぶのではなく、ますます現実から学ぶ。

理解が盲目的な受容にとって代わるため、作られた嘘はその経路を失う。

独立した思考が、他人に自分の代わりに考えてもらう依存にとって代わるため、追従はその経路を失う。

適切に問われていないものに頼るのではなく、人がますます現実から学ぶため、依存はその経路を失う。

学びが模倣にとって代わるため、反復はその経路を失う。

同じ基準がどこでも適用されるため、二重基準はその経路を失う。

人が世界環境について信じるよう言われたことではなく、世界環境が実際に示すものから学ぶため、人類の進歩は進む。

これがL2Q問い方システムが重要である理由である。

それは、世界環境が繰り返し示すものを人が見て、理解し、そこから学び、適用するのを助けるための構造化され、証拠に基づく経路を提供する。

これが、これらの資料が重要である理由である。

それらは所有されるために作られたのではない。

それらは制限されるために作られたのではない。

それらは、また別の管理された制度になるために作られたのではない。

それらはすべての人のものである。

読むことができる。

使うことができる。

共有することができる。

印刷することができる。

配布することができる。

適用することができる。

そこから学ぶことができる。

子どもを助けるために使うことができる。

大人を助けるために使うことができる。

教育を助けるために使うことができる。

社会を助けるために使うことができる。

制限されるのは所有ではない。

制限されるのは意味である。

構造化され、証拠に基づく問い方の経路は、そのまま保たれなければならない。

資料は、その正しい意味から変更されたり、弱められたり、誤って表現されたり、薄められたり、逆転されたり、取り除かれたりしてはならない。

人類の進歩は、意味が明確なまま保たれることに依存する。

別のものへ変えられたものから、人は正しく学ぶことができない。

弱められたものから、人は正しく学ぶことができない。

誤って表現されたものから、人は正しく学ぶことができない。

人類の進歩は、人が変更された版ではなく、その経路そのものから学ぶことに依存する。

意味が変われば、学びが変わる。

学びが変われば、成果が変わる。

したがって、人類の進歩は、その経路そのものの完全性を保つことに依存する。

これが、公式のWorld Education OnlineとQ2Lの経路が重要である理由である。

それらは、人が資料へ正しい文脈でアクセスするのを助ける。

それらは、資料を使い、共有し、印刷し、配布し、適用し、そこから学ぶことを可能にしながら、意味を守ることに寄与する。

目的は制限ではない。

目的は意味を守ることである。

学習経路の意味が、それが止めるために作られた同じ反復へ変えられるなら、その学習経路は人類を進歩させることができない。

これがQ2Lも重要である理由である。

Q2Lは、教育経路が社会を通じて広がるのを助ける。

それは、人が資料を共有し、使い、配布し、作り、適用し、そこから学ぶことを可能にする。

それは、大人が大人に届くのを助ける。

それは、大人が子どもを助けるのを助ける。

それは、家族、学校、教育者、地域社会が同じ枠組みから学ぶのを助ける。

それは、理解が社会を通じて広がるのを助ける。

それは、独立した思考が社会を通じて広がるのを助ける。

それは、人が同じ構造化され、証拠に基づく経路を通じて世界環境から学ぶのを助ける。

それは、人類の進歩が社会を通じて広がるのを助ける。

それは、未来の世代が反復を受け継ぐのではなく、学習経路を受け継ぐのを助ける。

それは、人類の進歩を概念から適用へ移すのを助ける。

それは、学びを行動へ移すのを助ける。

それは、理解を社会へ広げるのを助ける。

それは、独立した思考を社会へ広げるのを助ける。

それは、人類の進歩を日常生活へ広げるのを助ける。子どもが関わる場合、資料は親、教師、養育者、学校、教育環境、責任ある大人を通じて届けられるべきである。

これは、子どもが待つべきという意味ではない。

子どもが枠組みを安全に、責任を持って、できるだけ早く受け取るべきという意味である。

Young Questionersはその中心である。

Young Questionersは、単に子どもへ資料を提供することではない。

それは、人が何から学んでいるかを基に何かを作ることを通じて学ぶことである。

親が学ぶ。

教師が学ぶ。

養育者が学ぶ。

教育者が学ぶ。

学校が学ぶ。

地域社会が学ぶ。

人がこの枠組みから安全で年齢に適したYoung Questionersの資料を作るとき、子どもが学ぶのを助けているだけではない。

人自身も学んでいる。

子どもが何を問う必要があるかを考えている。

子どもがどのように学ぶかを考えている。

世界環境がどのように子どもを形作るかを考えている。

子どもの心をどのように守るかを考えている。

子どもが見て、理解し、学び、独立した思考を発達させるのをどのように助けるかを考えている。

作る過程そのものが学習過程の一部になる。

人は適用を通じて学ぶ。

人は問うことを通じて学ぶ。

人は作ることを通じて学ぶ。

人は他者が学ぶのを助けることを通じて学ぶ。

したがって、Young Questionersは子どもと大人と一緒に学ぶのを助ける。

教師と教育者は、子どもの学習環境を形作ることに寄与するため、とりわけ重要である。

L2Q問い方システムは、教師と教育者に、世界環境から学びながら自分自身もそこから学び続けることを通じて子どもを助けるための、構造化された証拠に基づく方法を提供する。

同じことが、親、養育者、学校、教育環境、責任ある大人にも当てはまる。

この枠組みは一つの集団だけに必要なのではない。

子どもに必要なである。

大人に必要なである。

親、教師、養育者、教育者、学校、教育環境、地域社会に必要なである。

人が世界環境から学び、他者がそこから学ぶのを助けているあらゆる場所で必要である。

教育は、世界環境そのものの問い方を人に教えることに失敗した同じ方法を繰り返すことで改善することはできない。

子どもと大人にL2Qの経路が与えられ、そこから一緒に学ぶとき、教育は改善する。

人類の進歩は、一冊の本、一人の人、一つのウェブサイト、一つの組織、一つの世代の中に閉じ込められたままでいることはできない。

それは社会を通じて広がらなければならない。

使われなければならない。

共有されなければならない。

そこから学ばれなければならない。

子どもへ届かなければならない。

大人へ届かなければならない。

教育へ届かなければならない。

地域社会へ届かなければならない。

理解が進歩するとき、人類の進歩は進む。

独立した思考が進歩するとき、それは進む。

人が世界環境を単に受け継ぐのではなく、そこから学ぶとき、それは進む。

未来の世代に、現実を単に繰り返すのではなくそこから学ぶ能力が与えられるとき、それは進む。

理解が盲目的な受容に取って代わるとき、それは進む。

独立した思考が追従に取って代わるとき、それは進む。

現実が作られた嘘に取って代わるとき、それは進む。

学びが反復に取って代わるとき、それは進む。

人類の進歩が進むにつれて、人類は現実にとって代わるために作られたものから学ぶのではなく、現実から学ぶ能力を段階的に改善する。

理解が進歩するにつれて、作られた嘘は生き残る能力を失う。

独立した思考が進歩するにつれて、追従はその経路を失う。

人がどこでも同じ基準を適用する方法を学ぶにつれて、二重基準はその経路を失う。

人類が世界環境そのものから学ぶにつれて、制度、行動、ナラティブ、前提、構造は、欺きではなく現実とますます一致するようになる。

したがって、人類の進歩は単に問い方を改善するのではない。

それは、人類が学び、理解し、独立して考え、真実を見分け、公平さを適用し、自ら作り次へ渡す世界環境を段階的に改善する能力を向上させる。

人類が欺きの上に築くのではなく真実の上に築く能力をますます高めるにつれて、不公平はその土台を失う。

不公平がその土台を失うにつれて、社会は人、未来の世代、そして生命そのものにますます役立つことができるようになる。

したがって、人類の進歩は単に知識の進歩ではない。

それは、現実から学び、現実を基に築く人類の能力の段階的な進歩である。

子どもが未来の世界環境を担う者になるため、子どもは中心であり続ける。

子どもは親になる。

子どもは教師になる。

子どもは養育者になる。

子どもは働く人になる。

子どもは指導者になる。

子どもは意思決定者になる。

子どもは世界への寄与者になる。

子どもが今日学ぶものは何であれ、明日の世界の一部になる。

未来の世代が受け継ぐ世界は、過去の世代が何から学んだかによって形作られる。

未来の世代が作る世界は、彼らが何から学ぶかによって形作られる。

したがって、人類の進歩は、今日、子どもが何から学ぶよう教えられるかに依存する。

子どもが反復を受け継げば、繰り返される世界は続く。

子どもが依存を受け継げば、依存は続く。

子どもが追従を受け継げば、追従は続く。

子どもが沈黙を受け継げば、沈黙は続く。

子どもが恐怖を受け継げば、恐怖は続く。

子どもが作られた嘘を受け継げば、作られた嘘は続く。

子どもがL2Q問い方システムを受け継げば、人類の進歩は続く。

子どもが構造化され、証拠に基づく問い方を受け継げば、理解は進歩する。

子どもが世界環境そのものから学ぶ能力を受け継げば、独立した思考は進歩する。

子どもが真実を見分ける能力を受け継げば、作られた嘘はその経路を失う。

子どもがどこでも同じ基準を適用する能力を受け継げば、繰り返される二重基準はその経路を失う。

したがって、人類の未来は、子どもが何から学ぶよう教えられるかと切り離すことができない。

人類の進歩は、過去の世代が問うことに失敗したものを未来の世代が解決するのを待つことで作られるのではない。

現在と未来の世代にその経路が一緒に与えられるとき、人類の進歩は作られる。

子どもと大人が一緒に学ぶ。

家族と学校が一緒に学ぶ。

教師と生徒が一緒に学ぶ。

地域社会が一緒に学ぶ。

社会が世界環境から一緒に学ぶ。

人類の進歩は、一人の人が一人で学ぶことによって作られるのではない。

人類が世界環境から一緒に学ぶ能力を段階的に改善するとき、人類の進歩は作られる。

こうして繰り返される害はその経路を失う。

こうして作られた嘘はその経路を失う。

こうして沈黙はその経路を失う。

こうして依存はその経路を失う。

こうして追従はその経路を失う。

こうして繰り返される世界はその経路を失う。

こうして人類の進歩はその経路を得る。

その経路は存在する。

その枠組みは存在する。

その資料は存在する。

次の世代は存在する。

責任は存在する。

問いはもはや、その経路が存在するかどうかではない。

問いは、人類がそれを使うことを選ぶかどうかである。

次に何が起きるかは、人類がそれらをどうすることを選ぶかにかかっている。

今日の子どもが明日の世界になる。

子どもが今日何から学ぶよう教えられるかは何であれ、明日彼らが作ることに寄与する世界の一部になる。

これが、人類の未来を子どもの教育から切り離すことができない理由である。

今日の子どもが明日の世界になるため、そして人類の未来は最終的に、未来の世代が繰り返される世界を受け継ぐの

か、それともそこから学ぶ能力を受け継ぐのかによって決まる。

人類の未来は最終的に、理解が進歩するのか、反復が進歩するのかによって決まる。

独立した思考が進歩するのか、追従が進歩するのか。

現実が進歩するのか、作られた嘘が進歩するのか。

人類が世界を繰り返し続けるのか、それとも段階的にそこから学ぶのか。

すべての人が同じ世界環境の中で生きているため、人類の進歩はすべての人に利益をもたらす。

すべての人がそこから学ぶ。

すべての人がそこへ寄与する。

すべての人がそこから影響を受ける。

すべての人が、それが何になるかを形作ることに寄与する。

したがって、人類の進歩の利益は、一人の人、一つの集団、一つの制度、一つの世代に限定されない。

それらはすべての人のものである。なぜなら、すべての人が同じ世界環境を共有し、そこから生まれる未来へ寄与するからである。

なぜ私は何もしないでいることができなかったのか

子どもの頃、私は世界は人が言うとおりのものだと思っていた。

私は真実が重要だと思っていた。

私は制度は自らがそうであると主張するものだと思っていた。

私は重要な問題が提起されたとき、人は真実を語っていた。

私は証拠が重要だと思っていた。

私は矛盾は対処されると思っていた。

年を重ね、自分自身で世界を経験するにつれて、私はまったく異なるものに繰り返し遭遇した。

私が経験した世界は、そうであると期待するよう教えられた世界ではなかった。

私が見ているものを問ったとき、私は答えを期待した。

私が証拠を提示したとき、私は証拠が返されることを期待した。

私が嘘を明らかにしたとき、私は真実が金、地位、権威、身分、自己利益より重要であることを期待した。

それは決して起こらなかった。

長い間、私は誰かが真実を語ることを期待し続けた。

誰も一度もそうしなかった。

それによって私は、人が真実を語っているかどうかを問うことをやめ、なぜ語っていないのかを問い始めざるを得なかった。

30年以上にわたる記録された経験を通じて、私はなぜ同じ問題が繰り返し続くのかを理解するようになった。

私は、人がなぜ沈黙するのか、人がなぜ自分の依存するものを守るのか、そして金が意思決定、行動、沈黙、結果、制度全体を形作ることによって人間の行動へ与える影響を理解するようになった。

理解すればするほど、人が学んでいる環境から適切に学ぶことがないまま、その環境の産物になり続けていることに気付いた。

人はそれによって形作られていた。

人はそれを繰り返していた。

人はそれを次へ渡していた。

その認識は、何よりも私を深く不安にさせた。

私は、子どもが同じ繰り返される世界を受け継ぎ、やがてそれを再び次へ渡す責任を負う大人になることに気付いた。

私は、人は見ることができないものから学ぶことはできないと気付いた。

現実が隠されたままなら、人はそこから適切に学ぶことができない。

人がそこから適切に学ぶことができなければ、それを繰り返し続ける。

私はそれを受け入れることができなかった。

私は、自分が見たものを見たうえで沈黙したままでいることを受け入れることができなかった。

私は、少なくとも何かをしようと試みることなく、未来の世代に同じ繰り返される世界を受け継がせることを受け入れることができなかった。

また、他の人が受け入れているというだけで、自分が嘘だと知っているものを受け入れることもできなかった。

私はそれに同調することができなかった。

周囲に合わせるために、それが真実であるふりをすることはできなかった。

最も簡単な選択肢は、それを受け入れ、それに同調し、その一部になることだったろう。

しかし、私は決してそうすることができなかった。

受け入れられるためでもない。

承認のためでもない。

快適さのためでもない。

金のためでもない。

どんな代償を払っても、そうすることはできなかった。

自分が嘘だと知っているものを受け入れるより、一人で立つ方が私には容易だった。

それを理解した時点で、何もしないことはもはや私には受け入れられなかった。

人が世界環境から学ぶのを助けることは、自分自身の一時的な人生よりも私にとって重要になった。

子どもが反復より良いものを受け継ぐのを助けることは、自分自身の快適さよりも私にとって重要になった。

もし私も沈黙したままでいれば、何十年も目撃してきた同じ沈黙の一部になるだけだと気付いた。

私はそれをする事ができなかった。

私は、人がそれを見ることができるよう、隠されてきたものを明らかにする責任を感じた。

なぜなら、人は見ることができないものから学ぶことはできないからである。

その理解はやがて、Book of Evidence、World Education Online、L2Q問い方システム、Q2L、Young Questioners、そしてその後続いた教育資料へつながった。

金は私を動機づけない。

人が世界環境から学ぶのを助けることを意図した情報が私の所有物であるべきだとは思わない。

それはすべての人のものであるべきだと私は考える。

だからこそ、情報、資料、教育資料は、人が読み、使い、共有し、配布し、そこから学べるよう無料で利用できるようにされている。

目的は決して金ではなかった。

目的は、人が世界環境から学ぶのを助けることだった。

目的は、子どもが反復より良いものを受け継ぐのを助けることだった。

私は、人がなぜ苦しみ、なぜ同じ問題が世代から世代へ続くのかが見える。

私は、子どもが、改善できるよう世界から適切に学ぶ方法ではなく、主として世界へ適応する方法を教えられる世界に来る理由が見える。

私はまた、これを変えることに寄与できる経路も見える。
だから私は試みた。

私は人を助けるために最善を尽くしてきた。

私は子どもを助けるために最善を尽くしてきた。

私は人類が世界環境を繰り返し続けるのではなく、そこから学ぶのを助けるために最善を尽くしてきた。

人がその機会を使うことを選ぶかどうかは、最終的にはその人たちの決定である。

私の責任は試みることだった。

私は、自分の成人期の人生を費やしてきたことを後悔していない。

時間、努力、犠牲、危険を後悔していない。

私はもう一度すべてを行うだろう。

たとえそれが何の助けにもならなかったとしても、私はもう一度行うだろう。

なぜなら、自分が理解するようになったことをいったん理解した後は、何もしないことは私にとって決して選択肢ではなかったからである。

これが、私が何もしないでいることができなかった理由である。

WORLD EDUCATION ONLINE

問い方を学ぶ

学ぶために問う

教育は社会を形作る。

問うことが教育を形作る。

L2Q・Q2L・YOUNG QUESTIONERS

これらの資料はすべての人のものであり、その意味が変更されないことを条件として、使用、共有、配布、適用されるべきである。

worldeducation.online

q2l.online

info@worldeducation.online

その他の本

Everyone Needs to Learn From This World

Why Education Must Improve

The Amazing Children: Journey to a Better World

人類は、理解していないものから進歩することは
できない

問い方を学ぶ

学ぶために問う

出版情報

© 2026 Sean Grinyer · 著者：Sean Grinyer

発行：World Education Online

29 Warelwast Close, Plymouth, PL7 1AP, United Kingdom

info@worldeducation.online

worldeducation.online · q2l.online

ISBN：978-1-0666017-3-8

日本語版初版、2026年